

『英訳

明治天皇御製

謹解』

第一卷



小野吉宣 著

目次

はじめに……………	(2)	英訳御製解説 その21……………	(47)
刊行に寄せて……………	(4)	「しら玉を光なしたも」[The brightest gem, while in the rough]	
英訳御製解説 その1……………	(6)	英訳御製解説 その22……………	(48)
「いさがある」[The man of meritorious]		「人みなのえらびし上に」[The gem selected with deep care]	
英訳御製解説 その2……………	(7)	英訳御製解説 その23……………	(51)
「とこしへに 民やすかれと」[Long may my folk rejoice in peace]		「あやまちをいさめかはして」[Let each remind the other of]	
英訳御製解説 その3……………	(8)	英訳御製解説 その24……………	(53)
「上つ代の」[From the laws of mine ancestors]		「心ある人のいさめの」[The sage expostulation of]	
英訳御製解説 その4……………	(10)	英訳御製解説 その25……………	(55)
「国民の力のかぎり」[With all your might and heart]		「おもふにはまかせず」[Tho' things may go,]	
英訳御製解説 その5……………	(12)	英訳御製解説 その26……………	(56)
「とる棹の」[With patience I will row and guide]		「廣き世にまじはり」[Wide is the world wherein they walk]	
英訳御製解説 その6……………	(14)	英訳御製解説 その27……………	(58)
「あがたもり こころづくしの」[The prefects of mine ancient]		「むらぎものこころをひろく」[Let but thy mind be wide and broad]	
英訳御製解説 その7……………	(16)	英訳御製解説 その28……………	(60)
「千よろづの民の心も」[The million hearts shall beat in peace]		「目に見えぬ神にむかひて」[Before the gods invisible]	
英訳御製解説 その8……………	(18)	英訳御製解説 その29……………	(62)
「白雲の よそに求むな」[Seek not beyond the vasty deep]		「くもりなき人の心を」[The heart of man true and sincere,]	
英訳御製解説 その9……………	(20)	英訳御製解説 その30……………	(64)
「世の中は たかきいやしき」[Let them that stand high]		「めにみえぬ神のこころに」[With heavenly powers invisible]	
英訳御製解説 その10……………	(22)	英訳御製解説 その31……………	(66)
「たらちねの にはの教は」[Tho' narrow is the path thy sire]		「あさみどり澄みわたりたる」[As broad clear and cloudless as]	
英訳御製解説 その11……………	(24)	英訳御製解説 その32……………	(68)
「やすくして なし得がたき」[What easy seem, yet of a truth]		「さしのぼる朝日」[As bright and clear and rosy as]	
英訳御製解説 その12……………	(26)	英訳御製解説 その33……………	(70)
「ならびゆく 人には」[Tho' thou be left behind by him]		「萩の戸の」[How sweetly sleeps the moonlight soft]	
英訳御製解説 その13……………	(28)	英訳御製解説 その 34……………	(72)
「おのが身はかへりみずして」[To labour and forget themselves]		「わがこころいたらぬ」[Far may my mind range o'er the land,]	
英訳御製解説 その14……………	(30)	英訳御製解説 その35……………	(74)
「おのがじし力つくて」[See each man do his very best,]		「わがこころおよばぬ国の」[The utmost confines]	
英訳御製解説 その15……………	(32)	英訳御製解説 その36……………	(77)
「家富みてあかぬ」[What though,with plate and down]		「山のおく島のはてまで」[Among the mountains I will seek]	
英訳御製解説 その16……………	(34)	英訳御製解説 その37……………	(80)
「よきをとる」[The bad I'll leave]		「いぶせしと思ふなかにも」[If mong the rank and wilding]	
英訳御製解説 その17……………	(36)	英訳御製解説 その38……………	(83)
「わが園にしげり」[They flourish and luxuriate]		「むらぎもの心のかぎり」[I'll do the utmost in my power]	
英訳御製解説 その18……………	(38)	英訳御製解説 その39……………	(86)
「ためしなく ひらけゆく世を」[With what unprecedented]		「未つひにならざらめやは」[What, in the fullness due of time]	
英訳御製解説 その19……………	(41)	英訳御製解説 その40……………	(89)
「もろともにたすげあひつつ」[Behold my folk each other help]		「おもふこと思ふがままになれり」[Because good fortune]	
英訳御製解説 その20……………	(44)	あとがき……………	(92)
「国のため心つくしし」[It truly melts my heart to think]			

はじめに

日本の伝統的な文化の一つに『万葉集』に始まる三十一^{みそひと}文字からなる短歌があることはご存知の通りであります。短歌の五・七・五・七・七の調べに私達は日本文化の連続性の確認をすることができるでせう。ところで、二十世紀最高の批評家と言はれるT・S・エリオットが「一世代文化(one generation culture)のアメリカには歴史が無い」と苦渋の表現を残し、晩年は英国に帰化したことは有名な話であります。

漱石が「明治は遠くなりけり」と嘆き悲しんだ「明治」と言ふ時代は、いかなる時代であったのでせうか。今日では、ますます遠くなって、どこかに行つてしまひ消えたのでせうか。

アメリカを代表するフォード大統領が昭和四十九年に、日本を訪問したときのことを少しお話ししてみませう。昭和天皇が迎賓館にフォード大統領をお迎へに向かはれ、一步一步踏みしめつつ階段を上られる足取りを見て、タイムといふアメリカの週刊誌は三十年前(昭和二十年のこと)を[Almost 30years ago, Ford was an officer aboard a U.S. aircraft carrier in the mid-Pacific when Hirohito ordered Japan's surrender.](三十年ほど前、裕仁＝天皇が日本の降伏を命じられたとき、フォードは太平洋の真ん中で航空母艦に乗り組む一士官であった。〈1974年12月2日号〉)と記してゐました。[In a graceful speech, Hirohito regretted War II and expressed thanks for U.S. help in rebuilding Japan.](気品に満ちたお話しの中で、昭和天皇は第二次大戦のことを悔いられた上で、日本国の再建に際し、アメリカが援助してくれたことに感謝の意を表された。)また、ご挨拶の中で日露戦争のときに時の大統領セオドア・ルーズベルトと米国民が、日本に理解と支持を示してくれたことに対し、まるで自分自身が受けた恩恵のやうにお礼を申し述べられた。そして、これは「私の祖父・明治天皇の時代のことです。」と言はれたのです。何の誇張も衒ひもなく「祖父明治天皇の時代のことです。」と言へるのが日本の天皇なのであります。なるほどデモクラシーで選ばれた大統領はアメリカの大権の保持者ではあるがアメリカの歴史の体現者ではないのです。フォード大統領は、スムーズな返答が出来なくて傍から見ても分かるほど緊張した様子であったさうです。フォード氏は率直な性質^{たち}のアメリカ人だったのでせう。時の総理・田中角栄に「昭和天皇の前に出ると今までに経験したことのない緊張をする。」と自分を隠さずに語つてゐたさうです。

昭和天皇と明治天皇の関係を考へて見れば、日本と言ふ国は歴史が連続してゐるのだと分かるでせう。織物で云ふならば、歴史の縦糸がしっかりと張られてゐるから日本文化の彩り^{いろど}が失はれてゐないのだ。そこに日本の国柄の特性があるのだと私は確信するのであります。

ところで現代の青年・学生そして子供たちの精神状況は極めて憂ふべき状況にあります。

私は学生時代に米国史、英国史を学びました。教員になりましてフランスの歴史を勉強しました。彼の国々の歴史を通観しての私の感想は、彼の国民、特に子供たちは、自国の歴史教科書を学べば自分の生まれた国に誇りが持てるやうに編纂されてゐるから、日本の子供たちに比べて幸せであるなど言ひ得ることでした。ドイツの哲学者フィヒテは「自国の歴史と言語に誇りを持たない民族は滅びる」との旨を『ドイツ国民に告ぐ』で言ひましたが、同じ事が日本に対しても当て嵌まるのではないでせうか。自分の国の歴史と文化に誇りが持てないので円満に精神が成長しない。だから、功利オンリー、欲得が全てと言ふ層が増加の一途を辿るのは、歴史と伝統の根を断ち切られた若者たちに取りましては、理の当然であります。

昭和四十六年に久留米附設高校で教鞭をとり始めて以来、県立の進学校で三十五年余り、英語を教へて参りました。その間担任として、学年主任として、進路主事として、研修主任として拙いなが

らも勤めました。振り返りみると、己を空しくして奉仕し人一倍励んだと自負してをります。

平成十五年、今までに体験したことのない総合学科の稲築志耕館高校に転勤になりました。毎朝読書の時間があり、先生も生徒も一緒に読書をするのです。短い時間ですが学校の中で自分を見つめ、本来の我を取戻す貴重な時間にすることができました。私は昭和五十二年に頂戴してをりました『A Voice out of the Serene(雲上の声)——英訳 明治天皇御製集——訳者 斎藤秀三郎』を書棚から取り出し、一語一語丁寧に辞書を引きながら読み始めました。天から有難い時間を戴いたやうな思ひになって読むことが出来ました。

その過程で、私に二つの窓が開けました。

① 一つは内への窓、明治天皇の御製を深く味はふことにより、明治と言ふ時代の概念的把握ではなくて、明治天皇ご自身の御ころ、豊かな情感の世界に直接ふれることが出来ました。言ふならば生命体としての日本文化への窓が開けました。

② 二つは外への窓、偏らない見方をするには両目を開けて見る必要があります。思ひ込みで先入観を抱いたりしていても意外と気が付かないものであります。明治と言ふ時代を現代のクライテリオンで裁いてしまふのではなく父祖が命をかけて生きた時代として両目を開けて暖かく捉へなおすには、英訳された明治天皇御製集を丁寧に読むことが、迂遠なやうで本質を掴む最良の道でありました。

「豚に真珠」「猫に小判」とは物の価値が分からない人のことであると『A Voice out of the Serene(雲上の声)——英訳 明治天皇御製集——訳者 斎藤秀三郎』を紐解くまでは、他人を批判する物指しの一つであると思ってをりました。ところが読み進むうちに明治から自分を見ると私自身が「豚」であり「猫」ではなかったかと思へて来ました。心が貧しいときは、「真珠」もいらぬ「小判」もいらぬと、心が充たされた心境に成り得てはゐないのに、直ぐに人を批判して仕舞ふのです。

『A Voice out of the Serene(雲上の声)——英訳 明治天皇御製集——訳者 斎藤秀三郎』を丁寧に読めば物質的豊かさの象徴である「小判」や「真珠」も全く必要ない心の豊かな精神に触れることが出来ます。バイブルを読めばキリストが甦り給ふごとく、『明治天皇御製集』を読めば明治天皇が私達の貧しかった心にも甦り給ひ豊かになるからであります。

猪年生まれの私も来年で還暦、六十歳になります。アンデルセンではありませんがイノシシである私の背中に乗り、明治と言ふ世界史上稀有なる時代にタイムスリップしてみませんか。猪突猛進の猪でありますから謹解に務めましたものの短慮から間違ひを犯してゐる面もあるかもしれません。其の節は率直にご指摘をお願いしまして私の「はじめ」の言葉とします。

刊行に寄せて

畏友、小野吉宣さんとは、40年近いお付き合いになる。学生時代に私が初めて参加した「合宿教室」の時から、普段は比較的無口な小野さんが突如すっと立ち上がり、後輩学生の曖昧な生き方を叱正する姿に震へ上がったものである。しかし一面、散策の折りなどに見せる人懐っこい笑顔に惹かれて、無理を聞いてもらったり甘へさせても頂いた。

冗談と思はれるだらうが、今回「英訳 明治天皇御製」の解説がメールにて配信されるまで、小野さんが英語の先生だと意識したことは殆どなかった。長年海外に在住した私が体験談などをする時も「へえー、アメリカ人ちゃーそげな考へばするちゃねえー」とあくまで謙虚に耳を傾けてくれるのである。

しかし流石に、英語教諭小野吉宣の読解力は本物であった。屈指の大英語学者である斎藤秀三郎氏の微妙な表現を深く味はひつつ、受験英語に慣れた戦後世代に理解しやすい文法解説を添へて知的好奇心も満足させてくれる。更に、英語自体の解釈に加へて、若い頃からの着実な読書に裏付けされた精神生活と、長年明治天皇御製を仰ぎつつ人生の指針として来られた方ならではの洞察が随所に溢れる内容には圧倒され、つい引き込まれるのである。

例へば、「たらちねの」を「thy sire(汝の父祖)」と訳されたことに対し、シェークスピアの英詩と紛ふ如き斎藤氏の表現を憶念して、「訳者はエリザベス朝(日本では安土桃山)まで歴史を遡らないと『たらちねの にはの教は せば(狭)けれど』の『狭い(narrow)』は理解できないと私たちに突き付けてゐる」と指摘される。(その10)

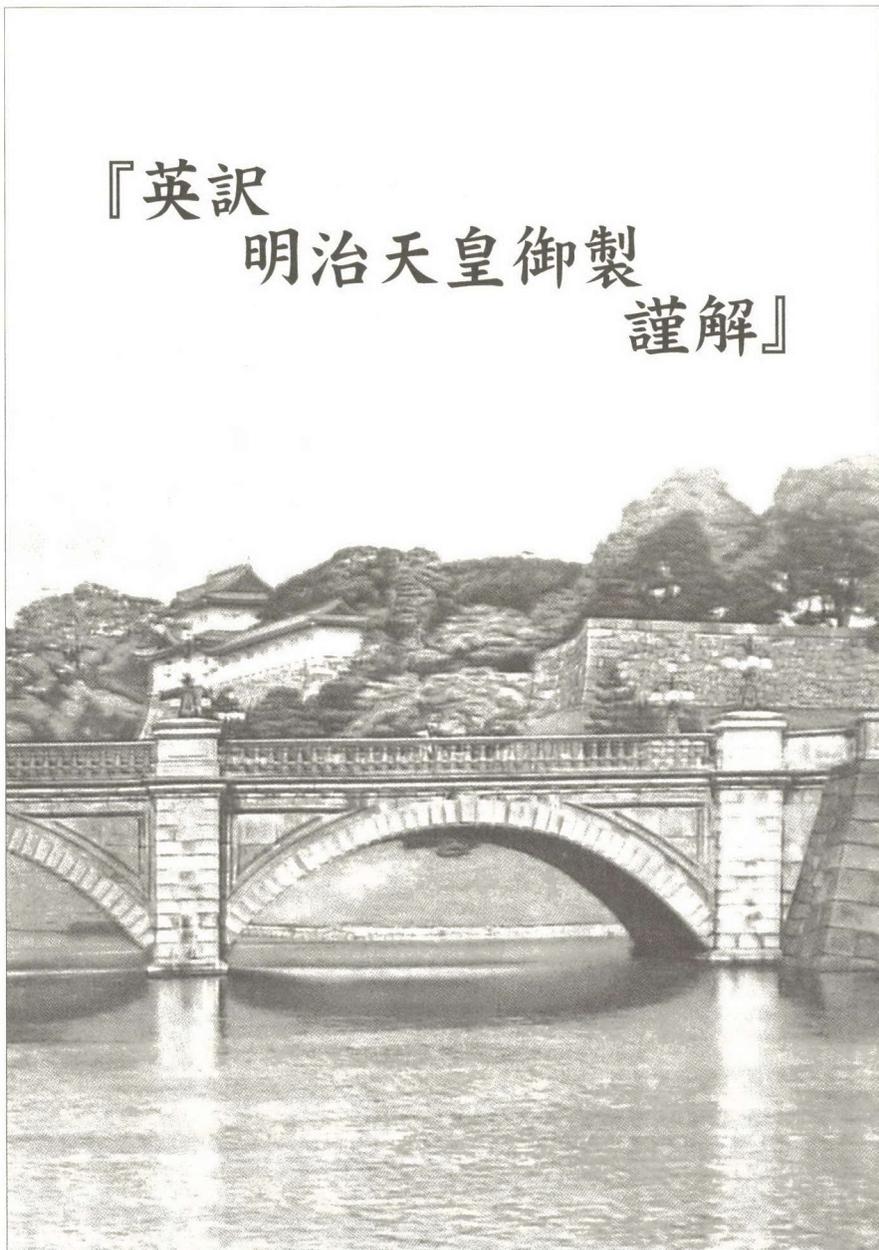
また、「白雲のよそに求むな世の人のまことの道ぞしきしまの道」といふ御製に関して、「英語では『白雲のよそ』が外国人に理解されないと考へられてか『広大なる海』といふやうに空を海に置き換へて表現してあります」とここでも訳者斎藤氏と小野さんの情緒は感応し合つてゐる。(その8)

フランス文化論の大家・竹本忠雄先生から「翻訳とは単なる言葉の置き換へではなく、双方の背景にある文化伝統を踏まへた“言語の等価交換”である」といふお話を最近伺つたが、英訳者斎藤秀三郎氏と小野吉宣さんの深い精神を透して出来上がった本冊子は、期せずして日英比較文化論ともなつてをり、今後欧米日本研究家の資料として、日本留学生の上級テキストとしてなど、各分野で活用される可能性を秘めてゐると信じる。

かつての“鬼軍曹”は最近では、指導する九州工業大学等の学生たちから“竹取の翁”と呼ばれてゐるさうな。その学生たちの勉強会で、毎週講義された記録がこの一書に結実したとのこと。現代の若者たちを「御製」に親しませるには、むしろ外国語を介在させることで新鮮な関心を抱かせることが出来るといふ、小野さんの深慮遠謀は見事に当たった。一般には相当難しい内容も学生たちの興味をつなぎ、その連続講義はまだまだ続いてゐるのである。九工大等の学生に負けずに本書を熟読頂ければ、小野さんと一緒に明治天皇の大御心に触れる機縁を恵まれるに違ひない。続編が今から期待される。

(株)寺子屋モデル 代表世話役社長 山口秀範
(第五十回全国学生青年合宿教室運営委員長)

『英訳
明治天皇御製
謹解』



『A voice out of the Serene』(雲上の声)-英訳 明治天皇御製集—として大正元年十月に、英語学者の齋藤秀三郎が明治天皇の御製 百三十八首を英訳して出版してみました。SEGクラブ(代表幹事 小野郁弥、松田福松)は、昭和五十二年五月三日記者没後半百年記念復刻版を、国民文化研究会(代表 夜久正雄)ししまの道会(代表、木村松次郎)の賛助を得て発行してあります。

「英訳 明治天皇御製集」が大正元年十月に齋藤秀三郎によって発行されてきたことはほとんどの人が知らないでせう。また、齋藤氏も歴史に埋もれてしまっていますが、氏の英語力は恐るべきもので、英語で書かれた「Practical English Grammar(全4巻明治37年~39年)(昭和27年松田福松先生により和訳され日本で出版)」は当時の英国の大学の教科書に使用されてきた程でした。前置きはそれくらいにして、それでは紹介に入ります。

英訳御製解説 その1

「いさをある」[The man of meritorious]

い
さを
ある
人
を
教
の
親
に
し
て
お
ほ
し
た
て
な
む
や
ま
と
な
で
し
こ

The man of meritorious deeds,
Let him exert his powers
To tend the growth and culture of
Yamato's tender flowers.

一行目から入ります。

Meritorious とは名誉を受けるに値する。Deeds とは行為です。The man of meritorious deeds とは「名誉を受けるに値する勲をたてた人に最大の敬意を払いませう。」と解されます。

二行目の Let him exert his powers において him とはThe man のことですから「家庭教育でも学校教育でも勲をたてた人に最大の力を発揮していただきませう。」と解されます。

三行目に進みます。

To tend the growth and culture of

to tend は教育の目的と方向性を表します。Growth は成長です。Culture は名詞では文化ですが。続くof から動詞的な意味が加味されるので「注意深い訓練によって精神、趣味、および行儀作法を向上させること」を意味してゐます。

四行目に進みます。Yamato's tender flowers.

だれのgrowthでありcultureなのでせう。それはYamato's tender flowers のであります。Yamato's tender flowersとはやまとなでしこのことです。なでしこは英語に直せば a fringed pink です。なぜYamato's tender flowers と氏は訳したのでせう。二つの理由が考へられます。一つは韻をpowersに対してflowers と踏ませるためです。今一つは明治天皇がこの御製を通して、他でもないあなた方日本婦人よと心を込めて呼びかけられてゐる。当時のあなた方の曾おばあさんがたは自分に明治天皇が呼び掛けて下さってゐると受け止めてゐたのです。詩は自己の内面に受け止めないと何の感興も呼び起こしません。そこを重視した氏はYamato's tender flowers つまり「大和の国に住むころの繊細で柔らかい花ばなよ」と英訳することでその情意を込めてゐると私は解するのです。いかがでせうか。ご感想を待ってゐます。

「とこしへに 民やすかれと」 [Long may my folk rejoice in peace]

とこしへに
民やすかれと
いのるなる
わが世をまもれ
伊勢のおほかみ

Long may my folk rejoice in peace
Watch o'er the sacred land,
Thou mighty Goddess of the Shrine
That stands on Ise's strand !

Long とは副詞で永くですが、文頭にあるから大変永くの意味になります。May my folk と主語の前にmay を置くと祈願文になります。Folk は 一般の人々のことです。The folk でなくて my folk と言っているところは、ただ集団的に人民とか国民といふのとは違ってmy family, my son, my daughter と言ふやうにintimacy(親密感)がmy folk には込められてゐると考へられます。

一行目は「大変永くわたしの国民が平安に喜んで過ごせることを祈る。」となります。

Watch over とは、見守るの意味でthe sacred land とは神聖なる國の意です。此処だけを解釈すると「神聖なるわが國を見守れ」と言う命令文です。三行目にはthouはyou の古語で汝の意味です。明治天皇が祈られた神は、mighty Goddess。力のある女神様といふことです。That stands on Ise's strand! このThatは関係代名詞で先行詞は三行目にあります。ですから、祈りの対象は伊勢神宮に鎮座してをられます女神様です。どなたであるか皆様ご存じでせう。天照大神様です。皆さんの国語辞典には載ってゐないと思ひますがどうですか？引いてみてください。私の学校が生徒に使はせてゐる「明治書院の国語辞典」には天の邪鬼は載ってゐるが天照大神はありません。伊勢エビはあるが、伊勢神宮はのせてありません。日本の神話はギリシャ・ローマ神話のやうに価値が無いといふ思想が根強く支配してゐるからでせう。日本人は日本の神話に根を下ろさないと立ち枯れになってしまう。

祈願の気持ちが強いから、このやうに命令調になるのでせう。第百十二代靈元天皇(1654~1732)は(1663~1687)のご在位で、江戸時代の天皇です。享保八年(1723)御年七十歳の御製は

神といま仰ぐにいとどめぐみありて守る言葉の道はたのもし
この神のめぐみをそへて守るよりさらに言葉の道ぞさかえむ
まもれ神ちとせの後もいく千年つきぬことばの道のさかえを

とあります。三首目には千年そこに止まらず数千年の後も「言葉の道」が栄えますやうにと強く祈り給ふ。その思ひが「まもれ神ちとせの後も」と三首目に続いて命令文の形を取って強い祈願の御歌となつてゐます。

明治天皇は伊勢のおほかみにかくも強く祈つてをられます。

明治天皇御製を拝誦します。

とこしへに
民やすかれと
いのるなる
わが代をまもれ
伊勢のおほかみ

「上つ代の」 [From the laws of mine ancestors]

上つ代の
御代のおきてを
たがへじと
おもふぞおのが
ねがひなりける

From the laws of mine ancestors
Never may I depart !
This is the great and main desire
That ever fills my heart.

Lawとは国民が守ることにしてゐるしきたりまたは規則、おきてです。Mine ancestorsのところは文法的にはmy ancestors (私の祖先たち)と言うべきところですが、Myでなくmineにスイッチされてゐるのは味はふべきところです。強弱、強弱のリズムを持たせるためにmyをmineにスイッチさせてゐます。すると、遠い遠い先祖の方々の響きが出てきませんか。声に出して、読んで感じ取ってみてはいかがでせう。鉄道の線路から (from)列車が外れると脱線して悲惨な事故となります。万一事故になれば多くの死傷者が出るし、その家族は不幸の底にたたき込まれてしまひます。列車にとっての線路のやうに決して反れてはならないものが作者明治天皇にありました。それは一行目のthe laws of mine ancestors(朕の祖先の方々が遺し給ふたおきて)でありませう。

Never may I depart !

！をつけてゐる通り祈願文の形を取つてゐます。Never とは最も強い否定の副詞です。=not in any degree, way, or condition (どんな程度、方法、または条件でも not ~ない)の意味です。私達はこの程度反れることぐらいまあいいかとすぐ妥協したり、この方法でならば許されるだらうと安易に解釈したり、相手が完全に悪いのだからと報復攻撃したり、よくやっつてしまふものである。しかしここでは違ふ。朕の祖先の方々が遺し給ふたおきてから「決して私がそむくことがありませんやうに」と神に心を込めて祈つてをられる。と解されます。明治天皇にをかれましてはその御姿勢は一貫してゐました。二つ例を挙げてみませう。

明治37年(1904)日露戦争のころの御歌に

仁	國のため	あとなす仇は	くだくとも	いつくしむべき	ことな忘れそ
---	------	--------	-------	---------	--------

臣下 乃木大将にもこの姿勢はきちんと受け止められ実行されてゐました。「水師營の会見」を小さい頃から歌つてゐました私達の年代には旧聞に属することなのですが、一番と三番四番を引用しますから参考にしてください。

1、 旅順開城 約なりて 敵の將軍ステッセル 乃木大将と会見の ところはいづこ 水師營	3、 乃木大将は 厳かに 御めぐみ深き大君の 大みことのり伝ふれば 彼かしこみて謝しまつる	4、 昨日の敵は今日の友 語る言葉もうちとけて 我はたたへつ彼の防備 彼はたたへつ我が武勇
--	---	---

勝利国が敗戦国の大将に嘯くのではない。両雄が相讃へ合ふその場から平和が招来してゐるのです。このすばらしい光景は仮想現実にあらず、歴史的事実に他なりません。イラクとアメリカの戦ひが終はつた時に、敵将フセインはどうしたか？お互いの武勇と防備を握手して讃へ合ふことが成されたか？ 日々のニュースで見るにつけ心が痛む事件が続出して止まない。平和は未だ訪れない。文明の進歩といふ観点から観るとどうでせう？日露戦争の頃の方が余程進んでゐたと思はざるを得ません。明治38年(1905)には

おのづから	仇のころも	なびくまで	まことの道を	ふめや國民
-------	-------	-------	--------	-------

ご自身が厳しく誓ひ神前にお祈りされたこと。それが、国民にも向かひ。「いつくしむころ」をどこまでも貫き、「誠の道をふめ」と教導する御歌となつてゐます。「まことの道をふめや國民」と国民一人一人に祈りを込めて、言ってをられるやうに響いてきませんか。動乱の世界を見るにつけ、絵空言でなく、確かに、平成の御代にも生き生きと迫ってくる御歌ではありませんか。

三行目に行きます。

This is the great and main desire

明治天皇が大切にされるこのことはgreatでありmain(主要な) desire(願望)である。その願望は4行目で次の様に説明を加へれるのです。

That ever fills my heart.

Ever = at all times は過去から現在までいつもの意であります。「振り返ってみれば、天皇の位についてからずっといつもその願ひは、絶えることなく私の心に充ち満ちてゐたなあ。」と内面照射して詠ひ晴らしてをられません。

「国民の力のかぎり」[With all your might and heart]

國
たみの
力のかぎり
つくすこそ
わがひのものと
かためなりけれ

With all your might and heart and soul,

My children, work away !

And our Japan shall stable stand

For ever and for aye.

一行目の **With all your might** とは「あなたの全力をこめて」の意です。Might= power to do something(何かを行ふ能力)と力= forceの意味を持つので「力のかぎり」を英訳するならmightだけでいいのです。しかしここでは and heart and soul と続いてゐます。翻訳者齋藤氏はこれだけでは御製の本当の意味が伝はらないと考へてのことです。Heart には①courage(勇氣) ②spirit(元氣)の意味が込められてゐます。さらにAnd soulとおかれてゐる。Soulとは=spiritual part (靈魂)の意味があるから「あなたの内にある靈的な力も込めて」。だから、宗教的な力も加はると解して翻訳されたのでせう。力の三形態—Might,heart,soul—を目に見える形で説明させよう。あなたが今から何か新しいことを試みると仮定します。あなたが両手はこぶしを握りしめ、両足をしっかり大地につけて、立ってゐる姿がmightだと思ひます。他のために何かやってみようとするときに私利私欲に発してゐないか、または激情に流されてはゐないか、よく自分の内面を見つめる必要があると思はれます。それは胸(heart)に手を当てた姿ではないでせうか。三番目のSoul はどんな姿がイメージされますか？私には神様の前にひざまづき、両手を合はせ、祈ってゐる姿が思ひ浮かんできます。Soulから生まれる力を昔から日本では神通力と言ふではありませんか。Mightにheartとsoulを英訳者が加へたのはそのやうな思ひを受け止めたからだと思はれます。

二行目 My children, work away! に行きませう。

「国民がそれぞれの役割を力のかぎり尽くせ」と誰に、呼びかけられてゐますか？ 2行目にある My children です。私の子供達よと呼びかけてをられます。明治天皇にとって国民一人一人が my children であると齋藤氏は受け止めてゐます。このことは注目に値します。一般論ではありません。氏自身が御製を読み、明治天皇から my children と呼びかけて戴いてゐると感じてとってゐないならば、このやうな表現は生まれて来ません。

My children , work away ! workのあとに何故 away がついてゐるのでせう。一つの理由は、away には =without interruption or hesitation (中断しないで、躊躇はずに)の意味がある。Work に awayをつけたときの気持ちは全力を尽くした後のさわやかさが込められてゐる。それだけではない。「つくすこそ」「かためなりけれ」と係り結びを意味の上からも表現しようとした苦心が読みとれます。 Work Away (働き尽くす)と永遠にの意味を持つ aye [e i] が韻を踏み、国民の琴線に永遠に触れる調べを生み出す詩となつてゐるのです。

三行目に行きませう。And our Japan shall stable stand と続きます。And はいつもの「そして」ではありません。Work away ! は命令文だから、and は「さうすれば」の意味になります。前行の work away が条件となり、帰結としての and であり、もし力のかぎり尽くされるならば、「さうすれば~でせう」となります。Our Japan shall stable stand は our Japan は三人称でそれに続く shall は話し手の意志を表すこととなります。だから一人称の意志となるので we を主語にして書き換へると意味がよく分かります。(高校の英文法で He shall come early tomorrow. = I will make him come early tomorrow. などとして習はれた shall です。)

We will make our Japan stand stable.

(If we work away.) が条件となつて、「私達は日本をしっかりと安定させるでせう。」と解されます。私達は学生は学生として、教員は教員として、work はしてゐます。Work away と言へるやうにそれぞれの本分を尽く

してゐるか。この詩を読んで自分に振り返って考へてみたいものです。Workするのは、ただ自分が良い成績を修めるためであるとか、安定した職業に就くためだけが目標になってゐないでせうか。それではよい成績をとればよい職をえれば更にはよい地位につけば、workすることが終着することになりませう。work without interruption（中断することなく働き尽くす）には心に「日本をしっかりと安定させる」ことが目標として描かれてゐる。修身、齊家から、この視点一治国平天下をお互ひに心に湛へ、見失はないやうにたとへ匹夫の私もwork away したいものです。

四行目には for ever and for aye となり締め括られてゐます。「永久に」とはfor ever だけでも意味は通じてゐます。何故for aye と畳みかけるやうに言つてあるのであらうか考へて見ませう。永久とは有限の命を無限生命へと相続してゆくことでせう。一日一日の誠の積み重ねが無くて永久へとは繋がって行くまい。芭蕉の句に「秋深し隣は何をする人ぞ」は俗に近代のニヒリズムの走りだと言ふ批評家があるが、それは全くの誤った解釈だと思ひます。芭蕉は一日をwork away して夕暮れを迎へてゐる。営み仕事はいろいろあらうが一日を十分に力のかぎり尽くして隣の家に住んでゐる人も同じ気持ちで夕暮れを迎へてゐるに違ひない。ここには語り交はすことがなくても永久へと繋がる一日を終へてゐるもの同士の共感一同胞感が流れてゐる。その感動が芭蕉の句のすばらしいところでせう。私にはand for aye は有限の命を意志的に寄り合はせ永久生命へと燃焼せんとする祈りの力(soul)が込められてゐると感じられてならないのであります。それでは御製を再度、載せさせて戴きます。声に出して拝誦して下さい。

か	わ	つ	力	國
た	が	く	の	た
め	ひ	す	か	み
な	の	そ	ぎ	の
り	も		り	
け	と			
れ	の			

私達は明治の父祖たちが「力のかぎりつくす」ことをなされたが故に、今日の日本があることを忘れては決してならないでせう。「力のかぎりつくす」一日一日の積み重ねが、私達にとりましては、明日の日本への「かため」ともなると示唆されます。



●昭和五十三年三月、宮地獄での合宿

「とる棹の」[With patience I will row and guide]

とる
棹の

こころ長くも

こぎよせむ

蘆間の
小舟

さはりあるとも

With patience I will row and guide

My bark that slowly speeds,

Although the passage be not smooth

Among the rustling reeds.

With patience = patientlyは「我慢強く」であります。気が短くでなくて「こころ長く」の意味で文頭に置かれてゐます。Row は舟をこぐ。Guideはto show the way to~「～へ道案内する」。Row とguide の目的語は2行目にmy bark と置かれてゐて、「私の舟」はthat 関係代名詞 で説明されてゐます。Slowly speeds (ゆっくりと進む)「私の舟」と言っております。「こころ長くも、私はこぎよせませうゆっくりと進む 私の舟を」3行目に行く前に次の上の句を見て下さい。御製は「とる棹の こころ長くも こぎよせむ」となっております。棹を手にとって舟をこいでゐるのは誰でせうか。棹をあやつるのは船頭さんだからsailorが主語に置かれて英語に直される筈ですが、一行目にあるのはsailorではありません。主語は[I] (私)となつてゐるのに改めて気づかされます。何故sailor でなく私である [I]に翻訳者はしたのでせうか。じっくり味はってみるべきところだと思ひます。「船頭多くして船山に上る」といふ諺がありますが、船頭がただ単に権力を握つてゐる政治家で「こころ長くも こぎよせむ」ことができたでせうか。右に行き、左に行く内に、反対勢力に座礁させられてしまつてゐたのではないでせうか。三百年の鎖国を取り払ひ国際社会に船出してゐる明治の日本をあるがままに見てみる必要があります。西郷隆盛が大久保利通が、また岩倉具視が伊藤博文が船頭であつたとしても、何度も座礁してゐたのではないでせうか。夏目漱石の「こころ」に次のやうな箇所があります。

Then at the height of the summer Emperor Meiji passed away. (すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。) I felt as though the spirit of the Meiji era had begun with the Emperor and had ended with him.(其時私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたやうな気がしました。) I was overcome with the feeling that I and the others, who had been brought up in that era, were now left behind to live as anachronisms. (最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。) これは、「最も強く明治の影響を受けた私ども」といふ夏目漱石の明治天皇に対する飾らない率直な感懐であつたと受け取つてよろしいと思はれます。翻訳者齋藤秀三郎も同じやうな感懐を持ったに違ひありません。だから「とる棹の こころ長くも こぎよせむ」の主語は一般的に船頭さんではなくて明治天皇である[I] (私)であらねばならなかつたのです。十一月三日文化の日は明治天皇のご生誕を記念する日であつたことが遠くに霞んでしまつてゐる。この日がいささかでも明治を偲ぶ日であつてほしいと願ふ気持ち強いが故に筆を進めてはゐます。

四行目に行きます。

Although the passage be not smooth

(たとへ舟の進路が平穏ではなくとも)の意味を持つ譲歩構文です。mayを省略し、not と be の語順を転倒させて古文調に格調高く表現されてゐます。現代的には

Although(= even though) the passage may not be smoothと書き直されます。

舟の進路 (passage) に定冠詞 the がついてゐますが このthe は宇宙に一つの the と齋藤氏は名付けてゐます。「蘆間の小舟」の進む道につく the だと考へられます。The 一つでも深い意味が持たせてあるのです。明治天皇がこいでをられる「小舟」何をイメージしてあると思はれますでせうか。答へは自づとお分りになると思ひます。

最後の行に行きます。

Among the rustling reeds.

Among (= in or through the midst of ~)「～の真ん中に、または～の間を通り抜けて」の意味です。The rustling reeds 「小さく早い連続音がしてゐる林立した蘆の中」を小舟は押し分け、押し分け通り抜けようとしてゐます。

ここで御製を再度掲載します。

とる棹の
こころ長くも
こぎよせむ
蘆間の小舟
さはりあるとも

この御製は二通りの解釈があると思はれます。一つは「蘆間の小舟」をご覧になっての情景歌。今一つは国民に対する教訓歌としてであります。いままで私は情景を詠まれての教訓歌だらう。と受け取ってゐました。英訳御製を丁寧に解釈する内に全く違った解釈をしてゐたと気づかされました。「小舟」には夏目漱石も斎藤秀三郎を始め、明治を生きてゐた私達の先祖も乗せて戴いてゐたのだと思へて来たのです。蘆間の小舟で日本は開国し世界に向かって進み出してゐたのです。大波が来ればいつ海の底に沈むかしたるものではない「小舟」であつたのです。

明治天皇の御製「四海兄弟」

よもの海
みなはらからと
思ふ世に
など波風の
たちさわぐらむ

は「世界の平和」を明治天皇が祈つてある歌だと解釈されて 人口に膾炙してゐるやうですが。これはほんの一面の解釈であつて、明治三十七年に於ける明治天皇の思ひの深さには全く届き得てゐないと言はざるを得ません。My bark (私が棹をとる小舟) に乗せて戴いてゐた国民的幸福をしみじみと味はひ直す機縁となる内面告白の御製なのです。



●昭和六十一年
8/31~9/1
可也山合宿

「あがたもり ころづくしの」 [The prefects of mine ancient]

あ
が
た
も
り

心
づ
く
し
の

ほ
ど
み
え
て

藁
や
の
け
ぶり

た
ち
ま
さ
り
け
り

The prefects of mine ancient realm

They labour not in vain,

For ampler rise the curling wreaths

From straw huts of the plain.

Prefecture は「県」であり、そこを守る役目の人達が「あがたもり」。英語に直すとthe prefectsです。どこの「あがたもり」であるかを of 以下で説明してあります。Mine ancient realm は「悠久の昔より治められてきた我が国土」と解されます。一行目は「悠久の昔より治められてきた我が国土のあがたもりたちよ」と語りかけるやうに始まります。

2行目の They は一行目を受けた代名詞です。They labour = They exert themselves and toil。「あがたもり達は努力し骨折った」台風の何度もの襲来があったであらう。地震に見舞はれたところもあっただらう。いつのときにも県民のために「心づくし」をしてくれた。その結果が not in vain。これは二重否定です。ですから、not + without success 「うまく行かないことを骨折りで乗り越えた」と解されます。例へば、努力をした、but in vain「だが、不成功に終はった」むなしさが残ります。一方、not in vain 「努力が実を結びうまく行った」となります。They labour not in vain 二重否定だから肯定感が倍加され達成できた充実感と喜びが醸し出されてゐます。声に出して読んで味はひたいところです。

明治天皇は何をご覧になって喜んでをられるのでせうか。

3行目に進ませう。

For は等位接続詞で前の文の根拠を表すために公式的に用いられるもので because 「なぜなら」の意味を持つてゐます。今から前の文を受けて私の喜びの根拠を述べますよと言ふために For が先づ、置かれてゐます。For と読んで少しプレス(息つき)を入れて ampler と読んで行ってほしいと思ひます。ここは平常の語順では主部が the curling wreaths であり、動詞 rise(のぼる)と置かれ 補語の ampler(より豊かな)となります。Ampler は比較級で後に来るべきthan before は省略されてゐます。意味を一度には取れませんが「the curling wreaths が以前にも増して豊かに立ちのぼってゐる」と訳して置きませう。「煙突から煙が舞ひ上がってゐる。」と言ふ日本語は、英語では「Smoke is coiling up from a chimney.」です。ならば、「The curling wreaths」は「smoke」の意味で用いられてゐるのがお分かりになると思ひます。

翻訳者斎藤氏は何故に「smoke」とせず「the curling wreaths」とせねばならなかつたのでせうか。考へて見る必要があります。Wreaths は(=something twisted or intertwined into a circular shape 編んだり繕り合はせたりして円い形にしたもの)。Wreath には二つの意味があります。①garland(花冠)、A wreath of flowers は「花輪」です。②(煙などの)渦巻きの意味があります。Curl は渦巻くの意です。煙がcurling 渦巻いて天に昇ってゐるのでせう。翻訳者は「明治天皇が今日ご覧になってゐる竈から立ち上る煙はただ「smoke」と翻訳しては明治天皇の喜びのお気持ちを表現したことには成らない。」と感じたに違ひありません。花ならば、あたかも美しい花で作った花冠が立ち上ってゐるかのやうに喜んでをられる。目にしみる単なる「煙」ではなく、のどから内心から沸々とわき上がるやうな喜びの表現を翻訳者は苦心して探したのでせう。Ampler に始まるこの行の語順転倒は強調構文となつてゐるのです。Ampler rise the curling wreaths. Ampler と目で受け止め、the curling wreaths と心に受け止め直してゐる。このやうな表現とせざるを得ない感動をこの御製から受け取つてゐるが故の作と私は思ひますが皆さんはどう思はれますか。

同僚の若い日本史の先生に「民の竈がにぎわつてゐるのを喜ばれた天皇は誰でしたか？」と聞いたが「存じま

せん」と言はれた。家に帰って父母に聞くと「その方は仁徳天皇様のことだ」と打てば響くやうに返って来た。歴史の伝承がどこかで途切れてしまっているのだらう。「少年日本史」(時事通信社)の仁徳天皇のところを読み直してみました。

「仁徳天皇の御代、…その御所は質素を極めていました。ある時、天皇高殿より四方をご覧になると、一向煙が立っていないので、百姓は貧しいのだとお悟りになり、三年間、課役を免除せられました。その三年間、宮中では非常な御儉約でありましたが、三年後に高殿にお登りになると、あちらにも、こちらにも、煙が出ていました。天皇は皇后をかえりみて、『國は既に富みを得た、今は心配も無くなった』と仰せられました。

高 き 屋 に	登 り て 見 れ ば	煙 立 つ	民 の か ま ど は	に ぎ は ひ に け り
------------------	----------------------------	-------------	----------------------------	---------------------------------

という有名な歌は、後の人が、仁徳天皇の御心を歌にあらわして、その御徳を讃えたものでありますが、いかにも良く天皇の仁慈の御徳を表した歌であります。」(61～62頁)

昔、私の高校の日本史の授業ではこの御歌は習ひました。但し先生は「仁徳天皇だけは民を愛される特別な天皇だ」と強調された。亡くなられた先生であるが、明治天皇のこの御製を合はせて教へて戴いてゐたならば日本の歴史の本質を道草せず知ることが出来たのになあと悔やまれるのであります。

最後の行に進みます。From は起点を示す前置詞です。どこから「けぶり」は立ち上ってゐたか。Straw huts 藁屋からです。Hutsと複数にしてあるから藁屋は何軒もあると思はれます。Of the plain.見晴らしのよい広い平原に立つ藁屋から「けぶり」が明治天皇は「たちのぼる」ではなくて「たちまさりけり」とご覧になられたのです。語順転倒しての ampler rise the curling wreaths From straw huts of the plain.

に実によくそれが表現されてゐるなと思はれます。

この御歌は明治の御代を通観させる名画になってなつてゐると思はれませんか。藁屋にすむ民の竈からいくつもいくつも輪を描いてのどかに煙が立ち上つてゐる。そこにお立ちになる天皇は「あがたもり」を心から御ねぎらひになる。その情景は一幅の名画であると私には思はれるのです。

前筑紫野市長の楠田幹人氏が今上陛下を筑紫野にお迎へした話が思ひ出されます。福岡に行幸に成られた天皇陛下を空港でお迎へした楠田氏は全ての日程が終はつて、また空港にお見送りに行ったさうであります。立ち並んでお見送りをする最後のところに筑紫野市長として立つてゐたさうです。市長の前で立ち止まられた天皇陛下は「これからも筑紫野の方達のことをよろしく願ひします。」と楠田氏に心を込めておっしゃられたのださうです。全身に電撃が走つたやうに感動したさうです。「取るに足らない私にこんなにも深い思ひを託して下さい」と思はれて、涙がぼろぼろと流れて仕方がありませんでした。と語られてゐました。仁徳天皇の御代も明治の御代も平成の御代も民に仁慈をたれ給ふ歴史の伝統は脈々と流れてゐると私には思はれますがいかが受け取られましたか感想をお待ちします。



●昭和六十一年 10/10 萩探訪

「千よろづの民の心も」 [The million hearts shall beat in peace]

千
よろづの
民の心も
治まらむ
誠ひとつを
もて教へなば

The million hearts shall beat in peace,
And discords shall subside,
If with a heart sincere and true
I strive to teach and guide.

詩文の構成から先づ見て行きます。1、2行目にあるのは、条件を受けての帰結の文です。「もし～ならば」の条件は3、4行目に配置してあります。

1行目のThe million hearts shall beat in peace, のshall は単純未来ではありません。話者[1] (私)の意図、決意が込められたshall だと考へられます。[1]を主語にして書き換へますと次のやうになります。

①I will make the million hearts beat in peace, (私は千よろづの民の心を穏やかに鼓動させたい)

2行目に行きます。discords は= lack of agreement or harmony(一致または調和を欠いてゐる状態)の意味を持ちます。Subside は動詞で = to become quiet or less (穏やかになるまたは減る) の意味を持ってゐます。2行目も同じやうに、[1]を主語にして書き換へられます。

②I will make discords subside. (私は 民の調和を欠いてゐる心の状態を穏やかにしたい)

翻訳者は4行目の主語[1]に合はせて、最初は①と②のやうな英文を考へたかもしれない。しかしそれでは、御製の「民の心も」のところが「民の心が」になってしまひさうです。使役動詞の強制度は make、have、let の順になります。私も民も共にの「も」を表すにはここではlet で書き換へる方が適切だと思はれます。

①は I will let the million hearts beat in peace.(私は千よろづの民とともに心穏やかにならう)

②は I will let discords subside.(民の心と一致して穏やかに治まるやうにしよう)letの方が君民唱和のニュアンスは伝はります。しかしこのやうに言い換へただけで詩を読んだことにはどうもなつてはゐないやうです。帰結では翻訳者は[1]を使つてゐないので。何故天皇である[1]を使はなかつたのでせうか。ここで考へて見る必要があります。Shall には話者である天皇の意志を読み取らなければ成りませんが、そのまま[1]で詩として表現しては西洋列強の君主や大統領と混同される恐れがあると考へたからでせう。日本の天皇はご存じの通り、ご自分の業績を国民にアピールして語ることをなされません。「わたくしなし」無私を行じてをられる方が天皇であるから、The million hearts でこの詩は始めなければならぬと翻訳者は考へたに違ひありません。

3行目に進みます。

If with a heart sincere and true Ifは条件を表す接続詞で「もし～ならば」の意です。With a heart ～ のところはsincere は形容詞で(誠ある、誠意ある)、true も形容詞で(虚偽の“false”に対し真の、まことの)の意味を持ち、前にある heart を修飾してゐます。「誠意あり国民に信頼されるひとつの心で」と解しておきます。

4行目に進みます。

I strive to teach and guide.

Strive (to do something) は動詞で(何々せんと)刻苦する、勉勵する

の意で使はれてゐます。Teach は教える、教授するの意ですが、御製の「誠ひとつをもちて教へなば」の「教へる」を受けた teach でせう。翻訳には teach の後に and guide となつてをります。Guide は teach の同類語として教導するの意味で用いられてゐるのでせうか。詩の中でのand は、会話の中のand とは全く重みが違つてきます。Andのあとにまう一度strive to を補ひ、And strive to guide.と読んで下さい。「教へるのに刻苦勉勵

し、and「その上で」更に検討を重ね *strive to guide* と読まないこの詩は、読んだことにはならないと思ひます。そこで、Guide をもっと詳しく辞書で調べて見る必要があります。昭和9年発行の斎藤秀三郎の「英和中辞典」を引いてみれば*guide*(国事などの)舵をとるがあります。[1]であらせられる天皇が刻苦勉励して「千よろづの民を」教へ導かれるだけでなく、*guide* (国事などの)舵をとられるが故に、上の句にあります「千よろづの 民のこころも 治まらむ」が「民の心が治まり」「國が治まる」と平仄があつて来るのではないでせうか。ご感想をお聞かせ願ひたいところです。

この御製の「誠ひとつ」と言ふところから、吉田松陰 先生の「至誠にして動かざるものは、未だこれ有らざるなり。」が思ひ浮かびます。松陰先生は言はれる。「反求(反りて求む)の二字、聖經賢伝、百千万言の帰着する所なり。在身(身に在り)の二字も、亦同じ工夫なり。天下の事、大事小事、この道を離れて成ることなし。大、四海を包み、剛、金石を貫く。あに復他道あらんや。」

「反求」されるころの姿勢は *with a heart sincere and true* に表現されてゐます。日本国の一切の責任は「在身」我が身にありと受け止めてをられます。明治天皇の「まことひとつ」*a heart*に私達のこころが吸ひ寄せられて行く、そんな感想を懐きました。



●昭和五十七年三月 志賀神社での合宿

「白雲の よそに求むな」 [Seek not beyond the vasty deep]

白雲の
よそに求むな
世の人の
まことの道ぞ
しきしまの道

Seek not beyond the vasty deep
Of human life the way,
For Shikishiman's is the path
Of true sincerity.

1行目 seek not は don't seek (求むな)の文語的表現です。動詞seekの目的語は二行目の the way (道)になってをりますから、beyond the vast deep of human lifeは、挿入された場所を表す副詞句です。なぜ挿入句としたかと言へば、二行目の最後の語way と四行目の最後の語 sincerity が韻を踏むやうに工夫がなされてゐるからと考へられます。

Beyond= on the other side of (~の向こう側で、に)の意です。Deep は散文では「深い」と言ふ形容詞ですが、詩の中では違った意味で使われます。The deep とは詩語では=the sea (海)を表現してをります。The vast deep は「広大なる海」と解されます。Of は(同格関係)のof であり、前にある「広大なる海」とhuman life (= 人生)は同格関係にあると考へられます。1, 2行目を訳しますと

「人生といふ広大な海の向かう側に
人としての道を求むるな」

となります。英語では「白雲のよそ」が外国の人に理解されないと考へられてか「広大なる海」といふやうに空を海に置き換へて表現してあります。その理由は私にはまだ分かりません。何れ勉強して解明したいと思つてゐます。皆さんも考へてみて下さい。

三井甲之著「明治天皇御製研究」(國文研叢書18)には「個人と国家—その2—」の冒頭に上の御製を引用して、次のやうに言つてあります。「しきしまのみちは、故にまた人生法則は、これを現世の外に、現実をはなれたる理論に求むべきではなく、それをこの世の人のあるがままの現実生活のうちに求め、またそれによって現実生活をみちびくべきものである、とこの大御歌を解し」てをられる。私達の人生法則を「あるがままの現実生活のうちに求める」とはどのやうに受け止めたらよいのでせうか。少し難解な文章ではありますが、現実離れをしたユートピア思想や耳新しいイデオロギーなどには振り回されるなど言ふことでせう。源実朝の歌に「心の心をよめる」

神といひ仏といふも世の中の人このころのほかのものは
があります。小林秀雄は「煩瑣な混乱した当時の宗教上の教養に足をとられた歌人等の間で、彼はたった一人でぽつりとこんな歌を詠んでゐるのである。」と実朝のこの歌を評価してゐます。神であるとか仏であるとか、心の心を求めて現実から乖離してしまふのでなく、あるがままの生活のうちに、しっかりと足をつけて感動を表現してゐる。「まことの道」を「白雲のよそに」求めてゐない敷島の道として実朝のこの歌は私の心に強く迫ってきます。

3, 4行目に進みます。

For (= because) 「なぜなら」と1, 2行目の理由をここで述べて行きます。Shikishiman's の後には way が省略されてゐますからShikishiman'sは「しきしまの道」と言ふことです。Sincerity は真心の意ですが、英語では2つの意味から説明されます。①(= freedom from pretense)「偽りのないこと」②(= genuineness) 「本物であること」。ですから、The path of sincerity だけで御製の「まことの道」は翻訳された事になるわけです。なのに何故sincerity に true が付けてあるのでせうか。

翻訳者の心に迫つて考へて見る必要があります。True はご存じの通り「真実の」の意です。この場合「真実の」とは英語に直すと(= that can be relied on) 「信頼され得る」となります。「敷島の道」とは日本古来、万葉集

に遡り和歌の道として今日に伝えられてゐる道のことです。5. 7. 5. 7. 7の三十一文字に表現されて true は「信頼され得る」でせう。Sincerity(まごころ)が主観的表現に陥らず、客観性を充分に持っている正真正銘の「まことの道」となるべく sincerity にtrue が付け加へてあると私は受け止めます。

3,4行目を訳すると、「なぜなら 敷島の道は正真正銘のまことの道だからです。」となります。これは私のささやかな感想です。

皆様はいかがは思われますか。ご感想をお聞きしたいところです。



●昭和六十二年 阿蘇合宿教室



●夜のつどひ

「世の中は たかきいやしき」 [Let them that stand high]

述懐 (明治三十七年)
 世の中は
 たかきいやしき
 ほどほどに
 身を尽くすこそ
 つとめなりけれ

Let them that stand high in the world,
 Or them that lie beneath,
 Each do the utmost in his gift
 And tread in duty's path !

英文の構成は Let + them + or them + do + and tread~ ! them と or them が Let の目的語で do と and tread が原型不定詞であり、目的格補語となつてをります。一行目の彼らと二行目の彼らに御製の作者明治天皇が使役動詞の一番やわらかいLetで親しく呼びかけてをられる、そんな形の英詩となつてをります。

1行目に行きませう。Let them that stand high in the world, them の後のthat は関係代名詞で them がどう言ふ人であるかを説明してゐます。「世の中の高い地位に立つ」them (人々)と解釈されます。2行目は同じやうに them の内容をthat 以下で説明してゐます。Lie は「~に位置してゐる」beneath =lower than ~ 「~より低いところ」の意です。二行目は「より低いところに位置してゐる人たち」と解釈されます。

3行目に進みます。1行目と2行目の them を受けての each が行頭にあります。Each of themの意です。地位の高い人々もより低いところに位置してゐる人たちも each 「一人一人が」に焦点が定められ、each がキーワードとなつて、3行目、4行目が展開されてゐます。国民の一人一人はどうすべきだと言はれるのかと言へば、先ずはdo the utmost in his gift 「それぞれの天分を生かし、最大限の務めをする」こと。And tread in duty's path! Tread は動詞で「徒歩で歩く」の意味を持つてゐます。In duty's path は「義務の道」です。3,4行目の意味を取れば次のやうになります。

「 国民の一人一人がそれぞれの天分を生かし、
 最大限の務めを果たし、義務の道を歩もう ! 」

三井甲之「明治天皇御製研究」68頁に「述懐」

世の中はたかきいやしきほどほどに身を尽くすこそつとめなりけれ(明治37年)
 たたかひの道にはたたぬ国民もちちにころをくたくろかな(同)
 国をおもふみちにふたつはなかりけり軍の場にたつもたたぬも(同)

「戦時に於いて、戦場におもむくものもまた戦場におもむかぬものも、その身分・職業に応じて国のために尽くすべきである。国のために尽くすことは、個的生命を全体生命にとけ入らしむること、戦死者の場合と同じである。」と言はれてゐる。明治三十七年と言へば、日露戦争の戦はれてゐた時代である。現代の権利の主張が先立つ時代とは余程違ふ国民一人一人に緊張感の漂ふ時代であつたのでせう。しかしこの御製は教訓的でもありません。命令口調でもありません。御製の「世の中は たかきいやしき ほどほどに」に始まるこの大和言葉のひびきには、無理のない心に安心が湛へられてくる、そのやうな調べがあります。何故だらうか。桑原暁一著「続日本精神史鈔」に「人生は、個人生活の片々たる交渉と集合とではなくして、それをこえ、それを押しながすところのものとして直感せられ、「世の中」というもののうちにある自己を見出さざるをえないのである。」(262頁)とある。日露戦争を戦つてゐた私たちの先達は『世の中』といふもののうちにある自己を見出さざるをえない時代を生きてゐた。しかし、「たかきいやしき」「ほどほどに」小さな己を超える「自己」を見出すことができてゐたのでせう。

1行目「たかき」[that stands high in the world,] 2行目の「いやしき」[that lie beneath] はそれ自体に

価値は無い。人間は「高く立つ」こともできるし「下のほうで寝る」こともあり得る。永遠に固定されたものでは決して無い。地位が高い低いには究極の価値は無い。世のため人のために何をするかで輝く、そこに人としての価値が出る。明治37年、「をりにふれたる」

た
た
か
ひ
の
場
は
い
か
に
と
思
ふ
か
な
い
な
く
駒
の
声
を
き
く
に
も

「いななく駒」に人に対すると同じような深い愛情を注がれて、御製を詠まれてゐます。明治天皇にとっては、「ほどほどに」「身をつくし」たのは人だけではなかったのです。軍馬もいっしょになって戦ってゐたのです。この伝統は昭和になっても受け継がれてゐたと思はれます。私が幼いころからよく聞いた「愛馬進軍歌」(昭和14年頃作)をご紹介します。

1、 国を出てから幾月ぞ
ともに死ぬ気でこの馬と
攻めて進んだ山や河
執った手綱に 血が通う

2、 昨日陥したトーチカ(Tochka)で
今日は仮寝のたかいびき
馬よぐつすり眠れたか
明日の戦は手ごわいぞ

3、 弾の雨降る濁流を
お前たよりに乗り切つて
つとめ果たしたあの時は
泣いて秣(まぐさ)をくわしたぞ

4、5略

6、 お前の背(せな)に日の丸を
立てて入城この凱歌
兵におとらぬ 天晴れの
いさおは永く 忘れぬぞ

世の中は他との比較において価値判断をしてしまい、「たかい」とか「いやしい」とかすぐにレッテルを貼ってしまひ本当の輝きを感じられなくなる、そんな時僕らの心は貧しくなつてゐるのではないでせうか？他との比較(relativism)でなく一に帰一する感動の尺度を失いたくないものです。



●昭和四十三年
春合宿 太宰府

「たらちねの にはの教は」 [Tho' narrow is the path thy sire]

たらちねの
 にはの教は
 せばけれど
 ひろき世にたつ
 もとるとぞなる

Tho' narrow is the path thy sire
 Oft teaches thee to tread,
 Yet know that to the wider world
 That way alone can lead.

エリザベス1世(1558年即位)の時代に引き込まれるやうな、そしてシェークスピア(1564~1616)が書いたやうな英詩となつてゐます。このやうな英詩を明治の日本人が書くことができたのです。このことは私には驚きです。

1行目のTho' は though の短縮形で「けれども」の意です。

The path (道)が主語であり、その動詞はどこにあるかクイズより難しい。英語はS+V+C と習つてゐたのに逆になつてゐます。主語のその前にV(動詞)のisが置いてあり、また動詞(V)のその前がnarrow です。これはCの補語となつてゐます。平常語順では The path is narrow. (道は狭い)です。なぜ語順を転倒したのか。二つ考へられます。一つはnarrowを強調するため、今ひとつはthe path に関係代名詞をつけて「狭い道は」どういふ道なのか、説明するためです。次のthy sire が古語になつてゐる。簡単には = your father (あなたのお父さん)の意です。何故your father と訳者はしてゐないのでせうか。考へて見て下さい。

Thomas Stearns Eliotのことをわたしは思ひ出して考へたい。エリオットはイギリスからの移民の子としてアメリカで1888年(明治20年)に生まれ知性と伝統を重んじる詩人としてまた批評家として活躍した人です。しかし、1965年(昭和40年)に父母の生地イギリスで死んでをります。彼は一世代文化のアメリカには歴史が無いと嘆いてゐました。直接自分を育てた父母は your father でせう。1 generation (30年)遡るとその父母にyour father が2の2乗ゐる次のgeneration (30年)では2の3乗 your father がゐる。しかしアメリカに來た移民のエリオットには歴史が断絶して遡れない。だからイギリスに回歸したのだと考へられます。

Your father をThy sire(汝の父祖)と言つた訳者は少なくともエリザベス朝(1558年~1603年)くらいまでは、日本で言へば安土桃山から江戸初期くらいまでは歴史を遡らないとnarrow (狭い)の意味は分からないぞと私たちに突き付けてゐるやうなdeep (深い)な意味が込められると私は受け止めてゐます。

1, 2行目は、韻を踏ませるために難解な倒置構文となつてゐます。わかり易い現代文に書き換へると次のやうになります。

Though the path (Which) your father often teaches you to tread is narrow , 訳をすれば「あなたの父祖があなたに踏むやうに、しばしば教へる道は狭いけれども」となります。

3,4行目に進みます。Yet know that to the wider world that way alone can lead.

2行目の teach には es がついてゐるのに know には何も付いてゐない。それは何故か。教へる内容の2行めの不定詞 to tread (踏む)と同様の不定詞なのです。Yet (to) knowとto を補つて解釈してください。Yet to know that ~は「しかも that 以下のことを(汝が)知るやうに教へる」となります。

3行目の to the wider world は、 lead の後に置かれてあるとわかり易いので、平常語順に直ませう。That way alone can lead to the wider world. と書き直せます。すると「 父祖が教へたその道のみがより広い世界に通じ得る。」と解されます。

御製の「広き世にたつもとるとぞなる」が英詩では意識されてゐるなと感じませんか。「源氏物語」を英訳したArther Waley (アーサー ウェイリー)が1929年(昭和4年)に「日本文化の獨創性」(The Originality of Jap-

anese Civilization)を書いてみます。その中で「世界の他の国々が、日本における詩の重要性を理解することは、凡そ不可能なことである。」次に理由として、「あらゆる詩の中で、これほど徹底して翻訳不可能なものは、他にないからだ。その詩としての美は、一つの思考と一つの音の流れとが、厳格な短詩型の鋳型の中にぴたりと収まってしまふ、その見事さにある。水銀がある形の中に流れ込むやうな柔軟さで、『うた』はその定型の中に流れ込む。」と言ってゐる。この人が『日本はChinaの猿まねの国ではない。日本文化は他でもない日本に起源がある』と英国人に知らせてくれた。彼のお陰で日本に対する評価が高まったと言はれてゐます。

英訳詩に戻ります。訳者は、意識することにより英詩を成り立たせようとしてゐます。不可能に近い苦心が必要となります。さうすることによって、御製にこめられたところを英語で「知らせる」と言ふ文化的努力を形に残したのです。丁寧に読むべきでせう。

新約聖書のマタイ伝に Cast not pearls before swine. 「豚に真珠」があります。この豚を他人と思つてはなりません。自分に向けられた言葉と受け止めるべきでせう。聖徳太子の「共にこれ凡夫」と同じ意味合ひなのです。いきとしいけるすべての物の有り難味を忘れた貧しい心の他ならぬ私に向けられてゐるのです。

私たちは歴史を遡つての『父祖の恩』をありがたく感じる事ができてゐるでせうか。1行目のthy sire が『父祖』です。父祖に恩を感じるほど、深くこころを想ひはせる事ができてゐるでせうか。慌ただしく急ぎすぎたはゐないでせうか。立ち止まってじっくり味はいたいものです。

4行目のthat way alone can lead that wayにaloneを付けて本当に価値ある道であると私たちに感じ取らせようとする苦心されたことが分かるでせう。締めくくりにcan lead はそこで終はるのではなく、上の to the wider world に導いて行くことを可能ならしめる。すなはち「ひろき世にたつ」ことを可能ならしめるcan なのです。易しい言葉ですが読み味はほしいcanではないでせうか。「もとゐ」とは英語では= the rootです。このthe root は古い英語で表現された『汝の父祖』thy sire に込められてゐるとわたしは解します。深く読み味はふ一助ともなれば幸ひです。

長くなりましたが今回はここで終わります。(平成16年12月15日(水)輪読会に)



●平成十五年 7/5第二回ソーメン流し会 書庫倉裏庭に於て

「やすくして なし得がたき」 [What easy seem, yet of a truth]

やすくして
 なし得がたきは
 世の中の
 人のひとたる
 おこなひにして

What easy seems, yet of a truth
 Is oft the hardest strife,
 Is well to tread the narrow path
 That leads men through this life.

1 行目は散文では What seems easy ですが、詩のリズムを整へるために、What easy seems に語順が転倒されてゐます。「簡単さうに見えること」の意です。これが主部で 2 行目に述部が is oft the hardest strife とあります。「それがしばしば、一番なし得がたいことだ。」と訳されます。御製の「世の中の」は 1 行目、挿入句の yet of a truth にあたると思われます。Yet= however (しかしながら) of a truth は古語であり、現代語では = in truth 「実際、実のところ」で表現されます。
 現代日本の道徳の退廃には心が痛みますが、例へば、

Of a truth, moral decay hastened the decline of the Roman Empire.
 「実際、道徳の退廃がローマ帝国の衰亡を早めた。」のやうに使はれます。

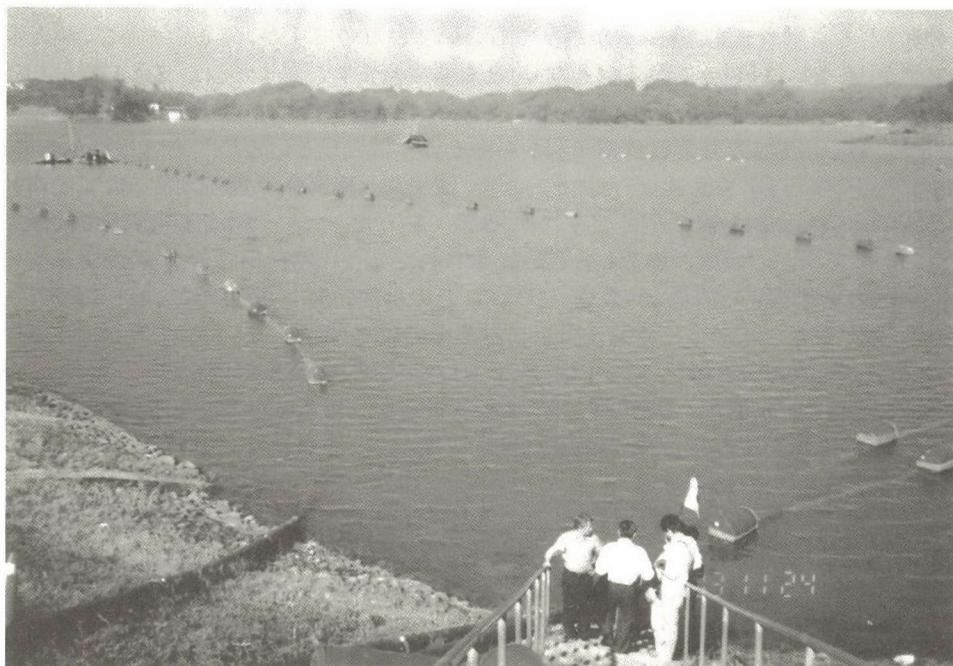
1, 2 行目は「簡単さうに見えること、しかしながら実際は、それがしばしば一番なし得がたいことだ。」
 「やすくして」「なし得がたきこと」とはあなた方自身にとっては何ですか？大学生にとっては Keep early hours and have breakfast. ではありませんか。私は《道徳の退廃》一つには 権利の主張のみで義務の不遂行より生ずると考へます。高校の英語の教師として「英語の読み書き話す能力をつける」ことが私の《義務》であります。このことは私にとって What easy seems, yet of a truth であります。実例を挙げます。授業をしてゐまして隣がうるさいので先生がゐなくて自習のかな注意をしようと思つて覗きます。するとどうでせう。あちらで 2・3 人、こちらで 2・3 人生徒は何かを喋り合つてゐる。先生の指導の下で話し合ひをすることは、時にはあるでせう。ところが、実際は先生はそれを黙認してゐるのでせうか。板書しながら先生一人で聞くも聞かざるも放任して授業を進めてゐるそんな場面に出くはすことがあります。「何とまあ！」と情けない気持ちに襲はれます。わたしの授業でもかういふ場面が生じることがあります。そんなときには即生徒と向き合ひ対決をします。4 月に、高校 1 年生として入学して来ます。最初の間は猫を被つておとなしくしてゐます。しばらくすると勉強嫌ひのグループが出来て、彼らがクラスで頭角を現して来ます。彼ら、彼女たちは、最近は女子の方が手強いが、小学校、中学校では学級崩壊してゐたクラスで育つたのかとも推測されます。授業中先生の許可無しに平気で教室をうろうろします。最初は私も紳士的に何度か優しく注意をします。席に戻り教科書を見ますが、5 分間と集中が続きません。私はそんなとき、怒り心頭に発し怒鳴りつけます。静かになるとそれで安心かと言へばそうではありません。居眠りを始めます。聞き逃しては次で尚更分からなくなる。生徒のことを思へばまた叱らざるを得ない。わたしにはこれは断じて許せない。「立ちなさい」と緊張感を持たせる為に立たせませう。生徒を立たせる。これは学校教育現場であつていいことか。私は新規採用教員の教育を 5 年近く担当してきましたが、いけないこととなつてゐます。

文部省は教育委員会に「体罰を生徒に加へてはならない。生徒の興味関心を引く授業を」させるやうに通達してゐます。若い教員ほどこれを忠実に守つてゐるやうです。実際「興味関心を引く授業」それは簡単さうに見えると第三者は思ひます。居眠りを見つめる「立ちなさい。」と立たせたとします。場合によっては「生徒が持続的に苦痛を感じたら体罰」とみなされると言ふのです。新規採用教員は立場が弱いから生徒に許してはいけない「おこなひ」を厳しく指導することは避け、一回言つて聞かないならば熱意を込めて何度でも聞くまで指導しようと思つて、下手なことをするより利巧にまはつて見て見ぬ振りをする。摩擦を避けたい気持ちが先行してしまつてゐる。そんな癖が若いうちについてしまふとどういふことが起こるでせうか。それが現実に学力を低下させてゐるではありませんか。ひいては本人の将来を台無しにしてしまつてゐる。そこには思ひ至らないのでせうか。実に大変な事態になつてゐます。保護者から裁判にかけられると負けると言ふ強迫観念は強く大多数

の教員の心理を支配してゐることは確かなのです。あなたは裁判にかけられるのが怖くないのかと聞かれると怖くて仕方ありませんと答へます。私は、毎朝、御製拝誦し教育勅語の奉読をしたあとはすがすがしい気持ちになって「今日は、声を荒げて怒るまい。」と神前に誓って学校に行きます。しかしながら4月、5月そして教室が暑くなる6・7月、体育祭に燃える9月は授業ごとに誓ひを忘れて生徒を激しく叱る。この御製の例としては相応しくないかもしれませんが、生徒が高校生らしくなるそのプロセスでは、文部省の指導に反する教育をしてをります。若いときには未熟だからと反省してゐましたが、経験豊富な60歳が近い今になっても「しかしながら実際は」それをやらねば授業が成り立たなくなってしまう「義務の遂行」ができなくなるのです。やむにやまれぬ生徒との対決の過程を経た十月ころから漸くにして、挨拶のよくできる本当に高校生らしい礼儀正しい生徒になってゐることを付け加へておきます。カントが「人間にとっての最高のものは義務である。またこの世のたからのうちの最大のものは道徳的意志である」と戒めてをりますが若いうちは何でもいい心に誓ひ「道徳的意志」を鍛へるだけでなく持続して鍛へ続けることがこの世の宝物でありますし、皆様方の一生の「宝の内の最大のもの」となるのだと信じてゐます。どうぞこの合宿が機縁となりますことを祈念してゐます。

3行目に進みます。Is well to tread the narrow path は2行目と並列して、述べられてゐます。「人のひとたるおこなひ」とは何でせうか。Is to tread well the narrow path に込められてゐると伺はれます。「狭き小道を踏みたがへずに、きちんと歩いて行くことだ」と解されます。Narrow にはキリスト教の国民に理解させたいと言ふ思ひがあるでせう。マタイ伝7章13節に「狭き門を通して入りなさい。滅びに至る道は広くて大きく、それを通して入って行く人は多いからです。」14節「一方、命に至る道は狭く、その道は狭められてをり、それを見出す人は少ないのです。」“Enter by the narrow gate. Wide is the gate and broad the road that leads to destruction, and many enter that way; narrow is the gate and constricted the road that leads to life, and those who find them are few.”狭き門をイメージしてthe narrow path を使はれてゐるのかどうか、ここでは半信半疑です。

4行目に進ませう。That leads men through this life.
関係代名詞thatの先行詞(antecedent)3行目にある the narrow path です。「人を一生貫いて導くところの狭き小道」の意になります。ここで考へねばならないことが出てきました。Men を受けるthrough one's life が何故 this になってゐるのでせうか。マタイ伝を読み直して見ませう。[wide is the gate and broad the road that leads to destruction, and many enter that way.] 滅びに至る道はthat way を通ることになります。That の対象語は当然this ですから、This way は[the road that leads to life] のことであり、命にいたる this life と言ふことになるでせう。



●平成十五年 11/24台湾 烏山頭ダムにて

「ならびゆく 人には」 [Tho' thou be left behind by him]

ならびゆく
人にはよしや
おくるとも
ただしきみちを
ふみあなたがへそ

明治43年

Tho' thou be left behind by him
Who side by side did mate,
Yet never let thy erring step
Stray from the path of right!

御製の「ならびゆく」は英語の2行目に[who side by side did mate]とあります。「人にはよしや おくるとも」は1行目に[Tho' thou be left behind by him]とあります。これを念頭において、英語の詩を1行目から読んで行きませう。

Tho' = thoughは譲歩の意味を有します。= Even if「たとへ〜であっても」に置き換へられます。散文的にはなりますが理解を進めるために、

Even if you may be left behind by him「たとへ、あなたが彼から遅れることがあっても」と現代英語に書き換へませう。

2行目に行きます。[who] は関係代名詞なので[him] が先行詞となつてゐます。By him(先行詞) who (関係代名詞)mated side by side.「仲間として並んで進んでゐる(ところの)彼」となります。御製の「よしや」の意味が分かりますか。古語辞典を引いてみませう。(下に逆説の仮定条件を伴つて)「たとへ。かりに。」とあります。

現代は早く分りたいと言ふ衝動に追ひ立てられてゐる [speed]時代とも言はれてをります。「問ふは一旦の恥、問はぬは末代の恥」とも言はれます。時間がかかってもいいではないですか。立ち止まって、ゆとりを持って辞書に尋ねてみませう。あるいは「知つて問ふは礼なり」とも言はれます。「おくる」は「送る」ではなく[be left behind]「遅れる」の意です。私はそんなことぐらい知つてゐると高下的にならで下さい。稽古といふ言葉を忘れず、いかなるときも、幼心に帰つたやうに素直でしかも謙虚に学問はしたいといつも念じてゐます。

小林秀雄先生は昭和の名著「本居宣長」を世に出した後、国民文化研究会の合宿教室に於てご講義をされました。その中で「研究する過程は誰も声をかけてくれず、孤独であつた。一語一語、諸橋(轍次)の大漢和辞典を引きながら研究を進めたのです。」と合宿教室でしみじみと語られたことを思ひ出します。明治生まれの小林先生は一時代前の「本居宣長」を研究するのに、辞書を引かれた。あの小林先生でさへ辞書を頼りに研究されたことは驚きではありませんか。私たちはもっと立ち止まって古典を鑑(かがみ)として自分を写し出す学問を取り戻したい。これまでの稽古ごとを正月を機に、時をいただいてしたいものです。その際に「忙しいから」「できない」「才能がないから」「出来ない」を私は決して逃げ口上にはしまいと自分に言ひきかせます。なぜならそれを口実にすると必ず、relativism(小林秀雄の『匹夫不可奪志』参照)に陥つてしまひます。「少年老い易く学成り難し」は本当に他人事では無くなつてしまひました。

御製に「ならびゆく 人にはよしや おくるとも」とあります通り、たとへ、精一杯頑張つても「早い、遅い」は必ず出てきます。世を挙げて一等賞、二等賞だのと速い遅いを競ひますが、其れはそれでよい。それをやめるなどとは言ふまい。西洋から入つてきたスポーツは、ラグビーは違ふやうですが、勝つたほうが大げさにガッツポーズをとつてしまふ。明治大学の小柳君が「剣道では敗者への思ひやりを欠くことになるから、そんなことをしたら負けを宣告されます。」と言つてゐました。そこで、心がけるべきは何かを考へてみませう。

明治陛下は次に「ただしきみちを ふみあなたがへそ」と詠んでられるところを見てみませう。「正しい道を踏む」こと、これこそが大切である。「ふみあなたがへそ」人より遅くなるのがたとへあつても、決して踏み違へる

ことがあってはなりません。と強い表現で言われてをられます。3行目に進みます。英語は次の通りです。Yet never let thy erring step 「しかし決してあなたの誤った一步を」と解されます。英語構文としては第五文型です。「誤った最初の一步」が使役動詞letの目的語に置いてある。この場合、主語の意志が目的語に及んでゐます。その一步が誤ってゐるのか正しい一步なのか判断するのはthou「あなた」ですよ。最初の一步を踏み出す前によく考へて見よ。と言ふことになります。行が変はつて、[stray from the path of right!]

で締めくくられます。「踏みたがへて」は「決してならないのは」「正しき道からなのですよ!」と言つてをられます。「thy erring step」の[err]は動詞で「過ちを犯す」と言ふ意味です。動詞にingを付けて形容詞の働きをさせるときは未来の意味を有して来ます。だから[thy erring step]はまだ踏み出してゐないまさに踏み出さんとする一步なのだと思ふべきではありません。それが、「正しき道」を「踏み違へる」一步ならば、道徳的意志を働かせて、踏み出さないで止めることの出来る一步なのだと思ふべきです。御製を本当に解して英語に直されてゐると思はれませんか。「単なる翻訳ではなくて、謹訳をされてゐるのだ」と私は思はざるを得ません。皆様はいかが思はれますか。

夜久正雄亜細亜大学名誉教授は「皇室と『しきしまのみち』の歴史」の中で古事記に始まる日本の和歌の歴史を辿られ、明治以後を次のやうに述べてをられます。「明治まで、盛衰はあったが、日本人の学問・教養の中核は和歌であった、といふことができよう。

しかし明治以来の学問は、大学がその代表であるとすれば、一般に西洋の科学を追ふことに急で、和歌を中心とする日本の学問の伝統とは離れてしまった。

ただありがたいことに「敷島の道」は皇室に伝へられて、大正天皇(一八七九~一九二六)には『御製詩集』とともに『御製歌集』があり、生物学者として著名な今上天皇(昭和天皇)は、戦前戦中戦後一貫して和歌を詠まれ国民を導きたまふのである(『歴代天皇の御歌』433頁)「西洋の科学を追ふことが急で」したが、何とか間に合ったから、日清・日露のいくさに日本が勝つことが出来た。何故だと思はれますか。一つには秀才が指揮を執り西洋の戦術戦略を使ひこなしたからである。それだけで勝てたならば大東亜戦争だって勝つて然るべきでせう。日清・日露の総帥たちは、皆、江戸時代に生まれた方たちばかりで、維新の動乱を経て精神的な強さがあったから勝つたと言へます。このことは極めて重要な点で見過してはなりません。

わが国は、明治三十七年二月、露西亞に宣戦を布告しました。その年からご承知の通り、一層多く御製を明治天皇はお詠みになってをられます。その中に「思往時」があります。

なく	人も	つか	み	たら
なり	もお	かへ	お	ら
に	お	に	の	ち
けり	か	し	御	ね
	た		代	の
			に	

「たらちねの みおやの御代につかへ」た方を偲ぶことをなされてゐた。日露戦争の真っ只中で、この方たちも「おおかた なくなりにけり」と明治天皇は詠んでをられます。歴史を謙虚に偲ばねばなりません。まだ存命の山本権兵衛・乃木希典・東郷平八郎などを本当に頼りにしながら、「殆どが亡くなつてしまつた」とご心配になってをられます。彼ら総帥たちは所謂秀才だけではなく本当に精神を練り上げた方たちです。彼らは、夜久先生の言はれる「日本人の学問・教養の中核は和歌であった」時代に学問の基礎を培つた人たちであつた。学問の根本に何を据えるべきかを考へる上で、私たちはこの事実を見逃してはならないのではないでせうか。

今年も学問の正道とは何かを基本に戻つて、謙虚に学んで行きたいと思ひます。最後にまう一度皆で御製拝誦をませう。

ならびゆく 人にはよしや おくるとも ただしきみちを ふみなたがへそ

平成十七年一月十二日[水曜日]今年、第一回輪読会のために

「おのが身はかへりみずして」 [To labour and forget themselves]

義 (明治四十二年)
 おのが身は
 かへりみずして
 人のため
 つくすや人の
 つとめなるらむ
 (ぞ)
 (なりける)

To labour and forget themselves
 All for their neighbours' sake,
 This is the duty of all men
 Whereto they ought to wake.

御製にあります「おのが身は かへりみずして 人のため つくすや」は英詩では To labour and forget themselves all for their neighbours' sake に表現されてゐるでせう。To labour は不定詞の名詞的用法で、「尽くすこと」。And forget themselves は「おのれを忘れること」。二行目のfor their neighbours' sake は「自分たちの隣人たちのために」であります。前にall があるのは「おのが身の全てをかけて」の意で labour と forget themselves を強調するためです。

一、二行目を訳すと

「おのれを忘れ、尽くすこと 隣人のためにおのが身の 全てをかけて」
 となるでせう。このやうに「おのが身の 全てをかけて隣人のために」一体尽くすことができるだらうかと自問されるのではないでせうか。ここで注意したいのは[all] は「いつも、常に」の [always] とは違ふと言ふことです。「いつも人のために尽くす」とは言つてゐません。地震・雷・火事・台風など何か事あるときにはそれこそ隣人のために、「われを一切忘れて尽くす」ことを強調するために[all] が使つてであると私は、解釈してをりませう。皆様はどう思はれますか。

高校の英語の授業で習はれたことと思ひますが、ここに言ふ「隣人」は一人ではないからneighbours (複数形) に ' アポストロフィーだけが、付けてあります。ミスプリントではありません、蛇足ながら、これが普通名詞の複数形の所有格の正しい作り方です。

『雲上の声』13頁では「つくすや人の つとめなるらむ」となつてゐます。英詩の4行目のあります[ought to] は2つの意味にとれます。①義務「～すべきである」shouldよりやや強いが、mustよりは弱い義務の意味を表す。②当然の意で「～するはずだ」。英訳者は②の当然のought to として使用されてゐるやうです。一方、「明治天皇御集研究」(国文研究叢書18)を見てみますと、その六十九頁には「尽くすぞ人の務めなりける」とあります。[they ought to wake] 「人は目ざめるべきだ」と①の義務として解釈されてゐるのでせう。①、②何れであるにせよ、『歴代天皇の御歌』は「つくすや(ぞ)ひとのつとめなるらむ(なりける)」の両方が(括弧)付けて書いてあります。どちらがただしと早急に決めかねるところであるし、これを機に深く味はひたい気持ちです。

三行目に進みます。[This is the duty of all men] の [this] は1・2行で言つてあることを受けてゐます。訳しますと「このことが全ての人の務めである」となります。

四行目に進みます 最初の [Whereto] はあまり見たことのない単語だと思ひますが、現代語に言ひ換へると [= toward which] 「そこへ ……する」の意です。次の [they] は [all men] を受けた代名詞です。Whereto they(=all men) ought to wake. は「全ての人が気づくべきはそこなのだ」または「全ての人が(靈性をそなへてゐるから)当然そこに気づくはずだ」と訳されます。「そこへ気づく」とはどこにでせうか。1行目から読み直して見ませう。To labour and forget themselves/ All for their neighbours sake,
 This is the duty of all men / Whereto they ought to wake.

御製は

おのが身は かへりみずして 人のため つくすや人の つとめなるらむ
であります。「そこへ」とはどこのことでせうか。二つ考へられます。一つは、歴史上、国のために勲を立てた方々の尊い行為、今ひとつは、われを忘れて国のため人のために尽くした全ての人の心の中を指し示してゐると考へられます。

『明治天皇御集研究』ではこの御製を解説して次のやうに言ってをられます。

「義務遂行は、単に奉公の犠牲をはらふのみではなくして、世にたつ道にまどはず、内に安心をうることでありとさとらしめられるのである。されば、

務 め な り け り	尽 く す ぞ ひ と の	人 の た め	か へ り み ず し て	お の が 身 は	い と は ざ ら な む	人 の た め に は	国 の 為	お も 荷 な り と も	身 に あ ま る	義
----------------------------	---------------------------------	------------------	---------------------------------	-----------------------	---------------------------------	----------------------------	-------------	---------------------------------	-----------------------	---

とをしへ給ひしとあふがるるのである。おのが身をかへりみずして国のため人のためにつくすといふことは、それが正義の人生事実内容である。正義の内容は義務であり、義務遂行は、その遂行者に安心をあたへ、確信をあたへ、勇気をあたふるのである。」

私の体験で恐縮ですが、昭和三十年代初めのころのことを思ひだします。知人のA君は海水浴に行つて弟が溺れたのを救ひました。しかしA君自身は力尽きて死んでしまひました。昭和五十年代の後半になつて偶然、A君の弟の娘を高校で教へることになりました。教室で、素直に成長してゐるその娘を見るたびに私は「A君よ安らかに眠り給へ」と心の中で言ひました。今一つ思ひ出すことがあります。昭和四十五年ころのことです。イスラエルでパレスチナゲリラがバスに爆弾をしかけた事件があつた。それに気づいた十二歳くらいの少年が爆弾の上に腹ばいになつて覆ひかぶさつたさうです。破裂した爆弾は無惨にもその子供を散り散りばらばらにしてしまつたさうです。しかしながら、その甲斐あつて乗客全員が助かつたと言ふニュースでした。

私たちが、日本の歴史を偲ぶとき、「おのが身はかへりみずして人のため尽くす」そのやうな歴史的事実に肅然として出会ひます。幾多の場面で、自己の命は捨てて他を生かすことをなされた方がをられます。それら「いさを」の積み重ねで今の私たちの生が有難いことに、存在するのではないでせうか。やむにやまれぬ「義務の遂行」は「遂行者に安心をあたへ、確信をあたへ、勇気をあたふるのである。」は深く味はいたい章句であります。現代の私たちは、不安の時代に生きてゐるとも言はれます。「勇気」と「安心立命」これらは固定概念ではなくて、このやうな詩文を声に出して読むときに私たちの心の中に自づから息づいてくる、そのやうなものではないでせうか。

「おのがじし力つくて」 [See each man do his very best,]

おのがじし
力つくて
世を富ます
民こそくにの
たからなりけれ

See each man do his very best,
And render rich this land!
Such men are of the goodly realm
True treasures rare and grand.

御製の「おのがじし」はあまり見たことのない言葉遣ひかもしれません。英語の[each man do~] に対応してゐるでせう。「天下に一人しかゐないおのがじしする」の意です。明治天皇は、「おのがじし」に始まる歌を何首か詠んでをられます。

明治四十年に「をりにふれて」

おのがじし つとめを終へし 後にこそ 花の陰には たつべかりけれ

これは「自分の勤めをきちんと果たし終へて、その後に『花を見て』憩ひなさい。」と解されます。国民への訓戒として解されますが、明治天皇は、とても厳しいお方であったさうです。ご自分がそのやうに成されて来たが故の体験に根ざした御歌だと拝察されます。

明治四十一年にも「おのがじし」に始まる御歌があります。「をりにふれて」

おのがじし 好めるかたに みちびきて おほしたてなむ 幼子のとも

一人一人の子供をいかに導き、育てあげて行くかについて、現代に於て、尚一層示唆に富む御歌として、受け止めてをります。

「力つくて」はすぐお分かりになるやうに[do his best]です。

英詩を 1.2行目から見て行きませう。

See each man do his very best,

And render rich this land!

文型をとれば、知覚動詞seeが目的語に[each man]を取り[do]と[render]が原型不定詞の形で目的格補語となつてゐる5文型の命令文です。2行目は4行目の[grand] と韻を踏ませるために語順が転倒されてゐます。平常の語順では [render this land rich] 「この国を豊かにしてくれる」と訳されます。誰がこの国を豊かにするのですか。[render]の意味上の主語は 1行目の[each man] ですから [each man] がこの国を豊かにしてくれるのです。集散的に [the people] や [the folk] などの「国民が」ではなくて、[each man] 「国民の一人一人が」と表現されてゐます。「一人一人の人が」「最善を尽くしてゐるのを」[see] 「御覧なさい」となつてをります。翻訳者は単に[do his best] とは言つてゐません。斎藤氏は「[do his very best] と [very] を入れてまさに最善を尽くしてゐる一人一人の姿を活写しようと [very] を付けてゐます。御製を拝誦しての感動がそのまま英語になるやうに苦心してゐるやうです。皆様は「この国が豊かになつてゐるのは」何故か考へてみたことがありますか。「一人一人の方々の並々ならぬ尽力」を、[see] 「御覧なさい。」と言つてをられます。命令文 [see] に始まる文は感嘆符(!)が付けてあります。ただ見るのではなく、「心を込めてじつと見てほしい。」と私たち一人一人の内面に訴へかけてゐる強い響きの詩です。明治天皇は国民の一人一人をよくご覧になつてゐました。三首だけここに紹介します。

夏草 (明治四十一年)
 重荷ひく
 くるまの音ぞ
 きこゆなる
 照る日の暑さ
 たへがたき日に

和布 (明治四十二年)
 このわたり
 海士がとま屋や
 近からむ
 真砂の上に
 わかめほしたり

をりにふれて (明治三十七年)
 あつしとも
 いはれざりけり
 にえかへる
 水田(みずた)にたてる
 しづを思へば

農民に、海人に、そして労働者にみ心を寄せ、じっと見つめてをられます。

三行目に進みます。

Such men are of the goodly realm

一行目の[each man] はここでは [such men] となつてゐます。総体としてここでは捉へてゐます。[of ~] は二つ意味が考へられます。一つは「根源・出所」。今ひとつは「所属」で「~に所属してゐます。」[the goodly realm] は「すばらしい王国」です。

三行目を訳しますと

「そのやうな人たちはすばらしい王国、日本に所属してゐる。」となります。何となく軽々しい訳だと感じませんか。[of] を「所属」に訳してゐるからです。これであれば、例へば高校生の部活動で、「何部に所属してゐます。」のやうに自分の意志で出入りできる一時的な印象を与へてしまひます。でありますから「所属」でなくて、文語的に「根源」の [of] としてとらへ、「そのやうな人たちの出身は、すばらしい皇国、日本。」と訳してはいかがでせうか。ご意見を聞かせて下さい。

4行目に進みます。

True treasures rare and grand.

[true treasure] 「本当のたから」、[rare] は=very uncommon「まれな、めずらしい」の意でよく使はれますが、ここでは=excellent「優れた、すばらしい」の意で使はれてゐるでせう。[grand] は「尊敬に値する、堂々とした」の意です。散文的になりますが主語と動詞などを補つて書き換へませう。

(such men are) true treasures (which are) rare and grand .

「そのやうな人たちがこそが本当のたから、優れた、尊敬に値するたからもの」と訳せばよいのでせうか。御製の調べとは程遠い訳になってしまひます。

さて、明治三十七年にもやはり「青人草」、国民こそが「国のたから」とであると詠んでをられます

宝

あしはらの 国富まさむと おもふにも 青人草ぞ たからなりける

「たから」と言へば、何を連想しますか。一般には金銀財宝だと云ふことになってをります。一八八三年(明治十六年)イギリスのスコットランドでRobert. Louis Stevensonが書いた作品は「宝島」です。この物語の主人公ジム少年は大変冒険好きの少年でリブジー先生やスモレット船長と宝島に行き、海賊の埋めた宝物を海賊たちと戦ひながら獲得する面白い冒険物語です。しかし設定をよく考へて見ますと、アングロサクソンの本質を良く表してゐます。①相手を善悪で区別する。②海賊は悪である。③悪だと断定されたものは殺されても仕方がない。④善である自分たちが彼らの命も宝物も取上げて良い。と言ふ筋書きが成り立ってゐます。一方我が日本では、「たから」と言へば、「国民のひとりひとりだ」と言はれます。明治天皇のこのやうなご思想は大変ユニークであり私たち国民にとってはとても有難く大切にすべきご思想ではないでせうか。

「家富みてあかぬ」 [What though,with plate and down]

折にふれて (明治37年)
 家富みて
 あかぬことなき
 身なりとも
 人のつとめに
 おこたるなゆめ

What though,with plate and down, thou ma'yest
 In warm affluence bathe,
 Let not thy wealth allow thy heart
 To swerve from duty's path!

1行目から入ります。[What though] は見慣れない表現ですが、譲歩構文を表す接続詞として使用され=although 「たとへ〜であっても」の意です。主語は[thou], それを受ける動詞は2行目の [bathe] で、「あなたが〜に浴する」となります。

[with plate and down] plate= precious metal, silver coin 「金持ち」、[down] =an open expanse of elevated land, 「広い土地持ち」合はせて訳すと、「大金も広い土地も所有して」

2行目は散文ならば[bathe in warm affluence] であるが、1行目の [with] 「所有」と二行目の文頭に [in] を出して財産を所有しての「心の状態」を際立たせるために [In warm affluence bathe] に倒置してであると私は受け取つてゐます。「富があり安楽に心行くまで浸る」と訳しておきませう。」ただし、二行目と四行目は [bathe] と [path] であり、は語尾が同じ発音ではないから韻は踏ませてないと考へての訳です。(ここは課題として問題が残るところです。)

[ma' yst]は譲歩を導く助動詞であります。古英語ではこのやうに [may]を [mayest]または[ma' yst]で表してゐました。

1, 2行目は「たとへ、大金も広い土地も所有して、あなたは贅沢で安楽に心行くまで浸れるやうになったとしても」と訳しておきませう。この英文は、御製の「家富みて あかぬことなき 身なりとも」にあたります。

三井甲之著『明治天皇御集研究』では第二十五「不正行為の心理分析」の章にこの御製は掲載されてゐます。「重責を負ふ当路の大官と国家的顕栄の地位にあるものと、また、一般官吏及び公職にあるものは、忠義を行動の原理として反省の基準たらしむるべし」と言はれてゐます。いかなる地位・官職にあるものも、「忠義を行動の原理」とすることを忘れると「意欲の弾機を掣肘し、誘惑の陥穽を警戒する威力を失ふに至るのである。」と言はれてをります。「掣肘する」とは動詞[hamper] でせう。「心に邪魔をして、自由に行動させない。」「誘惑の陥穽」は人間であれば全ての者にあると言ふ冷厳な事実を他所において、自分にだけは無いやうな顔をして他を攻めてはいけないと言ふことでせう。生活において大切なのはそれを「警戒する威力を」失ってしまはないやうにどうすべきかと言ふことでせう。御製にありますやうに「家富みて あかぬことなき 身」となりて特に心すべきことでせう。平成16年の国会で民主党のK某代表が「国家的顕栄の地位にあるもの」3名を名指して「国民保険未払ひの3兄弟」等と攻めたのはいいが、自分も罪が洗ひ出されて、同罪が発覚し辞職した例があったが、「人を呪へば穴二つ。」昔からよく言ったものであります。

同年の明治天皇御製に

薬	病	こ	人	心	薬
なり	なき	の	の	あ	
けり	身	の	い	る	
	の	は	さ		
	の	は	め		
			の		

明治天皇は「心ある人」の諫言を「病なき身の薬」として、謙虚なお心持で聞き入れ給ふたのであらせられると、

拝察されます。明治天皇におかれましては、どんな大官もどんな高い地位にあるものも、臣下であります。世界史上で専制君主が傲慢に陥り国が乱れた例は枚挙にいとまがないほどございませう。日本の天皇は、いかにして、傲慢の対極にご自身の心を持してをられたのでせう、ここは大切なポイントであると思はれます。明治天皇におかせられては、就中、その秘訣が「しきしまのみち」の刻々のご修業であらせられたのでせう。ご生涯で十万首を超える御製をお詠みになられゑるところから伺はれるところです。三井甲之はこの御製を「また心ある人の一般の批評と直接の進言とは、病なき身の薬として心を虚しうして之を傾聴せむとすべきである。」と一般国民への戒めとして解説してゐます。(二一八ページ)

3, 4 行目に進みます。

Let not thy wealth allow thy heart

To swerve from duty's path!

[thy wealth] は「あなたの富」です。3行目だけでは「汝よ、富が心に嘯き掛けるをゆるすなかれ」と訳され、4行目は「義務の道から外れるを！」と訳されます。散文的にはOwing to your wealth, don't let your heart swerve from duty's path. と書き換えられます。先づは英詩の理解をしたいと思ひます。「あなたに富がある為に、あなたの心が義務の道からそれることが無いやうにしませう」となります。

「義務の道」をどのやうな心境で踏めばいいのだらうか。日清戦争前の宮中顧問官川島令次郎海軍中将の「広島大本営に奉侍して」のなかに次の話が参考になります。

「日清の戦役は実に当時における大国難であった。当時国民上下が、いかに緊張して此の大事件に対したか、体験の無い今日の人々には、当時の苦心といふものはなかなか味へまい。中に造作もなく支那を屈服し得たやうに思ふてゐる者も少なくはなからうが、実は決してさうではなかったのである。」私たちは、科学的に分析してとよく言ひますが、当時の支那との国力の統計的比較も必要なことでせう。その5の「蘆間の小舟」で言及しましたので繰り返しません。我が国は大波に何時凌はれても仕方がない「小舟」だったと思はれます。日清戦争は「大国難」であった。「いかに緊張して此の大事件に対したか」の表現から「当時の苦心」に迫れば、迫ることは出来るのではないでせうか。次に開戦に至る御心を伺つてみませう。引用が長くなつてをりますが、私たち曾孫に暖炉のそばで昔の大事な話を聞かせて戴いてゐると思つて先を読んでください。もうすぐ「『義務の道』とは何ぞや。」に当たりますから。

「財力において、軍備において、遙かに優越した大国支那を敵として戦はうとなさるまでの大帝の大御心其の(宸)念の程は実に拝察するだに畏れ多い次第であつて、愈々矛を取つて立つと言ふ迄のご決心は実に熟慮に熟慮を重ねさせられた御事であると言ふ事は今更申す迄もない。」ここで注意すべきは「財力において、軍備において、遙かに優越した大国」といふ支那の位置づけです。「大国難」である。戦では負ける場合を想定しなければなりません。勝敗が決まったあと、あれこれと言ふのは簡単でありますし、発言の内容によっては許し難い卑怯なものもあります。明治天皇は独裁者ではありません。内閣制度もあつたのです。伊藤博文が総理大臣だったので。「できるならば戦争は避けたい。」この思ひで最後の最後までをられたのです。だが、開戦と言ふご決断をなされたのです。

「併し一度(ひとたび)開戦と決し、宣戦の勅(みことのり)を下し給ふや、大帝の御気色(みけしき)には毫(がう)厘(りん)の御不安もなかつた。ご心痛のご様子など、全く拝せられなかつた。惟(おも)ふに 大帝は戦勝を期せられた、と申すよりも、寧ろ、

『我は為すべき事を為すのである』

『我は神の命ずるがままに為すのである』

との固いご信念を持たせられたのであらうと、私は窃(ひそか)に拝察申し上げた。」(二七三頁)

引用が長くなりました。

『葉隠』では「大事の決断は軒先から雨が地面に落ちるその間にせよ」とありますが、大事に対しては平常から熟慮を重ねておいて、いざ出陣となれば、慌てないでいいやうにせよ。と言ふことでせう。決断を一端したならば、明治天皇のやうに「併し一度開戦を決し、宣戦の勅を下し給ふや、大帝の御気色には毫厘の御不安も」見せられなかつた。大將が不安の色を少しでも見せると軍兵に動揺が起こるとはよく言はれることです。「ご心痛のご様子など全く」見せられなかつた。これが王者の発想であり、取るべき王者の態度と言ふことでせう。明治天皇はどのやうに「義務の道」を踏み給ふたか。次の箇所こそがさうだと私は思はれてならないのです。

『我は為すべき事を為すのである』。

『我は神の命ずるがままに為すのである』

「よきをとり」[The bad I'll leave]

国(明治四十二年)
よきをとり
あしきをすてて
とつ国に
おとらぬくにと
なすよしもがな

The bad I'll leave, the good I'll take
For these folk in my hands:
Would I leave could lift and raise this realm
Above all other lands!

一行目から入ります。

The bad I'll leave, the good I'll take

目的語＋主語＋他動詞の韻文になってゐますから、平常語順に戻して考へませう。

I'll leave the bad, I'll take the good となります。文頭の [the bad] [the good] は文語でありまして、the ＋形容詞は「抽象的概念」を表してゐます。「善」と「悪」の意味です。[I'll leave~] [I'll take~] は「私が～することを止める」「～を選び取る」の意です。訳をすると「私は、悪を捨て、善を受け入れる」となります。

二行目は誰のためにその行為をするのかが来てゐます。

For these folk in my hands:

[for] は「～のために」と目的・目標を表す [for] です。民族・国民を表すには [the folk]

でいいのに何故 [folk] に [the] でなくて [these] を使はれたのか考へねばなりません。

[these folk] 日本語になおすと「これらの国民」となります。この表現は意味上からではなくて詩のリズムを整へることを考へての上でせう。[in my hands] の [hands] の意味は「保護」でありまして、[in my hands] は「私が運命を預かつてゐる」と訳されます。二行目を訳すと「私が運命を預かつてゐるこれら国民のために」となります。

三行目に進む前に、御製の意味を解釈しませう。

「とつ国」とは外国のことです。「文明が進んだ外国に劣らない国に日本を成す方法・手段があればよいがなあ。」の意です。明治天皇はその方法をまだ見つけてはをられず探しあぐねてをられる。そこに雄雄しいご決意が見られます。

三・四行目に進みます。

[Would I could lift and raise this realm]

[Would I could] は 主語である私の「選択 (choice)」と「願望 (desire)」を表す感嘆文です。三行目の訳は「私はこの国を全身全霊を込めて高めたい」となります。

四行目の [above] は＝over 「～を超えて」[all other lands] は「他のすべての国々」です。

三・四行目を合はせて訳すと、

「私はこの国を、他のすべての国々を超え高めるやう願ふ、それを必ず実現させたい！」となります。

御製に「よきをとり あしきをすてて」とありますが、西洋文明が怒涛のやうに日本に押し寄せる中で、明治天皇はご苦悩されてゐたのではないでせうか。西郷隆盛の遺訓のなかに次のやうな文明論が展開されてゐるところがあります。明治天皇のご心中を体認してゐた文章ではないかと私には思はれるので引用します。

「文明とは、道の普く行はるるを言へるものにして、官室の莊嚴、衣服の美麗、外觀の浮華を言ふに非ず。世人の西洋を評する所を聞くに、何をか文明と云ひ、何をか野蠻と云ふや。少しも了解するを得ず。」外觀に目を奪はれて、文明の本質を見誤つてゐることに対する明解な視点が提示されてゐます。西郷さんは「文明とは、道の普く行はれてゐるかどうか」で政治・芸術・科学・国民生活などがどういふ段階にあるか測るべきである。そこから目を逸らしてはならない」と言ふのです。抛つて立つ基準がしっかりしてゐるから何が文明として開化してゐ

るのか、外観に惑はされずに何故それが野蛮であるのかよく見えてゐるのです。これまでに拝誦して参りました御製にも明解にこの視点は表されてゐました。

ならびゆく
人にはよしや
おくるとも
ただしきみちを
ふみなたがへそ
(第十二回)

白雲の
よそに求むな
世の人の
まことの道ぞ
しきしまの道
(第八回)

「本立ちて道生ず」と言ひます。「和魂洋才」とも言はれます。人間として拠って立つ根本がしっかりしてゐなくて、他所から新しい色眼鏡を持って来ても、自分の本来の魂は満たされることがないのです。あれもだめこれもだめと、流行に踊らされ漁り回る浮ついた人生になって仕舞ふのではないでせうか。文明開化した明治時代にもその渦は巻いてゐました。

西郷さんは「真に文明ならば、未開の国に対しては、慈愛を本とし、懇々説諭して開明に導くべきに、然らずして残忍酷薄を事とし、己を利するは野蛮なりといふ可し。」と西洋の文明国がいかに野蛮なる事をしてゐるか述べてゐます。

日本の「よきところ」はよきところとして見失はずにきちんと保守することが出来なくなった所謂「ハイカラさんたち」が政治の世界でも言論界でも主流を占めてゐたのでせう。保守すべきを忘れ西洋崇拜に陥って仕舞ひさうな危ない状況を明治と言ふ時代は切り抜けてきたのだと思はれます。

内村鑑三は「Representative Men of Japan」「代表的日本人」の中に「Saigou Takamori—A Founder of New Japan」を入れてをりまして、西郷の遺訓のこの箇所を引用して次のやうに述べてゐます。

[“What is civilization but an effectual working of righteousness, and not magnificence of houses, beauty of dresses, and ornamentation of outward appearance.” (文明とは、道の普く行はるるを言へるものにして、官室の莊嚴、衣服の美麗、外観の浮華を言ふに非ず) This was Saigou's definition of civilization, (これが西郷の文明についての定義である。) and we are afraid civilization in his sense has not made much progress since his time. (彼が使つてゐる意味での文明は彼の時代からあまり進んでゐないのではないかと、残念ながら私たちは思ひます。) 文明の進展を計るのに、明治陛下は勿論、はっきりした共通の尺度が内村や西郷にあるのでせう。内村は [I'm afraid] でなくて [we are afraid] と言つてゐます。なぜ「私」ではなくて「私たち」と言つてゐるのでせう。私は思ひますに、内村の英語によるこの講演を聞いてゐる西洋のキリスト教徒たちにもきっと共感が得られると信ずるが故に、「私たちは残念に思ふ」と語りかけてゐるのでせう。シュベングラーの「西洋の没落」を待つまでもなくこの近代文明の行く末が見える人にははっきりと見えてゐたのでせう。この御製を単なる明治のナショナリズムの御歌として解釈しては本質を見誤ることになるでせう。最後にまう一度拝誦しませう。

国
(明治四十二年)
よきをとり
あしきをすてて
とつくに
おとらぬくにと
なすよしもがな

「わが園にしげり」[They flourish and luxuriate]

植物苑（明治三十七年）
わが園に
しげりあひけり
とつ国の
草木の苗も
おほしたつれば

They flourish and luxuriate
Within my fair domain,
The flowers of far foreign lands
I've tended not in vain.

一行目から入ります。[They flourish and luxuriate] の [They] は三行目の [The flowers] のことです。[flourish]= grow vigorously 「盛んに成長する」、[luxuriate]= grow plentifully and freely「繁茂する」の意です。二行目に進みます。[Within my fair domain] 中の[fair]= beautiful「美しい」、[domain]= territory under control 「統治された地域」ここでは皇居のこととせう。一、二行目の訳をとります。

「それら花々は、盛んに成長し、繁茂してゐる

わが美しい皇居のうちに」

三、四行目に進みます。[The flowers of far foreign lands] は「遠い外国からやって来た花たちよ」と訳して置きます。四行目 [I've tended] は御製の「おほしたつ」に当ります。[tend]= take care of—look after—the children, invalid, injured, etc「子供の世話をする。病人を介抱する。負傷者の手当てをする。」などの意があります。この他動詞の目的語は三行目にあります。だから平常語順に直しますと[I've tended the flowers of far foreign lands] となります。訳をとれば「遠い異国から来たその花たちを私は、子供の世話をするやうに、また病人を介抱するやうに育ててゐる。」となります。「草木の苗」は外国から寄贈されたものであると考へられます。寄贈者の好意に應へるためには並々ならぬ丹精を込めて育てられたのであると拝察されませんか。私には[tend]の意味を色々調べるうちにそのやうに感じられてきました。最後の[not in vain] は第六回「あがたもり ころづくしの ほどみえて」の御製に出てきてをりました。[They labour not in vain] のところを思ひ出して下さい。[not in vain]=not without successは二重否定で強い肯定の意となりますから「うまく行かない事を苦心の末に何とか乗り越えた」と解されます。ここには、丹精の喜びが込められてゐます。

『皇居の植物』生物学御研究所編 保育社 平成元年(1989)十一月三十日発行の御本を紐解いて見ませう。ご存知の通りこの書物は昭和天皇の最後の御著作です。明治天皇の時代とは大分、外国から来た植物の種類も違って来てゐるとは思はれます。皇居には、帰化植物が「コヌカグサ・メリケンカルカヤ・ハルガヤ・に始まり、…セイヨウタンポポ・バラモンギク・オオオナモミに至るまでの百植物である。」(23~24頁)と調べられてゐます。帰化植物の中でも、明治時代には無かつたであらうセイタカアワダチソウについては「昭和五十一年の秋、既に吹上御苑で一本、下道灌漑で数本、その付近の外庭東門外で二本観察したのが最初である」と書いてあります。綿密な観察をなされてゐたことが伺はれます。逆に消滅した植物のことも「これに対してヒゲナガスズメノチャヒキ・カキネガラシ・イヌカキネガラシ・ヨウシュチュウセンアサガオなどは、既に本書の区域において消滅しているように思われる。」とありますから明治天皇の御代には存在してゐたのかもしれない。本書では帰化植物が備考の中で侵入してきたものと、栽植品に分類してあります。「とつ国の草木の苗」がどのやうなものであつたかしばらく見て回ります。『皇居の植物』を拝見してゐますと本当に楽しくて、皇居内を散策させて戴く気持ちになります。

◆モンテリーマツ Pinus radiata D.Don (89頁)

産地：吹上御苑(吹上御所北側)、宮殿にある。

備考：栽植品である。北アメリカ西部の南カリフォルニア原産の植物である。

◆ホウライチク Bambusa multiplex(Louleiro) Raeuschel (99頁)

産地：吹上御苑(吹上御所南側)

備考:栽植品である。中国原産の植物である。暖地性の植物で筍は四季を通じて出るが、特に夏から初秋にかけて集中することが知られている。皇居でも主として八月から九月中に、観察している。

◆シノボウキ *Asparagus setaceus* (Kunth) Jessop (157頁)

産地:生物学研究所南側の畑

備考:南アフリカ原産の植物である。栽植品か又は逸出品と思われる。

◆スズラン *Convallaria Keiskei* Miquel (158頁)

産地:吹上御苑(花蔭亭南側・吹上御所南側)、賢所(内掌典中壺)などにある。

花:4月22日(昭和52年、花蔭亭と吹上御所との南側)・27日(同54年、吹上御所南側)・30日(同52年吹上御所と花蔭亭との南側)、5月6日(同53年、花蔭亭南側)に花があった。

備考:栽植品である。

ヨーロッパ産のドイツスズランと同種と見なし、学名に*C. majalis* Linnaeusを使用する意見もある。

◆タマスダレ *Zephyranthes candida* Herbert (173頁)

産地:皇宮警察学校前、北の丸公園などにある。

花:9月30日、10月3日・17日(以上昭和61年)に花があった。

備考:栽植品である。南アメリカ原産の植物である。

◆セイヨウトチノキ *Aesculus Hippocastanum* Linnaeus (345頁)

産地:吹上御苑(吹上御所西側)

花:4月27日(昭和54年)・30日(同52年、以上咲き始め)、5月1日(同62年)・6日(同53年、咲き始め)、9日(同55年)・16日(同61年)・18日(同59年、咲き始め)に花があった。

備考:栽植品である。バルカン半島原産の植物である。

昭和天皇はご朝食の前に必ず、一時間かけて、皇居の中をお散歩をなされてをられたさうです。私は『皇居の植物』に出会ふ前はただ健康のために、皇居内を歩かれるのだらうと思っていました。それだけではなかったやうです。誤解も甚だしいことでした。生物の研究をしてゐる大学の先生ならば勤務時間中に予定を立てて植物の生態の観察ができません。しかし昭和天皇は毎日びっしりと詰められたご公務のスケジュールがありましたから、毎朝早起きをなされて、一時間かけて、植物の生態のご観察をなされてゐたのです。昭和六十一年の四月九日に、例へばの話ですが、昭和天皇にお供して吹上御所の西側にやって来たとします。「ほら御覧なさい。セイヨウトチノキに花が咲いてゐるよ。昭和五十四年は二十日ばかり開花が遅くて四月二十七日に咲き始めて、昭和五十二年には四月三十日に咲き始めたのだったよ。」とやさしく説明をして戴いてゐるやうなほのぼのとしたこの上なく有難い気持ちになりませんか。私は二百三十二枚ある巻頭のカラー写真をどんな色の花だらうかと探して見ます。小林秀雄の『美を求める心』を思ひ出します。観察するとは心が豊かになると言ふことだったので。マロニエは明治時代にバルカン半島からはるばる海を越えて船に揺られてやって来てゐたのかもしれない。四月が来れば、あのマロニエに花が咲くころだと期待に胸を膨らませながら、毎朝散策をなされ最初に咲いた花との対面の場面はよく短歌に詠まれてゐます通り、昭和天皇様の、お喜びの様が髭鬚とされます。

Commune with nature. は「自然に親しむ」と言ふ意味でよく使はれます。昭和天皇は序文の中で[To Commune with nature is important though the protection of nature will become more and more difficult.

As nature of Musashino have gone far away from the center of Tokyo, I wish the plants of Mushashino will return to life in the Imperial Palace Grounds, if they adapt themselves to the circumstances. Natural surroundings seems to settle down here even in the eastern area in addition to Nishihonmaru and Fukiage areas.]とお書きになってをられます。自然に親しむとは自然と親しく語り合ふだけでなく、自然と心を通はせあひ、失はれ行く自然を取りもどすいとなみでもありませう。人間の体内時計が植物の成長と波長を合はせることでもありませう。毎年、私は卒業する学生に植樹をしていただいでゐます。大地を離れての生活が多い現代の生活ではありますが、大地に両足をつけ、一日に一度は天を仰ぎ見て、深呼吸をしてほしいと願つてのささやかなものです。

最後にまう一度御製を拝誦したいと思ひます。

植物苑(明治三十七年)

わが園に しげりあひけり とつ国の 草木の苗も おほしたつれば

〈参考文献〉

『皇居の植物』生物学御研究所編 保育社 平成元年(1989)

「ためしなく ひらけゆく世を」 [With what unprecedented]

ためしなく
ひらけゆく世を
みることも
みちびく神の
ませばなりけり

With what unprecedented speed-
How swiftly sails my realm!
With eyes for ever on th' alert
The gods stand at the helm.

一行目から入ります。

[With what unprecedented speed-] with speed =rapidly 「速く」の意です。どんな速さかと云へば[what unprecedented]で修飾された速さです。ここを先ず味はねばなりません。[what]は感嘆文を作る形容詞です。= how remarkable or surprising 「何と顕著なまたは何と驚くべき」の意です。[unprecedented]は[precedented]の前に[un]を付けて否定してゐます。[precedent]はラテン語接頭辞[prae -]「前」と[cedere]「行く」の複合語であります。「時間」「重要さ」などの面で「先んじてゐる」「先に進む」の意です。[un-]を前に付け後ろに[-ed]を付けて形容詞化されてゐますから訳をとるなら[unprecedented speed]は「先例のない速さ」となるでせう。一行目の訳は「何と驚くべき、先例の無い速さよ」となります。そしてここは、二行目の動詞[sails]を文法的には修飾してゐます。

二行目に進みます。

感嘆文であります。韻律上、四行目の[helm]と韻を踏むやうに、主語[my realm]が動詞[sails]の後ろに置いてあります。平常語順では[How swiftly my realm sails !]となります。[my realm] = [my kingdom] =「わが国」のことです。「進むわが国」を海を超えて行く「船」に喩へてありますから[sails]「航行する」が使はれてゐます。[swiftly] = with great speed は「速い速度で」の意です。

二行目を訳すと「わが国は、船のごとく、何と速く進むことであらう」としておきます。

御製では「ためしなく ひらけゆく世を みることも」に当たるところだと思はれます。

「ためしなく ひらけゆく世」これは、歴史上、先例がなく御世が開け行くと云ふことでせう。明治維新で江戸三百年が鎖国から開けたと私たちは、安易によく言ひます。アジアの一小国日本が世界に門戸を開き、大海へ船出をしたのです。船に喩へられた日本に対して、不沈空母みたいな船をイメージできますか。船出したばかりの日本は、左右同じ重量の荷物を載せてゐないとすぐに傾いてしまふやうな不安定な小さな船だったに違ひありません。

当時、日本が一小船で船出した世界にはどのやうな国々があつたのでせうか。戦後できた憲法の前文にあるやうな「真理と正義を愛する諸国民」ばかりではなかつたのは確かでせう。私は『ピーター・パン』の時代であつたのではないかとさへ思つてゐます。十九世紀にイギリスは大発展を遂げました。二十世紀になってから千九百十四年に第一次世界大戦が始まるまでをイギリスではエドワード時代と呼んでゐます。イギリス国内は平和で穏やかな時代だったのでせう。一八九九年には女流作家ネスビットの『宝探しの子どもたち』や千九百年には文豪ラディヤード・キップリングが『ジャングル・ブック』などを出してイギリスの子供たちを喜ばせてゐました。千九百四年(明治三十七年)には、ジェームス・バリーの『ピーター・パン』も生まれてゐました。『ピーター・パン』は皆様も幼いころに読まれてご記憶にあるのではないと思ひます。童話劇『ピーター・パン』は少年ピーターと少女ウェンディがフックを首領とする海賊(pirate)や土人(natives)そして妖精(fairy)などに会ふ冒険物語です。

私は平成十五年オーストラリアからの留学生に日本語を校内で教へました。教材に少年少女世界童話全集の十『ピーター・パン』を使用し、一頁づつ日本語を朗読させ、その上で私が英語に直してやり理解させる方法をとりました。一年の間に私一人では経験しない面白い発見が多くありました。例へばの18頁では「島の男の子た

ちは、ピーターがもどるところなので、さがしにでていました。海賊たちが、その男の子たちを、おっています。フックが先頭です。いつも、ピーターに、ひどいめにあわされているから、しかえしのためです。」かういふところがあります。次に「海賊たちを、インディアンがおいかけていました。」とあります。そこで、私が[The Indians were running after the pirates.]と訳してやると怪訝そうな顔をしました。場面はインドかなと思ったからでせう。「インディアンのうちには、熊など、けものたちが、しのびよってゐます。 わにもゐます。わにだけは、海賊のかしらを、ねらってゐます。フックの左手を、くいぢぎりたいからでした。」ここで私は「わに」をエジプトなどにゐる[crocodile]に訳すか、北米などにゐる[alligator]に訳せばいいのか迷ひました。そこで彼にこのワニは[crocodile or alligator ?]と尋ねると、にやりと笑って[alligators in Australia]と言ひました。自分の国の冒険物語にしたかったのでせう。イギリスがいろいろな国に行つては宝物を掻っ攫つてきた時代の物語なので、オーストラリアもあり得るのです。そこが舞台であつたなら、土人は[natives]よりは[aborigines]と訳したほうがびつたりします。

平成四年に修学旅行で韓国に引率して行きました。そのときの体験を語ります。午前中は韓国古代の古墳群を見て回りました。どの古墳も中身は何もなくて空になってなつてゐました。寂しいものです。墓は暴かれて何も残されてゐないのです。埋葬品はどこに行つてしまったのだらう。午後、ロッテ・ワールドに行きました。海賊船に大揺れに揺られて、違った世界を体験しました。その後『ピーター・パン』の立体映像の世界に入りました。海賊が色々な国に言つては宝物を奪ふ。そこで土人たちは弓矢を射て奪ひ返さうとする。それらの場面を見てゐたときに、「土人たちよ頑張れ」と言ふ気持ちになりました。

アメリカの西部劇でインディアンは悪役ですが、自分の祖国を守つてゐる人々ではないか。この土人たちも決して悪人たちではないと一人思ひながら『ピーター・パン』を見てゐました。子供の娯楽としての童話劇は大人の世界を映し出してゐるものだと思へたのです。文化の香り高いフランスだつて植民地支配をしてゐたのです。「仏印」と言ふ言葉は「仏領インド支那の略語です。「蘭印」とはオランダである蘭領印度の略です。世界史では十八世紀～十九世紀は帝国主義の時代と区分され、イギリス、ロシア、ドイツ、オーストリア、フランス、イタリアそして後からアメリカが加はりました。これら西洋列強は牙を磨いて待ち構へ、隙あらば日本を植民地の一つにと狙つてゐたのです。

歴史に「若しも」(if)は在り得ませんが、明治と言ふ時代を偲ぶときには少なくとも、二つの[if] を考へてみてもいいのではないでせうか。

(1) 若しも、日本が日清戦争で負けてゐたならば、今私たちはどこの国に所属してゐるでせうか？

(2) 若しも、日本が日露戦争で勝つことが出来なかつたら、朝鮮半島も日本もロシア帝国に侵略されませう。私たちの祖国はどのやうになつてゐたのでせうか？少し考へてみただけでも背筋が寒くなるのは私だけではないでせう。

高校の日本史の教科書では、内村鑑三の非戦論や与謝野晶子がクローズアップされてゐます。与謝野晶子は日露戦争のとき「君死に給ふなかれ」と旅順口包圍軍の中にある弟を嘆いて長詩を明治三十七年の『明星』九月号に発表してゐました。「官憲」が検閲して没にしなかつたのは不思議ではありませんか。元福岡教育大学教授の山田輝彦先生は「明治といふ時代は『女の人には言はせてをきなさい』と言つた度量の広い婦女子のセンチメンタルを許す時代であつた」と言はれました。男子には男子の役割があると言ふことで、国家の存亡時には日本男子はそのやうなセンチメンタルな感情を乗り越えねばならなかつたのです。分かりきつた事ですが、非戦論や厭戦論が国民感情を支配してゐたならば、大国ロシアに勝てたはずはなく、日本はロシアに併呑されてしまつてゐたでせう。私たちの父祖は余程健全な方々であつたのです。「身命を鴻毛の軽きに致す」と国のために命を捧げて下さつた先達のことが、非戦論や厭戦論ばかりでなく、国民教育として正しく語り継がれないと国民感情は一方に偏り腐つてしまふでせう。

しかし、考へてみますと明治の日本が、教科書で言はれる通り、専制的で言論の自由がなかつたならば、与謝野晶子の「君死に給ふなかれ」などは当時の月刊誌に載るはずはなかつたのです。明治三十七年と言ふ大戦の最中とは言へども、左右両論がふところ深く抱かれ、日の目を浴びることができてゐたのではありませんか。時代を自分の両目で見たいものです。それ故に、命がけの外交努力も、時期を逸することなく、実を結んだのでせう。明治とは余程、バランスのとれた一方に偏らない時代であつたのではないでせうか。

三行目に進みます。

[With eyes for ever on th' alert] [for ever] とは「永遠に」「夜も昼もいつも」の意です。[on th' alert] = watchful against danger「危険に対して警戒して」の意です。訳すと「夜も昼も絶えず、危険に対し警戒してゐる目がある」となります。誰の目が輝いてゐるのでせうか。

四行目に書いてあります。

[The gods stand at the helm] [The gods] だから神様は、お一方ではありません、複数の神様です。[the helm] =a wheel for steering a ship 「船の舵を取るための舵輪」を表してをります。訳すと「神様方はお立ちになってゐる 日本号明治の舵輪に」としておきませう。

明治天皇は「ためしなく ひらけゆく世をみる」ことができたことを喜んでをられます。私たちも、そのお喜びの心情は御製から拝することができます。欧米の大統領やキングならば我が手柄として国民に胸を張って演説するところだと思はれます。ところが、明治天皇は全く違ふ姿勢を示されてをられます。「みちびく神のませばなりけり」と下の句で言ってをられるところを注目しなければなりません。

御製に

『波』（明治三十八年）
荒るるか
見ればなぎゆく
海原のなみ
こそ人の世に
似たりけれ

があります。日本号明治が荒波に何度も呑み込まれる。もうこれで御終ひだ。と思ふや神の助けだ有難い、海が凪いだ。と言ふ痛切な全国民的経験の繰り返して明治の御世を乗せた船が進んだのでせう。「みちびく神のませばなりけり」に込められた明治天皇のご心情をわが胸内に呼び込むことができたとき胸が熱くなるのは私だけではないでせう。

最後にもう一度御製を拝誦ませう。

ためしなく
ひらけゆく世を
みることも
みちびく神の
ませばなりけり

〈参考文献〉

少年少女世界童話全集の十『ピーター・パン』



●鳥山頭ダムの底に敷きつめられた石

「もろともにたすけあひつつ」 [Behold my folk each other help]

も
ろ
と
も
に

た
す
け
あ
ひ
つ
つ

国
た
み
の

む
つ
び
あ
ふ
世
ぞ

た
の
し
か
り
け
る

Behold my folk each other help

With all their heart and might !

So friendly, brotherly, neighbour -like !

How pleasing is the sight !

一行目から入ります。

[Behold my folk each other help] [Behold]= have in sight ,see 「見る」、または=observe「観察する」。
[my folk each other help][my folk] と [help]はネクサス(S+V)の関係があります。訳すれば「国民がお互ひに助け合ふのを見なさい」となります。二行目はどのやうに助け合っているのが表現されてゐます。[With all their heart and might !][their] は [my folk] を受けた代名詞です。[heart and might]は第四回に出てきてゐました。「心と力」の意です。一、二行目を合せて訳すと

「国民お互ひが助け合ふのをご覧ください

国民ひとりひとりのところを縫り合せ、力のすべてを出し合っている！」となります。

前回の御製は「ためしなく ひらけゆく世を みることも みちびく神の ませばなりけり」でした。明治天皇はご神前に感謝の祈りを捧げてをられたのです。[Behold]は命令文ですが、ここでは、「見なさい」と訳してはなりません。神様どうぞ「ご覧下さい」と解するがいいでせう。明治天皇は神様に祈ってをられるのです。その御姿がイメージできますか。国全体のこと、そして国民一人一人の幸を祈ってをられるのです。「国民がいがみ合ふてゐては、国は開けない。国民がもろともに助け合ふ世をこそ」と祈り給ふてをられるのです。英訳者は、そのお祈りが実現してゐる。ご念願が叶へられた歓びの調べを、この御製から感じ取ったに違ひありません。[Behold]と命令調で始まるものの、祈願文(!)の形を取ってゐるではありませんか。「国民お互ひが助け合ふ」姿をどうか神様「ご覧下さい！」と斎藤氏は謹解して、英語に直してゐるのでせう。

三行目に進みます。

[So friendly, brotherly, neighbor-like !] 一、二行目の姿を形容してゐるところです。
[brotherly] =kindly 「親身の」、[affectionate]「親愛な」、[brotherly-love]を「兄弟愛」と言ひます。[neighbor-like] = befitting congenial neighbors 「気心の合った隣人としてふさはしい」。[So] = extremely 「極度に、きはめて」。三行目の訳を取りますと

「きはめて心安く、兄弟のごとく、気心の合った隣人のごとく！」となります。

貝原益軒の「和漢古諺」に「とほきおやこよりちかき他人」があります。「遠くに住んでゐる親子よりも隣に住んでゐる他人の方がまさかの病気や火事などのときには役に立つのだから親子のやうに大切にしておきなさい。」と言ふ日本に昔からある常識的な教へです。明治八年に、北海道の開拓と警備を目的として家族移住奨励のために屯田兵の制度が設置されましたが、明治天皇は気候が日本で一番寒い未開の土地での開拓生活をご心配なされてゐたと思はれます。目的が見事、達成され明治三十六年にその制度は廃止されてゐます。『新編日本史』指導資料には「この間約四万人が屯田兵として送られ、兵村三十七箇所を作り、耕地七万五千町歩を開墾した。また道路・港湾・鉄道の建設、ピール・精糖等の工場、炭鉱など多くの官営事業が営まれた」(『新編日本史』指導資料458頁)。とあります。このやうに、御製には開け行く北海道のこともご念頭に置いてをられると思はれます。そして、「蛍の光」に在るとおり沖縄のこともここに描かれてゐたと思はれます。

螢の光
四、
千島のおくも、
おきなわも、
やしまのうちの、
まもりなり。
いたらんくにに、
いさおしく。
つとめよ
わがせ、つつがなく。

四行目に進みます。

[How pleasing is the sight !]

[the sight] = something that is seen, spectacle 「光景」の意です。主語[the sight]の前に[is]と動詞が来てゐますが、疑問文ではありません。感嘆文であり、二行目の[might] と韻を踏むやうに[the sight] と[is]が語順を転倒されてゐるのです。訳を取りますと

「その光景は何と楽しいことでせう！」となります。明治の開化が成功したその根底には明治天皇のご存在を抜きに考へられないと私は思ひます。それには二つの大きな要因があると私は思ふのです。

①親子の關係に始まる歴史と文明の縦糸がしっかりと張られてゐること。

②兄弟姉妹に始まりお互ひに相助け合ふことのできる隣人關係の横糸がうまく張られてゐること。一方の糸が緩んだり張りすぎたりすると美しい文明の織物は出来ないでせう。

縦糸も大事にして次の代へ張って行かねばなりません。言はずもがなであります。横糸も大切にしながら張って行かねばならないでせう。これは常識ではありませんか。ところが、この常識が通じなくなった時代があったのです。日本が第二次世界大戦に敗れた時代です。この影響下からまだわが国は脱皮出来てゐないのではないかと、私は憂へてをります。

オーテス・ケリーと言ふアメリカ人がゐます。彼は1921年(大正11年)北海道小樽市に生まれ、米国アモスト大学在学中に第二次世界大戦勃発、学徒兵としてアメリカ海軍の情報将校で従軍し、ハワイの日本人捕虜収容所長などをつとめました。彼の弁によれば、終戦後「昭和二十年九月二十五日、九年ぶりに、日本に戻り」占領軍の「民間情報局」で勤務してゐた人物です。

昭和二十二年には同志社大学で教へてゐたやうです。著書に『よこ糸のない日本』(サイマル出版会・昭和五十一年)があります。第四部デモクラシーと日本人の中で次のやうに言つてゐるところがあります。

昭和二十二年の末のころ・・・「私が当時いちばん驚いたのは、敗戦後二年経つのに、まだ、御真影の奉安殿が学園の真ん中に、でかでかと、厚いコンクリートの屋根をあげたままだったことだ。」(269頁)「キリスト教を広めるために同志社大学というキリスト教系の大学に赴任している」(278頁)彼にとって、「御真影の奉安殿」などはいち早くつぶさないと日本人の「心の開放」は出来ないと云ふ伝道者の信念に燃えてゐるのである。「学校当局によく聞いてみると、作る時には二万円かかったが、あの鉄筋をいざ壊すとなると、現在では二万円もかかる。そんなお金の出所はないということだった。」ここには敗戦後に日本の教育界に起こった縮図があると思はれます。教育には謙虚になって仰ぐ対象一神聖なるもの一が縦糸として存在しないで成り立つものでせうか。常識を働かせて考へてみるべきことです。それは「二万円」などというお金の問題ではありません。目に見えない大切な心の教育の問題なのです。「わたしが非常に残念に思うことは、授業料値上げ反対の、その同じエネルギーを、この奉安殿つぶしにまわしたなら、いかに進歩的に、建設的にエネルギーが利用できたらうということだ。」(269頁)この調子で大切な教育の縦糸がプツプツと日本全国の学校で切られて行つたのでせう。

昭和二十七年占領が解かれた年のこととせう。「せんだって天皇は伊勢詣でをやった。そして京都、奈良と先祖のお墓参りをした。独立報告ということであつた。天皇が歩きまわられるということは大賛成である。」礼を失した言葉遣ひですね。大賛成ではあるが、今回の「行脚」は「どうもフに落ちかねる」と言ふのです。その理由を次のやうに言つてをります。「お父さんの墓、お祖父さんの墓までは人情として理解できる。」と言ふのです。それ以上は、アメリカ人の自分としては理解を超えることだから縦糸を辿つてはいけないうても言ふのでせうか。「だが、神武天皇となると、この人が実在の人間であつたかどうか、昨今の学説では怪しくなつてゐる。伊勢もそうである。そういう行幸は、昔どおりの皇統連綿や、皇紀二千何百年とかと結びつく。」と歴史学会を引き合

ひに出して批判します。そして「もうそういうことは卒業しているものと、私は思っていた。」と言ってゐます。皆さんはどう思はれますか？「はい卒業してゐます。戦勝国アメリカ人のあなた様の、御説尤もです。」とお答へになりますか。私は学問とは知識の多少では量れないものであると思つてゐます。心から納得できる常識を火花を散らすように鍛へあげて行くことそれが学問だと思ひます。

「皇統連綿や皇紀二千何百年」は日本の私たちの祖先が大切に守護してきたものではありませんか？アメリカ人の「人情として」お祖父さまの墓参りまで「理解できる」と言ふ。「理解できない」ものは切って捨てろとは何事か。立場を逆にして私たちがアメリカに行つて同じことを言ったならばどうなるか少しでも考へて、物は言つてほしい。キリスト教徒であるあなたに「12月24日のクリスマス・イーヴは昨今の学説では怪しい。まだ信じてゐるのか。そんな信仰を止めなさい」と言ふのと同じことなのです。怒らないのが無理と言ふものでせう。

この著書は『よこ糸のない日本』です。著者オーテス・ケリーは「日本の伝統的な縦糸」とは「皇統連綿や皇紀二千何百年」と言ひたいやうであります。それら縦糸を切って捨てるのが占領政策の主目的であつたこととはご承知の通り、確かです。彼ら占領軍は「日本によこ糸がないのは非科学的な縦糸があるからだと言ふ論法でせまり、切捨てれば『よこ糸』が生まれる。」と迫つた。台風音が騒々しいのは家の周りに庭木があるからだ。それを切つて倒せば静かになると言ふやうなことと同じやうな幻想に日本人のほとんどは惑はされてゐたのではありませんか。彼ら占領政策の当事者たちにとっては、いまだ占領二年にもなるのに、惑はされてゐない日本人はけしからん「まだ卒業していない」と言ふことらしいのです。本日の結論としましては《日本によこ糸はある》であります。御製に戻りませう。

た	む	国	た	も
の	つ	た	す	ろ
し	び	み	け	と
か	あ	の	あ	も
り	ふ		ひ	に
け	世		つ	
る	ぞ		つ	

この御製をしみじみと味はふとき、日本にはデモクラシー（横糸）と云ふ政治的理念では掬ひ上げる事のできない国民生活としてのよこ糸が、縦糸があるが故に、あつたことに私たちは気づかされるのではないでせうか。国民である私たちが「もろともに たすけあひつつ」「むつびあふ」そのやうな「世」にしたいものであります。

(平成17年2月26日土曜日 書庫輪読の為に)

〈参考文献〉

『新編日本史』

『よこ糸のない日本』

「国のため心つくしし」 [It truly melts my heart to think]

国
の
た
め

心
つ
く
し
し

高
山
の

い
さ
を
む
な
し
く

は
て
し
あ
は
れ
さ

It truly melts my heart to think

Poor Takayama died,

And his great patriotic heart

In deeds ne'er fructified!

一行目から入ります。[It] は それ、あれ(と心にて暗に指す意味にて訳さず[未だ名指さざるものを指す“it”][不定法]の[it]です。(716頁英和中辞典)[to think] 以下を指すと考へて下さい。[truly] は述部の[melts my heart]を「本当に」と修飾してゐます。[melts] は一般には「(氷を)溶かす」の意の動詞ですが、目的語に[my heart]とありますから、ここでは(my heart to pity) (あはれむ私の)「心を動かす」の意味が考へられます。加へてこの場合には、(into tears)を言外に持つ例があります。従つて、「心を動かす」が結果として「涙をともなひ」ますから「泣かしむ」と解した方がよいと思はれます。一行目の訳をとりますと「思へば本当に、私の心を、泣かしむる」となります。

二行目に進みます。[Poor Takayama died] [poor] とは「憐れむべき」「可哀相な」。訳を取りますと「可哀相に高山は死んだ、憐れむべし」となります。

次の行に進みます。内容の上では、三、四行目は何故そんなに「高山」が死んだのが悲しく、哀れに思へるのか述べられてゐます。文法的には、三、四行目は従属節で一行目の[think] の目的語となつてゐます。散文であるならば[And] の後ろに接続詞 [that] を置くところですが省略されてゐます。語句を見てみませう。[patriotic] = 「気概のある、愛国的な」名詞は[patriot] = 「憂(愛)国者、志士、烈士」。三行目の訳を取ると、「彼のすぐれた憂国の心情は」となります。(どうも愛国ではここにふさはしくない感じがします。)

[In deeds] [deeds] = actions 「行為」。[ne'er] = never 「決して～ない」の詩語。[fructified] = bear fruits 「実を結ぶ」。四行目の訳は「彼の数々の義挙に於て、決して、実をむすばなかつた。」となります。

御製にある「国のため心つくしし高山」とはどのような歴史上の人物ですか？ 私たちの世代は、この人が福岡で最期を遂げたからか人を形容するときに「あの人は高山彦九郎のごとある(やうだ)」とよくほめ言葉として使はれ、聞いてゐました。高校で日本史を選択した人は、林子平、蒲生君平とともに「寛政の三奇人」の一人として記憶にあるでせう。参考のため『新編日本史』の指導資料を引用しておきます。

「上野に生まれた勤皇経世家。勤皇の志を起こす発端となつたのは、十三歳のころ『太平記』を読んで、先祖が新田氏につながることを知つたためと伝えられている。その後京都へ出て三条大橋で皇居を拝したり、足利尊氏の墓をうつなどの奇行を重ねた。さらに諸国を巡る旅に出て尊王思想を鼓吹したり、あるいは京都で岩倉家をはじめとする公卿や有志を訪ね、勤皇の志を大いに發揮した。しかし、しだいに幕府の圧迫をうけるところとなり、ついに九州の久留米において、追い詰められた感情のなかで自刃してしまつた。」(404頁) 私は、資料を読んでゐて、上野(かうづけ)で生まれた彦九郎が遠い九州の久留米で自決したことに思ひを致すと、彦九郎の無念だけでなく、残された肉親家族の悲しみの様が如何様であつたかと、偲ばれます。この自刃の理由としては同書に次のやうに言ふ。「彦九郎自決の理由は必ずしも明確ではないものの、光格天皇がその父典仁親王に太上天皇の尊号を贈ろうとしたのに対し、これを幕府が拒否したという尊号事件に彦九郎が憤激したためではないかと推測されている。」(同404頁) 皇室の御事に征夷大將軍に過ぎない幕府が何故拒否したのかと、単に怒る前に、この時代を通観することが大切でせう。そのために『歴代天皇の御歌』の三百三頁から三百四頁をみま

せう。「天皇がいかなるお気持ちで皇位についてをられたかは、仁孝天皇が二十九歳の折(寛政十一年—1799—)後櫻町天皇(女帝・当時御年六十歳)にさしあげられた御書簡(京都御所内、東山御文庫所蔵)につぶさに記されてゐる。

光格天皇の御代、践祚後九年目の天明七年(1787)幕府では第十代将軍・家斉の死去により第十一代将軍家斉が登場、田沼意次は退けられ、代はって白河樂翁公と呼ばれた松平定信が老中となり、田沼時代の乱れの是正に取りかかった。いはゆる『寛政の改革』といはれるものである。さらに天明八年(一七八八)一月に京都に大火があって、皇居が炎上するといふ大事があった時、老中・松平定信は自ら皇居造営の監督となり、二年後の寛政二年(一八九〇)八月に、天皇は新皇居に還幸遊ばされるに至った。しかし、このことは単純に家斉・定信の忠節と考へるべきではなく、幕府財政の緊迫からしても、天下の形勢から見ても、彼らなりの意図に出でた『公武合体政策』の必要性を感じ取った上での行動とみるべきであらうか。」

江戸時代の歴史はあまりにも徳川幕府が前面に出てきてをり、皇室と幕府の関係も正しく把握されてゐないところでせうが、このやうな文章を読めば国の歴史があらためて、見えてくるのではないでせうか。次を読んでみませう。『歴代天皇の御歌』では、この頃の時代背景が述べてあります。「なほ、光格天皇の御代には、本居宣長が『古事記伝』を完成せしめたのをはじめ数々の著述をのこし、平田篤胤も独自の立場から、わが国体の本義を明らかにしてをり、また安芸藩の儒官・頼山陽が出て『日本外史』ほかの著書を出し、幕末の思想界に大きな影響を与へてゐる。また、高山彦九郎が世を憤って自決し、蒲生君平が荒廃した歴代天皇の御陵を訪ねて『山稜志』を著したのもこの頃であるが、前項で述べた林子平と、高山彦九郎、蒲生君平のいはゆる『寛政の三奇人』の登場などが、明治維新の機運をいち早く醸成してゐたことも注目すべき所であらう。」(同三〇四頁)

明治維新とは、「慶応三年十月将軍徳川慶喜の大政奉還から、同年十二月明治天皇の王政復古宣言、慶応四年江戸幕府の倒壊を経て、明治新政府成立に至る一連の統一国家形成への政治改革過程を指す」と広辞苑に記してある。「政治改革」過程のみでみるならばそれでいいでせう。京都大学の中西輝政教授は『歴史の六十年周期説』を唱へてをられますが、『歴代天皇の御歌』では、それよりも約二十年程遡って明治維新の機運は『寛政の三奇人』の登場のなどよって「いち早く醸成されてゐたことも注目すべき所」と言つてをられます。非命に倒れた高山彦九郎の志は八十年後に明治維新となって実現されてゐたと解すべきでせう。

次に、高山彦九郎の漢詩を読んで、彼の学問はいかなるものであつたか、偲んでみませう。

夕蛩朝雪学何事　　萬巻読書総放心。
開眼明見古人心。　　今人可放迂儒拙。

書き下して意味を取ってみます。

夕蛩、朝の雪(に明かりをとつて)暑い夏も寒い冬も年から年じゅう、何事を学ぶか、
萬巻の書を読み、総て心を放つ。
眼を開き明らかに古人の心を見る。
今人　世間に疎い(うとい)学者である迂儒の拙きを放つべし。

高山の学問の要諦はこつこつと萬巻の書を紐解くことに止まるのではなく、『放心』即ち自己の心を困習などに囚はれることなく解き放つことにあつたのです。十分に心を解き放ち得てゐない私自身も高山からみれば迂儒かもしれません。生き生きと自分の心を解き放つ学問を、お互ひに心がけねばなりません。

さて、西郷隆盛は高山を学者として尊敬の念を抱いてゐたやうです。それは次の漢詩に伺はれるところです。

天歩艱難繫獄身。　　誠心豈莫恥忠臣。
遥追事跡高山子。　　自養精神不咎人。

書き下して意味を味はひませう。

「天の歩み艱難にして、西郷隆盛である自分の身は獄に繋がれてゐる。
誠心ありて、どうして忠臣を恥づることがあらうか。

遙かに高山子(彦九郎)の事跡を追ふ。(獄中にある西郷南洲は遙かに仰ぐやうに高山子の事跡を追ってゐる)すると自づから精神を養ひ、自分を獄に追ひ込んだ人を咎める心境ではなくなつてゐる。」西郷南洲の獄中の作と思はれますが、「眼を開いて」「明らかに古人」高山の「心を見る」ことによって「放心」し得てゐることが伺へます。学問の血脈とはかくあるべしと私は思ひますが皆様はいかが思はれますか。

私たちは、学生時代福岡信和会で「郷土の歴史上の人物」を研究テーマにして合宿をしたことがあります。その時の散策で久留米遍照院の高山彦九郎のお墓に参りに行きました。そのお墓には「安政戊午十月筑前浪士平野二郎國臣」と刻した一基の灯籠が寄進されてゐます。郷土福岡の勤皇の志士・平野國臣が、石灯籠を寄進し高山彦九郎の霊を弔ひ二首の歌を手向けてゐたのです。その歌を紹介します。

よしやその 時こそいたらね ますらをの すてし命は 大君のため (よしや—— たとへ・仮に、いたら いたるの未然形、 ねー打消しの 助動詞「ず」の已然形)	一筋に おもひしみちは さりながら まだき時よは せむすべもなし (さりながら—— ともかく、 まだき時よ—— まだその時期の 来ない時世)
--	---

高山が「一筋におもひしみち」は平野國臣にも受け止められ、流れてゐた「みち」でありませう。自分一個の命より大切に違ひない道であつたと伺はれます。いまだその時期が来ないうちに、命を捨てねばならなかつたことは「せむすべもなし」どうすることもできない。たとへ時が来ないうちであつたにせよ、ますらををであるあなたが捨てた命は「大君」のためであつた。平野國臣は高山のみ霊を上のをやうに歌に詠んで弔つてゐたのです。

史記に「士は己を知るものの為に死す」とありますが、誰の為に高山は死んだのか。「大君」のためであつた。と。平野は詠つた。
歴史の縦糸を味はふために、御製に戻ります。

くのために 心つくしし 高山の いさをむなしく はてしあはれさ

英訳詩

It truly melts my heart to think / Poor Takayama died,
And his great patriotic heart / In deeds ne'er fructified!

明治天皇は泉下の高山彦九郎の声をお聞きになつて、それを御製の悲しき調べに詠んでをられたのです。これこそが無窮に留めをかけた美しい日本の歴史ではありませんか。

いつか、皆さんと一緒に、久留米の遍照院の高山彦九郎のお墓にお参りに行きたいものです。

〈参考文献〉

『新編日本史』の指導資料
『歴代天皇の御歌』

「しら玉を光なしとも」 [The brightest gem, while in the rough]

玉 (明治四十三年)

しら玉を

光なしとも

おもふかな

みがきたらざる

ことをわすれて

The brightest gem, while in the rough,

Thou deemest dim and dull,

If thou forget to cut with care

And polish to the full.

[The brightest gem]は「最も輝く宝石」の意です。[while]は対照を示す接続詞で、「一方」の意です。
 [in the rough] [in]= used to indicate one's situation or state 「～の状態・状況を示すのに使はれる」前置詞。
 [rough]= uneven on surface 「表面が平らでない・磨かれてゐない」[rough]の後ろには[gem]が省かれてゐます。一行目の訳を取りますと「最も輝く宝石、一方に磨かれざる宝石」となります。

二行目に進みます。

[Thou deemest dim and dull] [Thou]= You, [deemest]は中世英語で動詞に[est, st]を付けて二人称単数直説法を作るために用ゐた英語本来の表現です。=think, judgeの意ですが、ここでは[gem]が石だけでなく磨かれざる人にも譬へてあるから=think meanly of「軽侮する」に使はれてゐると私は考へます。何故[deemest]をここに使ったかは、次の[dim]との音韻上から[deem dim]の響きより[deemest dim]の方が格調高い調べとなるからでせう。意味を取りやすくするために現代英語で言ひ直すと[You think meanly of one (=the rough gem) dim and dull.]となります。訳すると「あなたはそれをくすんで光がないと軽侮するでせう」となります。

三、四行目に入ります。

[If thou forget to cut with care] [If]=「もし～であるならば」、[with care]= carefullyであり「注意を払って」の意です。四行目は[forget]の目的語で[polish]= to make smooth and glossy usually by rubbing「通常こすってなめらかにし、つややかにする」[to the full]=fully「十分(十二分)に」の意です。

三、四行目の訳を取りますと

「もしもあなたが注意深く切ること そして十二分に磨きをかけることを忘れてゐるならば」となります。文の構成上では三、四行目が「もし～ならば」の条件節になってゐまして、一、二行目がそれを受ける帰結の節となつてゐます。ご参考までに『明治神宮叢書第七巻御集』の五〇二頁にありますこの御歌の簡潔な解説を紹介します。「下旬殊にいみじく拝せられる。自ら常に省るべきよしを諭させ給へるなり」と解説がしてあります。この観点は昭憲皇太后の「金剛石」を思ひ出させます。

<p style="text-align: center;">二</p> <p>水はうつわに したがいて、 そのさまさまに なりぬなり。 人は交る 友により、 よきにあしきに なりぬなり おのれに優る よき友を えらびもとめて、 もろともに こころのこまに むちうちて、 学(まなび)の道に</p>	<p style="text-align: center;">一</p> <p>金剛石も、みがかずば、 たまの光はそわざらん。 ひともし、学びて後にこそ、 まことの徳は あらわるれ。 時計のはりの たえまなく めぐるがごとく、ときのままも、 光陰(ひかげ)惜みて はげみなば、 いかなる業(わざ)か ならざらん</p>
---	--

「人みな^のえらびし^上に」 [The gem selected with deep care]

玉
（明治四十三年）
人
みな
の
え
ら
び
し
上
に
え
ら
び
た
る
玉
に
も
き
ず
の
あ
る
世
な
り
け
り

The gem selected with deep care,
And with hard labour won,
Oft shows a blemish, even as
The spots upon the sun.

この御製は連作三首のうちの一首でありますので続いて第二十一回に続けて解説してあります。
『明治天皇御集』では次の順序で配されてあります。

玉（明治四十三年）
人みな^の えらびし^上へに えらびたる 玉にもきずのある世なりけり
（世の中のものすべてに完全なるはあらざる旨をたとへ宣（のた）まへり）
寶とも いふべき玉は なくならむ こまかに瑕を もとめでなば
（あまりに瑕をもとめいづる事をせで、その美点のかたに心をつくすべし
との大御心なり）
しら玉を 光なしとも おもふかな 磨きたらざる ことを忘れて

三首目の御製を二十一回で、今回は第一首目の御製と言ふことになります。この英訳された詩の文の構造は一行目の[The gem]が主語でありましてそれを受ける動詞は三行目の[shows]ですから一行目の[selected]は動詞ではなく修飾語として前の[The gem]にかかっています。

一行目から入ります。[The gem] の[The] は=representative「代表単数」だから「その宝石」と限定するのではなくて「宝石すべては、どんな宝石も」の意となります。[selected]は「選ばれた」の意、[with deep care] は「深く注意を払って」の意です。

二行目は[And with hard labour won] となつてをりますが四行目の行尾の[sun] と韻を踏ませるために語順が転倒されてあります。平常の語順では [And won with hard labour] となります。[won] は[win] の過去分詞で[selected]と同じ働きをして[The gem] を修飾してあります。[win]の意味は=to get by effort or skill「努力または手腕によって得る」です。

それでは、一、二行目の訳をとりませう。

「深い注意を払って選ばれ、
また大変な骨折りの末に得られたどんな宝石でも」

三行目に入ります。

[Oft shows a blemish,even as] [Oft] =often 「度々」、[shows]= reveal 「暴露する」、[blemish]= a mark that makes something imperfect「ものを不完全なものにするしみや傷あと」、[even as]= exactly like ~「丁度～のやうに」[as]の目的語は四行目にありますから、続けて解説します。[The spots]= stain「よごれ」の意味や=blemish「(道徳上の)汚点」などの意味がありますがここでは後ろに[upon the sun]が来てありますから「太陽の黒点」の意に解するのがいいでせう。三、四行目の訳をとりませう。

「(どんな宝石でも)きずを暴露する、^{まさ}正しくそれは 太陽の黒点のごとし」

英詩では[gem] : [blemish] = [sun] : [spots]の等式が成り立っています。つまり、「宝石」:「きず」の関係は「太陽」:「黒点」の関係に等しい。と言われます。[The gem]とは御製では「人みなのおらびし上にえらびたる玉」であります。例へば、「玉」は国会議員の場合があるでせう。優れた人を選び出すことを「選良」と言ひます。だから代議士を選良とも言ひます。その選良がマスコミで[blemish](道徳的汚点)が暴露されてしまふとどうなるでせうか。その代議士の「道徳的汚点」がその人の全てのやうに連日矢面に曝されます。いままで全く面識のなかつたその人物の全てをあたかも知つたかのやうな錯覚に国民は陥り、早くその人物を葬り去るのが正義のやうな心境に私たちが追ひ込まれてゐることが度々あります。そんな国民心理が醸成されると、「私はその[blemish]はいけなと思ふけれど、他の面で、いままでの政治的業績は評価できる。」などとその人物をいささかでも評価しようとするれば「あなたは、彼の汚職を許すつもりか」と詰(なじ)られるのが落ちでせう。そのやうな時の比例関係は[gem] : [blemish] = 1 0 0 : 1 0 0 となつてゐるのでせう。御製では[sun] : [spots] = (無限大) ∞ : 1 の比ぐらいであると言つてあるやうです。何故このやうな比が成り立つのでせうか。このことを理解するために『日本への回帰』第五集(昭和四十五年発行)の中にあります『宮中見聞談』(木下道雄先生)を引用が長くなりますが読んでみたいと思ひます。

「昭和の初めのある秋、私が侍従室に、少し遅くまで残つておりましたら、内閣書記官が上奏箱をもって、大急ぎでまいりまして、『この中には一刻を争う至急の総理大臣の上奏書がはいっているから、速やかに陛下のご裁可を仰ぐように取り計らつてもらいたい。』ということでした。私はすぐその箱をもらつて陛下のお部屋へまいり、陛下のお机の上の鍵を拝借してその箱を開けた。中から出てきたのはただ一通の書類でありましたが、「何某起訴処分件、右謹で裁可を仰ぐ、年月日、内閣総理大臣何某印」という上奏紙の裏に、当時の司法(現在の法務)大臣の起訴理由書が数枚ついておりました。その時、正三位勲一等というような身分の人が起訴されます時には、陛下のお許しがなければ起訴ができなかつた時代でありますから、大至急そのお許し得るための上奏書であつたのです。この当時新聞で既にやかましく言つておつた、ある有力なる政治家の汚職事件でありましたので、はたして総理大臣が決心をして、その人を縛り上げる勇氣があるかということが、世の人の興味の的であつたのであります。」

戦後の田中角栄総理大臣のロッキード疑獄事件のやうなスキャンダル事件が昭和に初期にも起こつてゐたのです。今太閤ともてはやされて総理になつた田中が連日マスコミで叩かれました。巷の噂では昭和天皇は「そのニュースがテレビで報道されると、テレビのスイッチを切られる」その理由は「陛下が田中を嫌つてをられるからだ。」と囁かれてゐました。『宮中見聞談』の次を読めば、昭和天皇の御心とは、全くずれた憶測であつたのではないかと思はれて参ります。次を読んでみませう。

「それで私は少し痛恨な気持ちになりまして、『いよいよ総理大臣も決心されたか。』と思つて、それを陛下のお机の上に上げました。汚職は陛下の最もお嫌いな問題であります。私は陛下がすぐ判をお押しになるだろつと思つて、それを陛下のお机の上にあげたのであります。陛下はその書類を一見なさるやいなや、非常に『困つたなあ』というご態度をお示しになつた。私はちょっと不審な気持ちでお側に立つてお待ちしておりましたが、陛下は司法大臣の起訴理由書をくり返しくり返しご覧になつて、なかなか判をおつきにならない。そのうちにだんだんと私も考え直してきました。」

何故すぐに昭和天皇が判をお付にならないか、御心に迫つて行こうとなされてゐます。この姿勢が侍従をなされてゐた木下道雄先生の偉いところだと感心させられます。自分の浅はかだつた気持ちと昭和天皇の深い御心とを対比して次に、述べられます。

「自分は陛下より十歳以上も上だ。上の男がいささかなりとも痛快味を覚えたということはなんと浅ましい恥づかしいことか。陛下は人とお会いになつても、対立感というものを一切お持ちにならないお方であるから、汚職は最もお嫌いなことだけれども、汚職した人を憎いとはお考えにならないらしい。私が只今いささかなりとも痛快味を覚えたということはなんと恥づかしいことか、とだんだん考え直してまいりました。しばらくして、とうとう陛下は、裁可の判をお押しになつた。これで起訴が決定したわけでありまして。私は、内閣書記官に早く渡そうと思ひまして、それをいただき、また箱に入れ、鍵をかけて一歩お部屋を出ようといつたしましたら、私をお呼び止めになりましたから、何か別のご用かと思つてお側に参りましたところ、『結局私が悪いのだよ。』と仰せになつて、考へておいでになる。この時私は、本当になんとも言へない気持ちになりました。われわれの仲間の犯したあやまちが、どれくらい陛下にご心配かけるのかと思つておりましたら、つと立つて縁側にお出になりましたから、私もだまつて縁側に出ました。」

昭和四十四年の夏の合宿教室で木下先生のお話を聞いておまして、この段になると、私は涙が出てきて仕方がありませんでした。木下先生は今まさしく御前に立たれてゐるやうに不動の姿勢で話して行かれました。私自身もその場に立つてゐるやうな厳肅な気持ちにならざるをえなかつたのです。同じやうに、隣の友も、はば

かりなく激しく泣いてゐました。涙の中で次のやうに聞きました。

「この縁側はもう焼けてありませんが、明治神宮の絵画館に掲げてある数多の油絵のうちの一つ、『教育勅語下賜の図』という大きな油絵の額面に描かれている二階建てのご学問所という所の二階の縁側であります。ちょうど、秋の非常に晴れた日で、夕日がお庭の松に照り添っておりましたが、天を仰いで、『結局、私が悪いんだよ。どうすれば政治家の墮落が防げるであろうか。結局私の徳が足りないからこういうことになるのだ。どうすればいいと思うか。』とお尋ねになる。『どうすればいいか。』とお尋ねをうけましても、つい先刻、いささかなりとも痛快味を覚えた私ごとき者になんと申し上げられましようか。本当に私はもう無言で、泣かんばかりにして御前を退いてきたことがあるのであります。」(202頁から205頁)

昭和天皇が田中角栄元総理が「嫌いだからテレビを切られる。」そんな次元でテレビを切られたのではなかったやうです。「陛下は人とお会いになっても、対立観というものを一切お持ちにならないおかたであるから、汚職は最もお嫌いなことだけれども、汚職した人を憎まれないで「どうすれば政治家の墮落が防げるか」「結局自分の徳が足りないからと」ご自分を責めてをられたのであります。昭和天皇は元総理大臣の[blemish]「道徳的汚点」を他人事としてお攻めになりません。徳の足りないご自分の責任であると「無限(∞)」に責任を負ふてをられたのが真実であります。

英訳御製の[the sun] = 無限大(∞)は明治天皇の御心を翻訳者・斎藤氏は表現しようとしてゐたやうです。昭和天皇も同じやうな御心で御一生をお送りになられたのです。お分かりになられたでせうか。最後にもう一度御製を拝誦したく思ひます。

〈参考文献〉 『日本への回帰』第五集(昭和四十五年発行)「宮中見聞談」

あやまちをいさめかはして [Let each remind the other of]

あやまちを

いさめかはして

したしむが

まことの友の

心なるらむ

Let each remind the other of

His faults and fraternize,

For thus alone can man and man

In friendship sympathize.

一行目から入ります。

[Let each remind the other of] は「お互ひにof 以下のことを思ひだませう」と言ふ呼びかけの文となつてゐます。[remind (one of something)]は(主格のために何かを)「思ひ出す」の意です。二行目に於てお互ひで何を思ひだすかが述べられてあります。[His faults] の [His] は [each] と [the other] を受けてゐますので、「お互ひのあやまち」の意です。[and] = 「その上で」、[fraternize] = to meet and be friendly with someone as equals「友愛精神で(上下関係なく)親しく交はる」の意です。一、二行目を訳しませう。

「お互ひのあやまちを思ひ起こし

その上で兄弟のやうに親しく交はりませう」

御製の「あやまちを いさめかはして したしむが」にあたるころだと思はれます。現代はぎすぎすした世の中になった、そこに住む人の心はばさばさに乾いてしまつてゐるとよく言はれます。何故でせうか。一つのヒントがこの御製のなかから見出されると思ひませんか。[faults] について、何かひどい「あやまち」を相手が自分に対して犯した時を考へてみませう。その「あやまち」を、犯した相手が「愚かで」自分が上位に立つた「賢者」と言ふ発想で事を処理しようとすれば「いさめかはして したしむ」人間関係は生まれて来るでせうか。表面上は解決ができたとしても何らかのしこりが残るでせう。それは相手の立場を軽視した上下関係に発してゐるからです。だから訳者は「したしむ」を [socialize] でなくて、[fraternize] にしたのでせう。[fraternize] には [as equals] = 「上下関係なく」友愛精神を生み出すの意味が込められてゐるからです。上下関係なく「したしむ」[fraternize] の精神が枯渇してしまへばどうなるでせうか。個人対個人では喧嘩となるか裁判沙汰となるかでせう。人間関係はぎすぎすしたままでせう。昔ながらの率直なつきあひは望めず、ストレスはたまる一方でせう。国家対国家では戦争と言ふ手段に訴へてでもと言ふ場合も出てきても仕方がないでせう。双方の内面に平和的な情意が生み出されてゐないのですから。これは本当に知恵のないことであり、歴史に学び得てゐない所業であると言はざるを得ません。

[Millennium] と言ふ言葉が西暦二千年を前後してよく聞かれましたが、歴史を短いスパンからだけでなく、もっと長い千年単位で見ようとして流行つたのであるならばいい傾向であると思はれます。歴史は対象として知的領域からのみ学ぶのでは真に平和的な精神は育ちえません。歴史は私たち自身のこころに湛へて行くべき極めて情操的なものであるべきなのです。歴史は紐解く自分の内面に存在するやうに学べば人間の心は歴史を学ぶでなく歴史に謙虚に学ぶことにより心は瑞々しく豊かに育つものです。早く言へば、千年前の歴史を紐解けば千年前の自分がその中から蘇つて来るのです。

一気に千四百年前まで遡つてみませう。推古天皇の御代です。摂政として聖徳太子が国政に關はつてをられました。六〇四年には憲法十七条を制定されたことは皆様よくご承知のところす。私は「あやまちをいさめかはしてしたしむ」と明治天皇がお詠みになられた伝統はその憲法の第十条にあると確信してゐるところです。そこを引用します。

「忿(ふん)を絶ち、瞋(しん)を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心あり。心各々執あり。彼是とすときは則ち我は非とす。我是とすときは則ち彼は非とす。我必ずしも聖にあらず。彼必ずしも愚にあらず。共に是凡夫のみ。是非の理詎(なん)ぞ能く定むべき。相共に賢愚なること鑿(みみがね)の端なきがごとし。是を以て、彼の人瞋(いかる)と雖も、還つて我が失を恐れよ。我獨り得たりと雖も、衆に従ひて同じく挙へ。」『聖徳太子の信仰思

想と日本文化創業』(六十九頁)私たちは、学生時代に「忿(ふん)」とは何で、なぜ絶たねばならぬのか、「瞋(しん)」とはどのような怒りで何故棄てねばならないのか、に始まり一文一文に心を込め時間をかけて輪読したものです。人には皆心があり、その心には、深い思ひ込みや切り捨てがたい執着と言ふものがあります。藩閥で争ってゐた時代であったならば、自分の藩のためにを先立てるから平行線をいつまでもたどり、意見の食ひ違ひの平和的な調整の仕様が無い、これが現実の姿で良かったでせう。今から千四百年前のこの憲法はそこに生きてゐる人々の現実の姿をありのままに捉へてゐるところが特徴であり、強みだと言はれてをります。『新しい学風を興すために 第二集』小田村寅二郎先生「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の輪読講義参照。「我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず」すなはち、どちらが正しくてどちらが正しくないかと言ふことは利害関係が混在して問題が複雑になればなるほど正邪がつけ難くなってくるものです。個人我の執着を完全には脱することが人間関係では不可能に近いことだからであります。そこに聖徳太子の「共に是れ凡夫のみ」と言ふ痛感があるのです。

「凡夫」とは煩惱に束縛されて迷つてゐる人のことを指します。聖徳太子ほどの非常に見識の高い優れた方へ、自分を凡夫と呼ばれたことは注目し値することです。小田村先生は「お互に凡夫同士であることを人間が理解し合ひ、確認しあひ、自覚しあふということに、すべての基礎を置いて一切の社会問題、家庭問題を考へて行くべきではないか。それをほかにして世の中を良くしようとしたって決して出来るものではない、と言ふ厳しいお気持ちが『共に是れ凡夫のみ』と言ふお言葉にこめられてゐると思ふのです。」(231頁)何度も十条を声に出して読み太子の御肉声が聞こえてくるまで辛抱強く読んで見る必要があります。自分だけの考えが絶対に正しいと思ひ込んで、我執に囚はれてゐるときは回りの意見が聞こえなくなつてゐます。独り合点で事を断行して旨くいかないときは、人間の常として他人を非難してしまふことがあります。そんなときにこそ「我独り得たりと雖も、衆に従ひて同じく挙へ」と言ふ太子のみ言葉に耳を傾けるべきでせう。

三行目に進みます。

[For thus alone can man and man] [For thus alone] の [thus] は例へば、[He spoke thus .] のやうに使はれ「彼は上のやうに言った。」[alone] は[Man shall not live by bread alone.] 「人はパンのみにて生きるにあらず。」(Mat,4:4) のやうに限定する名詞の後で「～だけで」の意に使はれます。[For thus alone] は散文的には =For only this reason で言ひ換へられ「上に述べた理由からのみ」と訳されます。次の [can man and man] は「人と人とは可能となる」の意です。

四行目に進みます。

[In friendship sympathize] [In friendship] は「敵意が消え友情が芽生えた」状態を表します。[sympathize] = to feel or show sympathy 「同情を感じるまたは示す」例へば、[sympathize with a person in his sorrow] 「人の悲しみに同情する」のやうに使はれます。

三、四行目は「ただ上に述べた理由から人と人とは可能となる

友情が芽生えお互ひの心を汲み取ることが」と訳しておきます。

「あやまちをいさめかはしてしたしむ」ことが「上に述べた理由」に当ります。私たちは人の過ちを見つけて腹を立てたときは、自分は決してそんな過ちは犯さないかのやうな錯覚をして他を一方向的に攻めることがあります。厳しく責められる逆の場合もあります。そんな油断も隙もあつてはならない冷たい世界に晒されてゐるのが現実かもしれません。だが御製のニュアンスは全く異なります。「過ちを諫め交はす」とときには相手の人間性も自分の人間性も平等に認め合つてゐるでせう。日本には昔から過ちを円満に解決してゆく知恵があるので。身近に聞かれる諺に「弘法も筆のあやまり」があります。平安初期の真言宗の開祖空海(弘法大師)は三筆の一人と言はれますがどんな名人でも時には書き損じることがある。時には誰だって失敗することがあるそんなにめくじらを立てなさんと言ふ教へです。「過ちを諫め交はしてその上で、親しむ」と言ふ親和合の精神は歴史的に遡つて見るのできるのです。聖徳太子が「我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず。共に是れ凡夫のみ」と当時の有司に憲法十条で示されたことに、私たち日本人は千四百年を隔ててゐても、その淵源を、求めるのできるのでありますし、聖徳太子のご痛感が日本の歴史のバックボーンを脈々と流れ続けて、明治天皇の御製に形を変へて表現されたと縦糸の血脈をはっきりと私たちは認めるのできるのであります。一層さすさすしてゐる現代社会にゐてこころがばさばさになってしまひさうですが、みづみづしい心を取り戻すためにも、最後にまう一度御製を拝誦してみませう。

〈参考文献〉

『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』

『新しい学風を興すために 第二集』

「心ある人のいさめの」[The sage expostulation of]

薬 (明治三十七年)

心ある
人のいさめの
ことのはは
病なき身の
薬なりけり

The sage expostulation of
The wise and thoughtful friend
A med'cine is for men in health
Who ought their ways to mend.

一行目から入ります。

[The sage expostulation of] の[sage] = discreet 「思慮深い」、[expostulation]=remonstrance「諫言」でありまして、動詞形は[expostulate]で「諫める」の意です。

二行目に進みます。

[The wise and thoughtful friend] は御製の「心ある人」を英語に直した箇所です。[thoughtful]= considerate of othersで「他人に対して思ひやりのある」の意です。二行目は「賢くて思ひやりのある友」と訳されます。一、二行目を続けて訳しますと

「知恵深く思ひやりにみちた友の

賢明な諫めの言葉よ」となります。これは三行目の最初の[med'cine]=medicine「薬」に含有されてある中味 (contents) を表してをります。

三行目に進みます。

[A med'cine is for men in health][A med'cine]= A dose of medicine「一服の薬」の意です。[for]は適当または利益のforです。例へば[He has a medicine for all evils.][彼は万病の薬を持ってゐる。]として使はれます。[men in health]は「病なき身の人たち」の意です。三行目の訳は「一服の薬は病なき身の人に効く」となります。

四行目に進みます。[Who ought their ways to mend]

[who]は 関係代名詞でありましてその先行詞は三行目の[men in health]となつてゐます。[mend]は二行目の[friend]と韻を踏むやうに行尾に置かれてゐます。散文的になりますが、平常の語順に戻します。[Who ought to mend their ways] となります。[ought to] は助動詞で「～をするが宜しい」、[mend]は「改める」、[way]=①direction 「方向、進路」または=②[manners]「態度」の二つの意味が考へられます。従ひまして、[their ways]は「彼らの進路または態度」の意であります。例へば、人に注意するときに[You ought to mend your ways]は「あなたは態度をあらためるが宜しい。」と使ひます。四行目の訳をとりますと、「進路や態度を改めたほうが宜しい(病なき人たち)にとって」となります。

『人の諫め』について

[諫める]を広辞苑で調べますと次の二つの意味があります。

①おさえ止める。禁制する。戒める。

②(多く長上に対して)非を告げて改めさせる。忠告する。御製では①と②のどちらの意味が当てはまるでせうか。明治天皇御製集の解説には「臣下の諫を喜んで納れさせ給ひし大御心、はかり知られて忝し。」(205頁)とありますから②の長上に対する臣下のお諫めととるべきでせう。ここで考へるべきは、「良薬口に苦し」と昔から言はれてをりますやうに「臣下の諫め」は口に苦しいものであったに違ひありません。普通に受け止めるならば顔を顰めて飲むものでせうが「喜んで納れさせ給ひし大御心」とありますから、注目に値するところであり、天皇と臣下と言ふ上下関係はどういふ人間関係であったのでせうか、世界最長の皇室の伝統と関係が深

いに違ひないと思はれ、実に興味をそそられるところであります。前回に引き続き千四百年前に遡りませう。聖徳太子が国民に示された憲法の出来た時代に心を馳せたいと思ひます。当時は、日本固有の民族文化と大陸から入ってきた仏教思想とが交流接触してゐました国家重大なる転機の時代であつたと言はれてをります。特にここでは憲法第十五条に心を傾けまして、一緒に、思索を展開したいと思ひます。

聖徳太子憲法の第十五条について

十五、 に曰く、私に背きて公に向ふは、是臣の道なり。凡そ人私あれば必ず恨みあり。憾みあれば必ず同ぜず。同ぜざれば則ち私を以て公を妨ぐ。憾み起これば制に違ひ法を害す。故に初章に云く、上下和諧せよと。其れ亦是の情(こころ)なるか。

「私に背きて公に向ふは、是臣の道なり。」「公」とは当代の氏族制度の積弊に基づく内政の紛糾を脱するために国民に示された国民全体生活と言ふことでせう。その公に向ふには「滅私(self-annihilation)」とは言ってをられません。何故でせうか。滅私とは私を滅ぼしてしまふことです。人間が肉体を持って生きてゐる以上觀念上では出来ても現実生活ではいろいろな面で可能ではないでせう。「滅私」の方が徹底してゐますからスローガンとしては格好が付くでせう。しかし現実となると人に見せるための嘘がつきまとひます。注意すべきは肉体と云ふ私を持って生きてゐる「私」の向ふべき心の姿勢なのです。[Self first]の自分を遠ざけて[turn one'](利己に背を向け顧みない)の意です。

[Self second]とする生き方をすることは心がけ次第で可能ではないでせうか。消しがたい私の存在から目をそらさずに一生修業したのが聖徳太子を讃仰して「太子和讃」を書き遺した親鸞上人でせう。「私に背きて公に向ふ」には「公」が君にも臣にもお互ひに見えてをり、自然な気持ちが表現されてゐます。「是臣の道なり」ここには私を切り捨てた冷たい響きではなく心が通ひ合ふ世界があります。

明治天皇に臣下が「苦言を呈した」。それを喜んで聞かれたのは何故だかお分かりになるでせうか。明治天皇が国民全体生活の開導のためにありがたい事として「背私」「向公」されたからであると私に思へてくるのです。もし仮に明治天皇が「私に背を向けて」をられなかったならば、君臣関係はどうなつていったでせうか。「諫め」を薬として聞かれないので「恨み」を臣下の心に残す言葉を吐かれたに違ひありません。「凡そ人私あれば必ず恨みあり。憾みあれば必ず同ぜず。同ぜざれば則ち私を以て公を妨ぐ。恨み起これば制に違ひ法を害す。」この通りの心の流れと君臣ともになるでせう。ぎくしゃくした冷たい人間関係が生まれて身動きが取れない状況を生み出し「法制」の強化更には、逆臣としてどこかの国でよくあるやうな肅清とならざるを得なくなるでせう。憲法はだから次のやうに言ふのです。「故に初章に云く、上下和諧せよと。其れ亦是の情なるか。」聖徳太子はどのやうな心情で生きて行けば世の中は良くなるのか、この憲法を世に示さねばならないほど、世の中は乱れに乱れてゐたのです。「故に初章に云く」とは第一条に「和を以て貴しと為し、」と示されてゐるところです。「上下和諧せよ」とは第一条では「然れども上和ぎ、下睦びて事を論ふに諧ひぬるときは、則ち事理自ら通ふ。何事か成らざらむ。」と表現されてゐます。御製と共に深く味はひたいところでもあります。



●烏山頭ダム設計者八田興一氏像を囲んで

「おもふにはまかせず」[Tho' things may go,]

おもふには

まかせずとても

人ごころ

たひらかにこそ

あらまほしけれ

Tho' things may go, against the wish,

All crossly and awry,

'Tis my desire to see men keep

Sweet equanimity.

一、二行目から入ります。

[Tho'] = [Though] 「仮令～なりと雖も」、[things] = [state of things] 「情況、形勢」。次の[against the wish]は「望みに反して」の意で、これは挿入句となつてゐます。[go]は二行目に続く動詞でありまして、[All] = [completely, wholly] 「全く、すっかり」は次の[crossly and awry]を修飾してゐます。[crossly] = [contrary to one's wishes] 「望みに反する」、(go)[awry] = [to go wrong] 「旨く行かぬ(不首尾)」の意であります。例へば[All went awry.]は「万事不首尾」などのやうに使用されます。訳を取ります。

「望みに反して、情況は

仮令、全く違ひ旨く行かぬと雖も」

一、二行目ではあるがままの現実(reality)が述べられ、三、四行目では願望(wish)が述べられます。そこに見事な対照(contrast)が表現されてゐます。味はって行きます。

['Tis] = [It is]でありまして短縮形の詩語なのです。[It]は仮主語で[to see]以下が真主語となつてゐます。[to see men keep]は五文型でありまして、[men]が知覚動詞[see]の目的語[keep]は目的格補語となつてゐます。[men]と[keep]はネクサス(S+V)の関係にありまして、[keep]の目的語は[sweet equanimity]であります。[sweet] = [pleasant to the senses] 「快い」、[equanimity] = [calmness of mind]は「心の平静」の意で、例へば、[He received the bad news with surprising equanimity.] 「彼はその悪い知らせを驚くほど平静に受け止めた。」のやうに使はれます。三、四行目の訳をとります。

「見るのは私の望み、人々が快く心の平静を保つてゐることを。」

(原文散逸のため、この項ここまで。)

「廣き世にまじはり」[Wide is the world wherein they walk]

廣
き
世
に

ま
じ
は
り
な
が
ら

い
か
な
れ
ば

せ
ば
き
は
人
の

心
な
る
ら
む

Wide is the world wherein they walk

And murmur and complain ;

In sooth, how narrow and confined

Appear the minds of men !

一行目から入ります。

[Wide is the world]は[The world is wide]を詩的に語順転倒されたところです。「世の中は広い」の意です。御製の「廣き世に」の訳がなされたと考へていいでせう。[wherein] = [in which] でありまして、先行詞は[the world]です。次の[they walk] はどこを歩くのかと言へば[the world]です。意味上からとれば[they walk in the wide world] 「彼らは広い世の中を歩く」と言ふこととせう。目線はあくまでも高く胸は張って歩いてゐるでせう。

二行目に進みます。

[And murmur and complain ;] [murmur] = [to say in a low indistinct voice] 「低いはっきりしないしなない声で言ふ、ぼそぼそとつぶやく」 [loud voice] = 「大声」は[wide] な世界で話されませうが、[low] = [gloomy] ですから彼らは「沈んだ」声で話す世界に入ったのです。一行目は[wide] = 「広い」 に対して二行目は[narrow] = 「狭い」世界に引き込まれてゐるのです。目線はどうなつてゐるでせうか。きっと下がってしまったに違ひありません。[complain] = [to express feelings of grief, pain, discontent] 「悲嘆、苦痛、不満を表はす」悲観的になりまたは我慢できないで不平や不満を言ふ心境になつてゐるのです。これが私たち人間のどうしやうもない心の癖でせうか。

一、二行目の訳を一応、取りませう。「広い世の中を彼等は歩く そして つぶやき、不平を言ふ。」
[And]を「そして」と訳しましたが一行目の目線から二行目の目線の変化つまり[wide]な世界から[narrow]な世界への心の変化が[And]を「そして」と訳したのでは表はせてゐないことが感想としてわいてきます。そこで私は日系四世のショーン・阿部と言ふ名前アメリカ人教師と詩の内容に付いてディスカッションしてみました。そこで発音上から分かつたことは強形の[and]であることが分かりました。ここは、[but]と交換可能の「対照」の「それなのに」の意味を持つ[And]なのです。例えば、[She tried hard and she failed. = She tried hard only to fail.] 「彼女は一所懸命やった、それなのに失敗した。」のやうに使はれます。ですから二行目を次のやうに訳をし直して見ます。「広い世界を彼等は歩く それなのに 心は狭くなりつぶやき、そして不満を言ふ」となります。御製は「廣き世に まじはりながら いかなれば」のところであります。「いかなれば」は自己の内心に問ひかけないで、他人の心の内を忖度しても御製の意味するところは分かつて来ないでせう。訳者齋藤氏は「いかなれば」世間の人との「交はり」のなかで心を閉ざすか、自分の内心に強く問ひかけられて、[And murmur and complain]を詩の二行目に入れられたのではないでせうか。皆様は「いかなれば」心が狭くなるか自問したときどのやうな動詞が応へとして出てきますか。「廣き世にゐて、心の持ち方を狭くすることなかれ」との明治天皇のお諭しに齋藤氏は、頭が俯き「つぶやき始めたり不満を言ふ」ときに自分の心が狭くなって居ると素直に回答されたのです。ここに、言ふなれば明治を生きた方の真骨頂がはっきりと伺はれ、私は、翻訳者齋藤氏を慕はしく思ひます。皆様はどう思はれますか？

三行目に進みます。

[In sooth, how narrow and confined]
[In sooth]の[sooth]は現代英語では[truth]ですから「実に」と訳します。[how]以下は感嘆文になってをり

ますから、三、四行を続けて考へませう。[how narrow and confined appear the minds of men !]

この文章の主語は[the minds of men]です。二行目の文尾の[complain]と韻を踏ませるために[men]を四行目の文尾に、主語と動詞の語順を転倒して置いてゐます。だから動詞は前にあります[appear]なのです。平常の感嘆文では[How narrow and confined the minds of men appear !]となります。[How]は感嘆文を作る副詞で「まあ何と」の意。[narrow]は「狭い」。[confined]は[confine]が形容詞として使はれたもので[=shut up, imprison, immure]「閉じ込める」「監禁する」の意味を持ってゐます。[appear]=「(何なん)と見える」の意です。

三、四行目の訳をとりませう。

「実に、人の心はまあ何と狭き中に閉じ込められてゐるやうに見えることよ」となります。

御製の「せばきは人の心なるらむ」の「らむ」は原因推量でありまして、「何故人の心はせまくなるのだらう？」の意であります。英詩の最初の[wide]と反対の心の状態である [narrow]に人の心が何故なってしまうのだらうと考へて見てください。私たちは体験的に、狭い心になってしまった後で、反省をして、心を広く保って置かねばならないと思つたことがあるでせう。

英詩では、[In sooth]=「実は」「人の心は広くあるべきなのに」と言ふ痛感が伝はつて来るやうに英語にきちんと訳がなされてをります。深く味はふべきところです。

上と同じやうな御製は

人	狭	と	ま	ひ	心
こ	く	も	じ	ろ	
ころ	なり	す	は	き	
かな	ゆ	れ	り	に	
	く	ば	な		
			が		
			ら		

であります。合せて日々両御製に親しみ心が狭くならないやうに努めたいものであります。

人の心が狭くなつたときに人と人との間では喧嘩となり、国と国との間では最悪の場合には戦争と相成つてしまふものです。明治天皇は鎖国を解いて、明治の代は、広き世になつたのだから人の心も比例して広くあつてほしいと願つてをられました。明治三十九年に次の御製があります。

さ	つ	な	空	ひ	天
か	ち	かり	は	さ	
ひ	なる	けり	へ	か	
あれ	国		だ	た	
ども	は		ても	の	

「ひさかた」は空にかかる枕詞。空は広く限りが無いが地上には国境があつて相隔て争ひが絶へない。「隔ての無い天のやうに、広く深い心を持ちたいものだ。」と言ふ大御心が拝されます。日露戦争の最中である明治三十七年に次の御製があります。世界の平和を願はれての御製であると拝されます。

た	な	思	み	よ	正
ち	ど	ふ	な	もの	述
さ	波	世	は	の	心
わ	風	に	ら	海	緒
ぐ	の		から		
ら			と		
む					

「よもの海みなはらから」とは、世界全体である四海は皆兄弟であるの意です。天皇である私はそのやうに思ふのに、どうして波風が立ち騒いで、平和ならぬことが起こるのであるか、と世界の平和を願つてお詠みになつてをられます。『明治神宮叢書』によれば「この年十二月、東京帝国大学講師アーサーロイド氏、この御製を始め数編を英訳してそれを世界各国の主権者におくりたるに米国大統領ルーズベルト氏いたく心を動かしきといひ伝ふ。」(215頁)とあります。若き人らに正しく歴史が伝えられなくて、日本の歴史に断絶が生じたと嘆かれる今日ですが、日露戦争百周年の今年にして子孫である私たちは、上述のことは、歴史的事実として心に受け止めて置くべきではないでせうか？

平成17年4月29日 昭和記念日のために

「むらぎものこころをひろく」 [Let but thy mind be wide and broad]

むらぎもの
こころをひろく
やしなはば
ながきよはひも
たまたざらめや

Let but thy mind be wide and broad
E'en as the boundless sea,
And like unto the width thereof
Prolong'd thy days shall be.

「むらぎも(群肝)の」は心にかかる枕詞です。『明治天皇御製集』には「むらぎもの」に始まる御製が他に七首あります。前回の御製は「せばきは人の心なるらむ」と下の句で詠んでをられました。今回もやはり「心」がメイン・テーマとなった御製であります。

一行目から入ります。

[Let] は使役動詞であり「しませう」の意です。[but] = [only] でありまして、例へば、[There is but one God.] 「神は一のみ。」(『英和中辞典』P147) のやうに使はれます。[thy] = [your]
[mind] = 「(body) に対し心、精神」例へば [Sound mind dwells in sound body] 「健全なる精神は健全なる身体に宿る」(『英和中辞典』P874) のやうに使はれます。[wide] は面積の「広大な」の意味で一般に使はれます。しかしここでは [=not limited、extensive] 「制限されない、広範囲の」の意で使はれてゐると考へます。[broad] = 「心の廣さ」の意でありまして「広い」とは平面的な広さではなくて、心が「偏狭でない」「度量が廣い」と言ふ意味で使はれてゐるでせう。「広い」の同意の形容詞を [and] で並列すると強調用法となり「もっと広い」の意味が加はります。一行目を訳しまと「他ならぬあなたの心を囚はれなく広くもっと広くあらしめませう」となります。

二行目に進みます。

[E'en] = [even] です。詩では響きの上から [v] はよく省略されます。例へば、[ever] は [E'er] となります。[E'en] は現代語でよく使はれる「さへも」の意味はここではありません。[古語] の用法でありますから「まさに」「いかにも」の意で解釈すべきでせう。[as] = [like] 「のやうに」の意です。[boundless] = [having no limits] = 「限界の無い」「限りない」: [vast] = 「広大な」の意です。二行目の訳を取りますと、「まさに限りなく広い海のやうに」となります。ここで考へてみませう。斎藤氏は何故心の広さを譬へるのに「海」を出したのでせうか？この比喻の根拠は私は前回の御製「正述心緒」明治三十七年にあると思はれます。

た ち さ わ ぐ ら む	な ど 波 風 の	思 ふ 世 に	み な は ら か ら と	よ も の 海
---------------------------------	-----------------------	------------------	---------------------------------	------------------

「よもの海 みなはらからと 思ふ」ことの出来る方が百年前に日本にをられたことは驚くべき事であります。世界中の人々が兄弟であると思ふことが可能となる。その心は [E'en as the boundless sea] 「まさに限りなく広い海のやう」ではありませんか。人間の修養として考へて見るとき、私たちには不可能に思へるやうな心の広さではありますが、「こころをひろく」「やしなふ(養ふ)」ことを人生の目標として修養に勤める。それは自分に厳しいことを課すこととなりますが、それをやらねば、御製に学んだことにはならないでせう。

三行目に進みます。

[And like unto the width thereof]

[unto]=[to] の古語です。例へば[Sleep is like unto death.]「死は眠りに似たり」のやうに使はれます。[width]=[「広さ」]。[thereof]=[its]=「其の」の意で、[sea]=「海」を指しての「其の」です。例へば、新約聖書マタイ伝 6 章 3 4 には[Sufficient unto the day is the evil thereof.]「一日の苦勞は一日にて足れり」があります。もちろん何でも出てきましたやうに行頭の[And]は命令文を受けてみますから「そして」の意味はなくて「さうすれば」の意です。一、二行目が条件の文でありまして、三、四行目が帰結の文意が込められぬのです。御製では「むらぎもの ころをひろく やしなはば(養正するならば)」が条件となり、「長きよはひも たもたざらめや(保てないことがあらうか、きっと保てる)」が帰結となってをります。三行目の訳を取ります。

「さうすれば、その広きこと海のやうに」

四行目に進みます。

[Prolong' d thy days shall be]

[shall be prolong' d]=「・・は延びるでせう」の意です。何が延びるのか。[thy days]

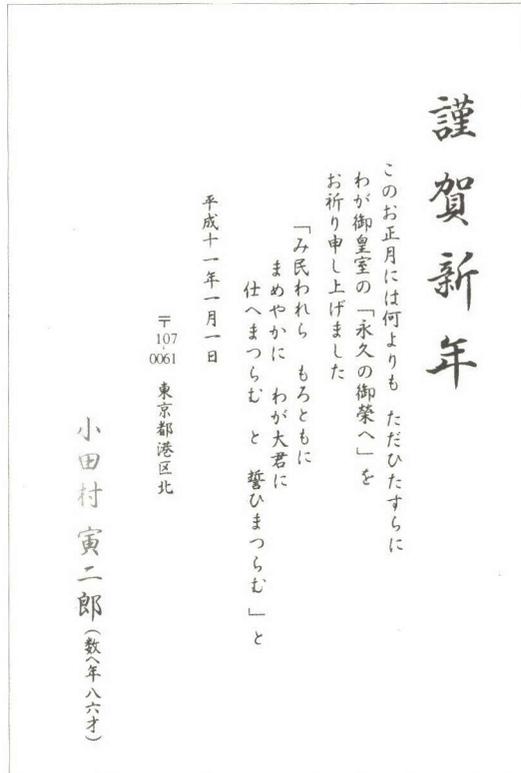
=「あなたの寿命」です。

四行目の訳は「延びるでせう、あなたの寿命が」となります。早死にをした人に対して、「あの人は命を縮めた」と言はれますから、逆に、御製にありますやうに「寿命を延ばす」ことも身と心の持ち方一つで可能となるに違ひありません。江戸時代の臨濟宗の僧であります白隠禪師は『夜船閑話』の中で、正しい想念を繰り返してたへず持つことで「五臓六腑の気の滞りや疝気(下腹部内臓の痛む病気)や局部のいたみが、すっかり治るであらう。」と更には「もし病が治らぬ場合は、この自分の頭を切り取ってよいぞ」とまで言っている。病気は「気の病」とも言ひます。世の為人の為に役立つにも先づは正しい気を養ひたいものです。

<参考文献>

『明治天皇御製集』

白隠禪師『夜船閑話』



●学恩深き師からの賀状

「目に見えぬ神にむかひて」 [Before the gods invisble]

神祇 (明治四十年)

目に見えぬ
神にむかひて

はぢざるは
人の心の
まことなりけり

Before the gods invisible

He unabash'd may stand

Who hath a heart sincere and true

That boundless can expand.

一行目から入ります。[Before the gods invisible]。大文字の [God]は「一神」でありまして、(何々)神の場合は小文字で表はします。例へば、氏神さまは[tutelary god]。皇祖皇宗の神は[the gods]であります。[invisible]=[incapable of being seen]「目に見えない」の意です。一行目の訳は「目に見えない神の前に」となります。

二行目に進みます。[He unabash't may stand] 散文的に平常の語順に直しますと[He may stand unabashed]となります。[may]は意志動詞と合する場合は一般には「許可」の意味になりますから「許される」。しかし、ここでは「人」は三行目に述べてある[a heart sincere and true]を [hath]=[have]「持って」をりますから、「可能」の意味を持つと考へるべきでせう。[unabashed]=「落ち着いた、恥ぢないで」。そこで、二行目の訳は「彼は恥ぢないで立つことができる」となります。

『明治神宮叢書』第七巻御集編には「人道は至誠にあり。所謂『俯仰天地に愧ぢず』といふ公明正大なる生活は、至誠なるもののみよくするところなることを諭させ給へり」(415頁)と解説がなされてゐます。「俯仰天地に愧ぢず」とは(孟子、尽心上)には「仰いで天に愧ぢず、俯して人に(※)ぢず」とあるところですが。天を仰いで恥じることが無く、地に俯して慙愧することのない生き方は誠を尽くす心の姿勢を言ふのでせう。安政六年(1859)に吉田松陰が小田村伊之助に与へた言葉は「至誠にして動かざる者未だ之あらざるなり。」でありました。「至誠天に通ず」を松陰先生の信念を持って、表現すれば上記のごとくだったのでせう。これは英語に直すと[Sincerity moves heaven.]であります。これに似た諺に「精神一到何事かならざらん」[Where there's a will there's a way.]があります。似てゐるとは云へ、ここでは[a will]=「意志」を働かせることに主眼が置かれてゐますから大分ニュアンスが違ひます。[Sincerity]は[a will(意)]と[emotion(情)]の混合体であるやうです。しかし御製を何度も拝誦してみますと、「意」と「情」だけでは表はし得てゐない。プラス何かを感じられます。之を念頭に置いて三行目を読みみます。

三行目に進みます。[Who hath a heart sincere and true]

[Who]は関係代名詞でありまして、二行目の[He]を受けてをります。[hath]=現代語では[has]でありまして、「持ってゐる」の意です。[a heart sincere and true]は散文的な語順では[a sincere and true heart]であります。[sincere]は上に記しました[sincerity]の形容詞形でありまして「まごころのある」の意です。御製にありますところの「人の心のまことなりけり」の「まこと」が英訳されてゐるのでせう。ここで少し立ち止まって考へて見る必要があります。訳者は何故「まこと」を[sincere]だけでなく、其の後に[and true]を置かねばならないと感じたのであるかと言ふことです。いかに時間がかかるとも、いろいろな辞書に相談してみることがなされないと翻訳者の声は聞こえて来ないでせう。知的理解は人間の部分にすぎないのです。頭では分かっていても情意が納得してゐないから心からの悦びは湧いて来ません。浅い体験を私たちは繰り返し、先へ先へと進んでばかりゐます。

私の幼い日の体験を聞いて下さい。私が小学校の低学年の頃のことです。手に疔が出来たので明治十三年生まれの祖母と「疣地蔵さま」にバスで隣村までお参りに行きました。そこに、湧き出てゐる濁った「薬水」を手に塗り、小さな瓶にも戴きました。そのあたりに雑草がはえてゐたから「草を刈ってきれいにすべきだ」と祖母に言ひました。祖母は見た通りに「その通りだ」と相槌はうちませんでした。意外だったことに「そんなこと

を言ふと罰が当たるよ。」「あんたが一回、二回は出来てもずっとやれることではない。自分がしないのなら口に出しなさんな。」と諭されました。このことは「一過性の情熱」と「永続する志」についての基準になることだと、今でも大切なことを聞いたのだと思ひ出してをります。

ここで[and true]と何故付けたのかについて再考しませう。[sincere]=[genuine]「本物の」の意です。例へば[sincere good wishes]「真心からの好意」などと使われます。この表現からは、「一過性の親切」ではありませんが「永続する志」ははっきりと分らないでせう。

ご承知の通り、普遍妥当な価値を真善美と言ひます。英語では[the true, the good, and the beautiful]「真、善、美(の三要素)」であります。この価値は三つの部分があるのではなくて、照射してゐる方向から認識上の「真」と、倫理上の「善」、審美上の「美」と名付けられてゐる一にして全なる物でせう。即ち、「善」と「美」と個々に存在するのではなくて、「真」=[true]によって統一されてゐる価値であると私は考へます。掘って「人の心のまことなりけり」にこもる詠嘆を訳出するには、[sincere]に加へて[and true]が加はらないと翻訳したことにはならない。「まことなりけり」には「本物の永続する志」が込められてゐますから、翻訳するには[and true]を置かざるを得なかつたのではないでせうか。いかが思はれますか。ご感想を聞かせて下さい。

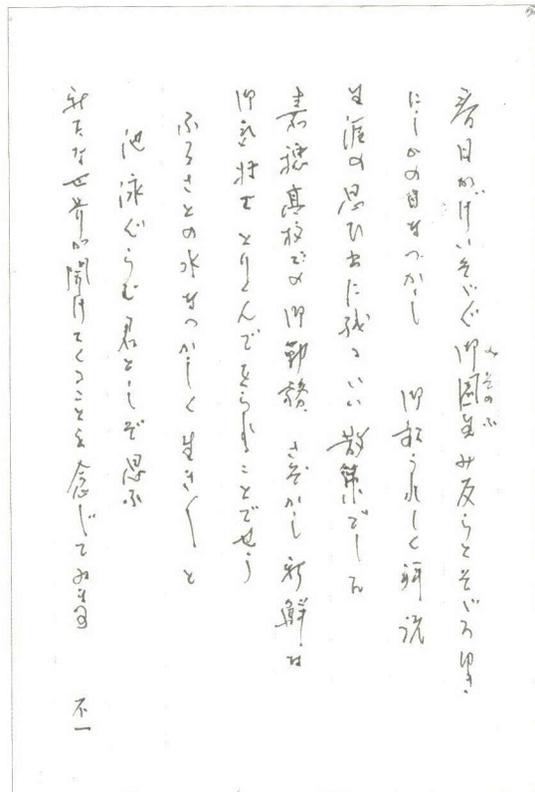
三行目の訳は「彼には心がある、まことにして、真なる」とします

四行目に進みます。[That boundless can expand.] [That]は上のところを受けてをります。[boundless]=[not limited]「どこまでも限りなく」の意です。[can expand]=[can open wide]「広く広がる」。四行目の訳は「そのころはどこまでも限りなく広く広がる」となります。「そのころ」はどのくらい広くなのですか？前回の二十七回を思ひ出して下さい。[E'en (イーン)as the boundless sea]「まさに限りなく広い海のやうに」であります。

海のごとく限りなく広きころ、それは日々刻々に、無私を行じることから生まれるのでせう。言ふは易く行ふは難しではありますが、高きを仰ぎ、修養に勤めたいものであります。

〈参考文献〉

『明治神宮叢書』第七卷御集編



●学恩深き小柳先生に載しし文(平成12年4月11日)

「くもりなき人の心を」[The heart of man true and sincere,]

くもりなき
人の心を
千早ぶる
かみはさやかに
てらしみるらむ

The heart of man true and sincere,
And from dark clouds all clear,
The gods must with their glory's light
See through and lay all bare.

一行目から入ります。

[The heart of man true and sincere,] [The heart of man]は御製にあります「人の心」でせう。[true and sincere]は「真にして誠の」の意です。後置された形容詞でありまして前にあります[The heart of man]を修飾してゐます。一行目の訳は「人の心、真にして誠の」となります。

二行目に進みます。

[And from dark clouds all clear,] ここは、御製の「くもりなき」が英訳されたところです。[and]はその前に[,]がありますから一行目とは別立てで[also]「また」の意となるでせう。[dark clouds]は「暗い雲」ですが何を覆った雲でせうか。一行目の「人の心」です。[all]は副詞で=[wholly]「完全に」の意で[clear]「晴れた」を修飾してゐます。二行目の訳は「また、暗い雲から完全に晴れた」となります。

前回は「まこと」が[sincere and true]と表現されてをりまして今回は[true and sincere]と順序が逆になってゐますが、何故だと思はれますか。いろいろ考へて見ましても意味上の相違を見出すことは出来ません。一つは[style]=「芸術性」でありませう。今一つは[phonetic]「音声上から」であると考へます。前回は[a heart]に続くのに[true]であると[t][t]と「詰まる音が続くのは音声上から響きが良くないから[true and sincere]を前後の単語の置き換えをして[sincere and true]としてゐるのであると考へます。皆様はいかが思はれますか違ふとり方があれば教へて下さい。「形容詞の位置と語順」の中に「意味上名詞との関係が密接なほど名詞の近くに置く。」と言ふ文法のきまりがあり[true heart]は慣用的に使用されるから[true and sincere]の語順を取ったのでせう。

三行目に進みます。[The gods must with their glory's light]

[The gods]は主語になってをります。[must]は助動詞であり「明らかな推量」を示し「きっと・・・だらう」の意で、四行目の二つの動詞[see]と[lay]に続きます。其れ故に、その間の[with their glory's light]は副詞句として挿入されてゐると考へられます。[glory's]=[glorious]は[noble]=「気高い」の意であります。その動詞形は[glorify]=[worship]「神を拝む」、「崇拜する」であります。

三行目の訳を取りますと「神々はきっと光輝ある光を放たれて」となります。

四行目に進みます。

[see through and lay all bare.] [see through]は「見抜く、洞察する」。[lay bare]は「頭はにする、裸にする」の意です。[all]は副詞で=[completely]=「完全に」の意です。この二つの動詞は他動詞であります。ならば目的語はどこにあるのでせうか。「神様が何を見抜き、裸にされるのか？」を考へて見て下さい。一行目にありました[The heart of man]「人の心」を「照らしみられる」のであります。神様に自分の心が頭はに照らし見られる。即ち、自分本来の[innocent and pure]「汚れなく純な」心に立ち返ることではないでせうか。

ここで礼を失する問ひではありますが、「人の心」には明治天皇ご自身の心も含まれるてゐるのかを考へて見て下さい。もし自分の心を抜きにした教訓的詩歌であると思はれるならば、再度御製を味はひなおさねばなりません。これほど率直に内面告白された詩は他にはめったに出会ふことはできません。強いて例をあげるなら

ば英国の詩人ウィリアム・ブレイクWilliam Blake(1757—1827)でせう。[Songs of Innocence and Experience]「無心と有心の歌」(研究社小英文叢書—7—)はぜひ読んでいただきたい詩集です。[Innocence]とは汚れのまったく無い赤子の心の如き物で人は[Experience]年を取り「経験」を積むにつれ心が汚れてしまふ。人の心の汚れには次のやうな語が冠せられます。[selfish]=「身勝手」[cruel]=「残酷」[jealous]=「ねたみ」、[vain] =「むなしい虚栄」などがあります。[selfish Fear]「自己本位の恐怖」が夜の鎖につながれたやうに心を閉ざす。とBlakeは歌ひます。

[Break this heavy chain
That does freeze my bones around.
Selfish ! vain !
Eternal bane!
That free Love with bondage bound.]

「私の骨の回りに凍り付く
この重い鎖を破れ！
自己本位の鎖を！虚栄の鎖を！
永久の破滅と死の鎖を！
自由なる愛の心を束縛する鎖を！」

神の前に立ち一心に祈り鎖を断ち切り、赤子のやうな無心な心に近づかんとするBlakeの姿が彷彿としてきませんか。夜の闇が消えさり、歓喜と光明が今にも歌ひだす。そんな勢ひのある詩ではありませんか。

詩を幼いうちから暗唱することは大切なことです。昔は寺子屋で子供たちに漢文の素読をさせました。西洋ではマークトウェインの「トムソーヤの冒険」にあります様にバイブル(古事記に類する古代詩)を日曜礼拝で暗誦させてゐます。Blakeの詩なども暗誦させられてゐる詩の一つです。

御製に戻ります。「千早ぶる かみはさやかに」「千早ぶる神」には神への絶対の信順が込められてゐます。「さやかに」厚く覆つてゐた雲がすうっと消え去る語感があります。「てらしみるらむ」神と自分の心が不離不測で一体となり得たときに生まれ出た表現でせう。私たちは神様にお参りしたときには心が洗ひ浄められ、ブレイクの言ふ「自己本位で虚栄の重い鎖を断ち切り」「歓喜と光明」が燦燦と照り出すそんなお参りを心がけたいものです。そこで、神前にお参りして自分の心の汚れが清められ「神情開朗」となったとき、どれくらい嬉しいことであると思はれますか。参考のためブレイクの詩を更に引用します。

「さびしい谷間を笛吹いてくれば / たのしいよろこびの歌を笛に托してくれば /
雲の上に ひとりの幼な児が見え / 笑ひながら 私に言ふ /
Piping down the valleys wild, / Piping songs of pleasant glee,
On a cloud I saw a child, / And he laughing said to me:

「子羊のこと歌ったのを 笛に吹いて！」 / そこでわたしは たのしいしらべの笛を吹いた / 「笛吹きおじさん そのうた もういっぺん」そこでわたしは笛ふいた / 子供は聞いて泣いた
'Pipe a song about a Lamb !' / So I piped with merry cheer.
'Piper, pipe that song again ; / So I piped: he wept to hear.

「そこでわたしは笛吹いた 子供は聞いて泣いた」
悲しいから泣いたのですか。嬉しくて泣いてゐるのです。
「その笛を その楽しい笛を下に置き / 楽しい調べの歌を おじさんが歌つて
そこでわたしは おなじ歌をくりかへし歌つた / それを幼な児は 聞いてよろこび泣いた」
'Drop thy pipe, thy happy pipe ; / Sing thy songs of happy cheer :'
So I sang the same again, / While he wept with joy to hear.

「幼な児は喜んで聞き入りながら泣いた。」
わたしたちの心の法則は喜びの極みに泣くのです。

最後に御製をもう一度拝誦ませう。

くもりなき
人の心を
千早ぶる
かみはさやかに
てらしみるらむ

「めにみえぬ神のところに」 [With heavenly powers invisible]

神祇 (明治四十年)
 目に見えぬ
 かみの心に
 通ふこそ
 ひとの心の
 まことなりけれ

With heavenly powers invisible
 In silence it communes,
 The heart of man sincere and true,
 Precious beyond all boons !

『明治天皇御製集 卷下』 四一四頁には次の様な解説があります。

「至誠には直ちに神明と感応するところを詠ませ給へり。天皇の御製は御聖徳と御人格との自然の発露にして、我等国民に遺し給へるその金玉の聖藻は、いづれも永久に欽仰し奉るべきものなるが、中にも、一八八頁の浅みどり澄みわたりたる大空の、一五五頁のわが心およばぬ国の果てまでも、二一五頁の四方の海皆はらからと思ふ世に、及びこの目に見えぬ神の心に通ふこそその御製の如きは、天地の心直ちに御心に響きしものにして、古今の絶唱とたたへ奉るべき大御歌なりとす。」「絶唱」とは極めてすぐれた詩歌のことです。上の歌を加へ、その四首は次の御製であります。

正述心緒
 (明治三十七年)
 よもの海
 みなはらからと
 思ふ世に
 など波風の
 たちさわぐらむ

神祇 (明治三十六年)
 わがこころ
 およばぬ国の
 果てまでも
 よるひる神は
 守りますらむ

天 (明治三十八年)
 あさみどり
 澄みわたりたる
 大空の
 広きをおのが
 心ともがな

このやうなすぐれた詩歌を、目にして読むに留まらず心の中に若いうちに湛へておくと、人生の途上、折につけ口ずさみ心を励ますことができるでせう。広く国民に呼びかけたいものです。

それでは一行目から入ります。[With heavenly powers invisible]

[With]は二行目の[communes]と繋がり「(精神的に)親しく交はる」の意となります。[heavenly powers]は「神々しい力」であります。御製の「神のところに」にあたるところでせう。[invisible]=that cannot be seen「目に見えぬ」の意です。例へば[An angel and a high-frequency wave are equally invisible to the mass of mankind.]「天使も高周波も等しく大多数の人々の目に見えない。」などと使われます。

一行目の訳は「目には見えざる神々しい力と」となります。

二行目に進みます。[In silence it communes,] [In silence] =「静かに、音もなく」の意です。[invisible]は「目に見えない」でした。二行目は [In silence] であり、目にも見えず耳にも聞こえない状態が創り出されてゐることを念頭に置いてください。目をつぶると反って見えて来るものがある。聞こえる音は聞こえるがままたくしを無くして行く時、きっと聞こえてくるものがあるに違ひありません。

例へば、日照りが何日も続いて田畑の作物が枯れつつある。そんなときに降ってきた雨を「干天の慈雨」と昔から呼ばれてゐます。雨音に耳を澄ませてみると、天の慈しみのメロディが昔の人たちと同じやうに、聞こえて来るに違ひありません。私たちは人造の音楽は聴くけれども、天の音に無心になって耳を傾け、[commune

with]「親しく交はる」ことからあまりにも遠ざかりすぎてはゐないでせうか。現代の私達は雨音に耳を傾け自分のパサパサだった心が枯れかけてゐた畑の作物と同じやうに命が蘇り生気が漲る貴重な体験をしてみたいかがでせうか。

代名詞の[it]は三行目の[The heart of man sincere and true]を指してゐます。意味は「之」です。「之」は神のこころと通ふのです。

二行目の訳は「音も無くこれは通ふ」となります。

三行目に進みます。[The heart of man sincere and true,]は御製に有りますところの「人の心のまこと」が英訳されたものです。

四行目に進みます。[Precious beyond all boons]

三行目の「人の心のまこと」がどれほど大切なものであるかがここで述べられてゐます。[communes]と[boons]は韻を踏んでゐます。[precious]=very valuable「非常に貴重な」。[beyond]=far past any power of「…のいかなる力をも越えて」。[boon]=[a timely benefit]「時機を得た恩恵」「恵み」の意。例へば、[The rain was a boon to parched (=dried up) crops.]「雨はひからびた作物にとって恵みであった。」と使われます。四行目の訳は「貴重なること、いかなる恵みにもまして」となります。

「人の心のまこと」について

神は存在するのかもしれないかと人と論争したり、また自分が不幸な目にあつたときには神は私を見放したのではないだらうかなどと忸怩たる思ひに陥ることがあります。あなた方は神に対してどんな思ひを抱いてをられますか。明治天皇のこの御製では神は存在することが大前提として詠まれてゐます。「めにみえぬ 神のこころに かよふこそ」と上の句で詠まれてゐる通り、不可思議の靈力を有し給ふ神は冥冥の間に存在してゐるに違ひありません。昔から「神は敬するに威を増す」と言はれます。人が神を敬へば敬ふほど貴さを増すそんな存在が神さまだよと昔の人が現代の私たちに神を敬ふ作法として教へられてゐるのでせう。自己の内面に問ひただすべきは「敬ひ」こころの深さと真摯さ(sincere)ではないでせうか。「神のこころ」にしても「人のこころのまこと」にしても、神を「敬する」に相応しい姿勢を先づは取らねばなりません。そして辺りを清め、心を静め自分のこころの内に「之」を求めないと空をつかむやうな、遠い存在でしかなく抽象論に陥るだけでせう。

この御製の「人のこころのまこと」と松蔭先生の「至誠」に通じ合ふものを感じます。

「第四章「反りて諸を己に求む」

「第五章「家の本は身に在り」

「反求(反りて求む)」の二字、聖經賢伝、百千万言の帰着する所なり。「在身(身に在り)」の二字も、亦同じ工夫なり。天下の事、大事小事、此の道を離れて成ることなし。大、四海を包み、剛、金石を貫く。あに復、他道あらんや。下二章の大議論と云へども、此の二章に外ならず。」

松蔭先生の信念に発する「天下の事、大事小事、此の道を離れて成ることなし」と言ふ断言は傾聴に値するとは思ひませんか。「此の道」とは「反求」と「在身」のことです。反省に反省を重ねて己を深めて行く。一切の問題の根本は国家社会にあるのではない、周囲の人に責任を負はせてはならない。「反求」であり「在身」であると言はれる。

これは方法論を提示されたものではありません。人生をうまく生きて行くための処世術を解かれたのでもありません。これしかない「道」であると言はれてゐるのです。これこそが「神のこころ」にも通ずる道であると私は考へます。「神のこころ」に人の心が親しく通ひ合つてゐる。そのときどんな力が湧いて来るでせうか。「大、四海を包み、剛、金石を貫く」必ず、不可思議な力が湧いて来るに違ひありません。松蔭先生は「至誠にして動かざるものは、未だこれ有らざるなり」と喝破されました。この姿勢でこの道を踏み行けば必ずこの心境に達する。信じられてこそただ一度の掛け替へのない自分の人生と言へるでせう。

「人のこころのまこと」が「めにみえぬ神のこころ」と通ひ合ふそのやうな神通力はどこか、遠いところにあるのではない、「反求」し「在身」するわが心のうちに存在するのではないでせうか。最後にまう一度御製を心を込めて詠ませう。英訳されたこの御製はヘレン・ケラー女史が最も愛唱した詩だと西南学院大学の創立者C.K.ドジャー氏は言つてゐました。

〈参考文献〉

『明治天皇御製集 卷下』

平成十七年六月五日(日)書庫蔵にて

「あさみどり澄みわたりたる」[As broad clear and cloudless as]

天 (明治三十八年)
あさみどり
澄みわたりたる
大空の
廣きをおのが
こころともがな

As broad and clear and cloudless as
The lucid, azure sky
Would I could make my mind and heart,
With even heaven to vie !

一行目から入ります。[As broad and clear and cloudless as] [As A as B]は同等比較で「Bと同じ位Aだ」の意です。二行目の [The lucid, azure sky] と同じ位 [broad and clear and cloudless]だ。」と言ってゐます。[broad]=extending far and wide「遠くまで幅広く広がってゐる」、[clear]=free from clouds, haze, or mist「雲、もや、霧がない」、[cloudless]=「一点の雲もない」の意です。[lucid]=clear「澄んだ」水が澄んだ場合や空気が「澄み渡れる、清く澄める」ときに使用されます。[azure]には二つの意味が考へられます。①「浅緑の」=[lapislazuli]「瑠璃色」と②「碧空」であります。

明治天皇は上の御製をいつどんな時間にお詠みになられたと思はれますか。例へば元旦の朝まだき、国民の福祉を皇祖・天神地祇にお祈りをされる祭祀に歳旦祭があります。その折に詠まれたのであるならば [azure] は「浅緑」と訳するがよいでせう。明治天皇はどのやうな衣服を身に着けられてゐたと想像しますか。神祭りのご装束を着けられてゐるお姿をわたしは思ひ浮かべてゐます。英国の非常に古い諺に [Cleanliness is next to godliness.] があります。「清潔は敬虔に近し」と訳されます。日本では水垢離をとって神に仕へると昔から言はれますが、西洋でも身体や衣服を清潔にして敬神の念を込めるやうです。「あさみどり澄みわたりたる」には、太陽がまだ顔を出してゐない薄暗い頃からくっきりと姿を現すまでの時間の経過、それは明治天皇が国と国民の安寧をお祈りしてをられる厳粛な時間が感じられるところであり、皇后陛下の『瀨音』(大東出版社)と言ふ御歌集をここに引用します。(八十九頁) 今上陛下も明治天皇と全く同じやうになされてゐることがしのばれる御歌です。

去年今年
(昭和五十四年)
こそ
去年の星
宿せる空に
年明けて
歳旦祭に
君いでたまふ

一、二行目の訳をとりますと「遠くまで一点の雲もなく澄み渡りたる透明で瑠璃色の空のごとく」となります。

三行目に進みます。

[Would I could make my mind and heart,] [Would I could … !]は願望を表す祈願文となつてゐます。「私は一、二行目のやうに心を在らしめたい」と祈願されてゐるのです。[mind]=the part of a person that feels, perceives, thinks, wills, and especially reasons「感じ、知覚し、考へ、意志を働かし、特に論理的に考へる、人間の器官。」(Heart)に対して智心、悟心。[heart]は15回を参照して下さい。三行目の訳は「出来るならば私の心を在らしめよ」としておきます。

四行目に進みます。

[With even heaven to vie !]二行目の行尾の [sky] と [vie] は韻を踏んでをります。[vie]=contend「競ふ」の意で動詞です。この動詞の意味上の主語はどこにあるでせうか。[my mind and heart]です。散文的になります。書き直しますと次のやうになります。[My mind and heart vie with even heaven !] [heaven]=sky—usu-

ally used in plural=「空——通常複数で用ゐられる」の意です。

四行目の訳は「天空とさへ競ひて」となります。訳者は気概では表現し得ない程の志を込めて英語にしていると思はれます。とかく狭くなりがちな私たちの心を「天空とさへ競ひて」広く持ちたい。「あさみどり澄みわたる大空」を仰いでもっと広く持ちたいものであります。皇后陛下の歌集「瀨音」(大東出版社)を再度引用させて戴きます。皇后様は御製に詠まれました「かの大空」をふり仰ぎ給ふてをられたのです。三十八頁を開いて見ませう。明治神宮御鎮座五十年にあたり(昭和四十五年)

ふり 仰ぐ	か の 大 空 の	あ さ み ど り	か か る 心 と	お ほ し 召 し け む
----------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	---------------------------------

皇后陛下は「かの大空のあさみどり」を仰ぎ見てをられます。そこで「ふり仰」いでをられるのは明治天皇の広く、清らかな御心であります。「かかると思し召しけむ」に皇后様のお人柄が偲ばれます。それだけではなく日本の精神的伝統の命の尊い水脈が感じられます。

『講孟節記(上)』に「自ら之を取るなり。」が有ります。(299頁)『講談社学術文庫』上の御製に併せてここを込めて読みたい所です。

「此の章、主意此の一句にあり。『自ら侮る』『自ら毀る』『自ら伐つ』『自ら作せる藪(わざわひ)』皆是『自ら取る』の謂なり。下第十章『自暴自棄』も亦此の謂なり。自ら侮るとは、自身に吾が身を軽侮するなり。凡そ人の一身、性を天に受け、徳を心に具す。天地の待つ所、鬼神の依る所、それ亦尊重と云ふべし。」孟子の性善説を敷衍して説明をされてゐるのではありません。起こり得る一切の自身の行為の結果は「皆是『自ら取る』の謂なり」と言はれる。「而して自ら其の尊重たるを知らず、放僻邪侈至らざることなき者は、豈自ら軽侮するに非ずや。」人間の本性が先天的に善であるなどと第三者への説明として一言も述べてをられません。「人の一身、その本質を天から戴いてゐる。道徳的行為の主体として徳を自分の心の内に具へてゐる。」「天地の待つ所」我が身は天地の期待を寄せられてゐる存在と言ふことです。私たちはよく神様に助けて下さい、とお祈りします。しかし、松陰先生は違ふのです。自分は神に頼る存在ではなく、自分をこの世に送り出し給ふた鬼神が逆に頼りとされてゐる存在なのだ、と言ってをられるのです。是ほどにも自己の存在を尊く捉へてをられたのです。この自覚が本物であるから、仮令、牢獄に在るとも鬼神に依るべく、一刻も忽せになさらず、一所懸命、孟子を囚人たちに解かれたのでせう。

[pride]には二つの意味合ひがあります。①[a feeling of being better than others]「他人よりすぐれてゐると言ふ感情」「うぬぼれ、高慢」②[a reasonable and justifiable sense of one's own worth]:[self-respect]「自分自身の価値についての正当かつ妥当な認識」:「自尊心」。

①のプライドは回りの友には嫌はれることになるでせう。国家間では「おごり」を持つ国として反感を持たれても仕方がないでせう。この感情からは求心力は決して生まれて来ません。バブルがはじける前の日本はGNP云々。経済力で世界第二位だと他国と比較して悦に入り、確かに「おごり」がありました。エズラ・ボーゲルの『Japan as No. 1』——二十一世紀は日本の世紀——(TBSブリタニカ)は当時日本でも翻訳されベストセラーとなりました。それを讀んだ日本人を有頂天にさせましたが、あれは陽動作戦でアメリカ人に警戒心を植ゑ付ける本であつたなど、故、江藤淳の呼称した「第二の敗戦」を食らつた今にして思ふのであります。「自らを侮るとは、自分に吾が身を軽侮するなり」をよく噛み締めねばなりません。[pride]=[self-respect]の源泉となる最高の行為は国家・社会のために自分の命を[self-sacrifice]「自己犠牲」することはいかなる独立国家にとつても[common sense]「常識」ではありませんか。ただしここで使はれる「公」の概念がChinaには存在せず当て嵌まりません。事の本質を并へずに他国が靖国神社に参拝するなど言へば「はいわかりました」と参拝を止めるならば、「自身に吾が身を軽侮する」国でしかないと言はざるを得ないでせう。国にしても個人にしてもプライドを正しく持つべきではないでせうか。正しく人間がプライドを持つために上の御製や松陰先生の言葉は欠かせないものであります。

最後に御製を拝唱ませう。

天(明治三十八年)

あさみどり澄みわたる大空の廣きをおのがこころともがな

<参考文献>

皇后陛下『瀨音』(大東出版社) エズラ・ボーゲル『Japan as No. 1』 『講孟節記(上)』(講談社学術文庫)

「さしのぼる朝日」[As bright and clear and rosy as]

日 (明治四十二年)

さしのぼる

朝日のごとく

さはやかに

もたまほしきは

こころなりけり

As bright and clear and rosy as

The rising morning sun,

With such a mind and heart and soul

May everything be done !

一行目から入ります。

[As bright and clear and rosy as] [bright]=shedding much light: shining, glowing「たくさんの光を発してゐる:光ってゐる、強く輝いてゐる」を最初に置き、次は[clear]=[free from clouds, haze, or mist]=「雲、もや、霧がない、澄みきった」であります。「さしのぼる朝日」を観念でなく体験で捉へ直さねばなりません。早起きして昇る朝日を見てみませう。[rosy]には二つの意味があります。①rose-coloured「ばら色の」、healthily pinkとも言いまして朝もやを払って薄桃色に染まった瞬間に見られる色であります。それを見たとき、人間は洋の東西を問はず

②hopeful「希望に満ちた」気持ちになるのでせう。

二行目に進みます。[The rising morning sun,] 「朝日」を英語に訳せば[The rising sun](旭日)又は、[The morning sun]であります。「朝日が昇る。」と言ふ文ならば[The morning sun rises.]であります。[rise]には勢ひがあります。例へば、[He is a rising man.]は「彼は日の出の勢ひだ。」と訳されます。[Then I feel the patriot rise within me.] 『英和中辞典』P1209「其の時は愛国の情わが胸に起るを覚ゆ。」等の例もあります。そこで、単なる情景描写でなく情感も込めて、訳者は、「さしのぼる朝日のごとく」を[as / The rising morning sun,]と英語に直したと考へられます。

一、二行目の訳は「さしのぼる朝日のごとく 光り輝き、澄みきった薔薇色の」となります。

三行目に進みます。御製の「もたまほしき」とはどんな意味ですか? 「もた」は「持つ」の未然形です。「まほし」は「話し手の希望の意を表す・・・たい。」ですから、「持ちたい」と言ふ意味になります。英語を見てみませう。

[With such a mind and heart and soul]

前回では[my mind and heart]が出て来てゐました。今回は[soul]が加はってゐます。例へば[upon my soul]は「本当に」の意ですが、「神かけて」が原義なのです。「私はいかなることも全身全霊を込めて行ふ。」を英語で言ふと、[I will do anything with all my heart and soul.]となります。超自然的な[occult]では少しトリックがどこかありさうな気がしますが、「神聖な力」=[a divine power]は[soul]「魂」を込めることから生まれると信じたいとは思はれませんか? 明治の歴史をみれば[soul]を込めないならば、乗り越えられず、西洋列強の餌食になってしまつてゐたらうと思はれる深刻な場面が随所にあります。三行目の訳は「その様な全身全霊を込めて」と言ふことでせう。

四行目に進みます。

[May everything be done !]

[May]は祈願文を作ります。[everything be done]は[all be done]=「まとめて全体がなされる」とはニュアンスが違ふことは高校で習はれた通り、「一つ一つが全て成される」の意です。四行目の訳は「一つ一つが全て成されますやうに！」となります。この御製は昇る朝日を見てどのやうな心を持ってほしいかに留まる歌ではありません。二行目の行尾[sun]と四行目の[done]が韻を踏んでゐます。太陽のやうな心を持ってば太陽のやうな[done]「行為」ができますやうにと祈願されてゐるのです。『明治天皇御集 巻下』四百六十三頁には次のやう

な解説があります。「進取発展の気象を持たまほしく思ふと宣へり。一二句、特に東海日出国の意気を洩らさせ給へり。」この御製から、現代の日本に於いて「東海日出国の意気」がどれほど伝はってゐるだらうか、疑問に思ひます。

六月十九日は作家である太宰治の命日「桜桃忌」であります。失意の日本人を代表するかのやうに、敗戦後の昭和二十三年に彼は自殺しました。私の学生時代にあの自殺を評して三島由紀夫が「太宰の自殺なんて、早起きをして一週間もラジオ体操をすれば直る病気だった。」と言ったことが、当時毎朝ラジオ体操をしてゐましたから一層、印象に残ってゐます。教師となって登校拒否の生徒に何人か出会ひました。彼らの大半は早寝早起きの正しい生活を、こじれる前に、するやうになると全治すると思はれます。太宰と同じく、夜型だった三島由紀夫も残念なことに昭和四十五年十一月二十五日に自決してしまひました。輕輕に人を評論できないものでありますが、「日出国の意気」は夜更かしで朝寝坊の人からは生まれ出ないのではないか、健全な思想は「さしのぼる朝日のごとく」早起きの人から生まれるではないかと私は思ひます。

歴史を遡ってみますと、日本人に最初にわが国を「日出国」としての自覚を促したのは聖徳太子でせう。『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』から引用します。

「其の国書に曰く、日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す、恙無きや。(中略)帝之を覽て悦ばず。蛮夷の書無礼なる者あり、復た以て聞くこと勿れ。」

とするされ、有名なる『日出づる国の天子』の国書を送らせ給ひ、独立国家の威厳を大陸に宣明し給ひたる事実をも伝ふるのである。」(二十四頁)中華の国である隋の王は世界に一人しかゐないと思つてゐるのであります。それを承知の上で聖徳太子は「日出づる国の天子」と隋を「日没する処の天子」と二人天子を並べて書いたところを隋の天子が怒つたのです。其の怒りから隋が日本をどのやうに見てゐたかがよくわかります。日本は隋にとって、属国の一つに過ぎないと見下されてゐたのです。聖徳太子は「日出づる国の天子」と「日没する処の天子」とを並べて書いたことで対等の関係を生み出されたのです。

「日出づる国の意気」は聖徳太子の時代に淵源を持つ日本の歴史の底の深さを、上の御製とともにしっかりと受け止めてゐたいものです。御製を拝誦して終はります。

日(明治四十二年)
さしのぼる
朝日のごとく
さはやかに
もたまほしきは
こころなりけり

平成十七年六月十九日(日) 書庫倉にて

「萩の戸の」 [How sweetly sleeps the moonlight soft]

月不扨処 (明治十三年)
 萩の戸の
 露にやどれる
 月かげは
 しづが垣根も
 へだてざるらむ

How sweetly sleeps the moonlight soft
 On mine dew-pearled flowers !
 Yet no less sweetly must it fall
 Upon the humble bowers.

先づ、『明治天皇御集』を読んでみませう。「題は、月は処をえらばずとよむ、萩の戸は清涼殿にある御局の名なるが、その前庭に萩を植ゑられたるより、しか名づけられたるならむといふ。ここは単に禁中の御庭の義に用ゐる給へり、結局わけ隔てをせぬならむの意、一視同仁の大御心をこめさせ給へるなり。」(十二ページ)月の光は貧窮貴賤、分け隔てなく平等に、照らしてゐることに明治天皇はいたく感動されてゐるのです。

一行目から入ります。

[How sweetly sleeps the moonlight soft] [How]は感嘆文を作って「何と」の意です。[sweetly]=agreeably「心地良く」と訳され、次の動詞[sleeps]を修飾してゐる副詞です。ここに[sleeps]を持って来た訳者の学識と詩情には感嘆せざるを得ないところです。[the moonlight]「月の光」が[sleeps]「眠る」よりは「宿を借りて泊まってゐる」と解した方が良いでしょう。[soft]=「静かに、そと」の意です。

明治天皇は「露にやどれる月かげは」と詠んでをられます。「月かげ」は[sunlight]「日光」とは異なります。[shine]「輝る」ではなくて、露に当たって「そと宿ってゐるやうだ」と詠まれたのに相応しい表現は[sleeps]しかないと思者はやさしい御心に触れ得たが故にここに使ったのでせう。

一行目の訳は「月の光は何と心地良くそと宿を借りて泊まってゐるのだらう！」となります。「月のかけ」[the moonlight]はどこに宿を借りて泊まってゐたのでせうか？月に対してあなた方はこのやうなイメージを抱いたことがありますか？それは二行目の [On mine dew-pearled flowers !]に宿ると書いてあります。第3回を参照してほしいところですが、[mine]は[my]のことです。[dew-pearled]は、「露」[dew]と「真珠」[pearl]との合成語で[ed]を付けて形容詞化されてゐます。「真珠のやうな露の」の意であり、[flowers]を修飾してゐます。

二行目の訳は「我が庭の真珠のやうな露の降りた花の上に」であります。

夜露をこんなに心を留めてご覧になってをられるのです。萩は、ご存知の通り秋の七草の一つです。秋になると多数総状に紅紫色又は白色の蝶形の花を咲かせます。明治十三年の秋の夜、清涼殿の御庭にお立ちになられたのは青年明治陛下(御歳二十八)であらせられます。月の光に照らされ小さな萩の花に降りた露をご覧になってゐる。真珠のやうに美しい露には目を凝らし見ると月が映ってゐた。そこに感動の焦点を留め給ひ、下の句ではダイナミックな展開があります。

学生の皆さんで、家を離れて下宿して暮らしてゐる方がをられるでせう。月を眺めて親のことを「お父さん、お母さんは元気だらうか？」と思はれることがあるでせう。親の方は、子として親を思ふ心以上に「今夜は何を食べてゐるだらうか、元気にしてゐるだらうか？」と子供のことを心配しては、思ひ浮かべてをられることでせう。それが親子の情と呼ばれるものです。私たちは身近な関係の人たちには愛情を注ぐことが出来ます。

御製の下の句は「しづが垣根もへだてざるらむ」であります。「しづ」とは身分の低い層の人たちのことです。経済的には恵まれない貧しい生活をしてゐる方たちに単なる同情をしてをられるのではありません。親子の情に比すべき愛情が昼も夜も注ぎ続けられてゐるからこそ、下の句が生まれたのではないでせうか。月の光が、親や兄弟そして恋人に、平等に照らしてゐることを喜ぶことは私たちには出来るでせう。例へば、教師として受け持っている生徒に対してこのやうな思ひを私は、正直言って抱き得てゐません。「全ての子供を我が子として」と言ふスローガンに何とか近づきたいと教壇に立ってゐますが、我が子ほど愛情を注ぎ続けることが出来てゐ

ません。やはり卒業させるまでの時間的愛情になってをります。卒業した生徒に対しては、「去るものは日々に疎し」と言ふ関係をまぬがれ得ません。一生の付き合いが出来る教へ子は残念ですが、指で数えるほどしかゐないのが現実であります。総理大臣や大統領だって、任期中しか国民に責任を負はないのです。最高権力を掌握して居る間の期限付きの有限責任しか負ふことができてはゐないのです。

一方、国家国民に対して終世、無限に責任を負はれ運命を親子のやうに共にしてをられるが故に明治天皇からは「しづが垣根もへだてざるむ」と言った驚くべき表現が生まれて来たのでせう。政治的恩恵から一番遠いところにゐます「しづ」に対してさへも、月に習って、平等な愛情を注がんとされる御歌の調べはわたしたちの胸を強く打ちませんか。

三行目に進みます。[Yet no less sweetly must it fall] 散文的になります。平常語順に戻しますと[Yet it must fall no less sweetly]となります。[Yet]=[in addition]「加へて」、[besides]=[「その上」]の意です。[no less(than)]=[just as …as]=[「ちょうど…だけ」「…に劣らず」]の意です。例へば、[She is no less charming than her sister.]「彼女は姉に劣らず美しい。」のやうに使用します。[must]=[「…らむ」]、「…に違ひない」。[it]は代名詞で一行目の「the moonlight」を受けてゐます。[fall]は一行目の[sleep]と同意です。

三行目の訳は

「加へて月の光は劣らず

(しづの上にも)心地良く降り注ぐに違ひない」と訳せば理解が進むでせうか。

四行目に進みます。

[Upon the humble bowers.]この行では月の光がどこに降り注ぐかが述べられてゐます。[upon]=[on]「…に」、[humble]=[low in rank or condition]「階級または身分の低い」の意です。[bowers]=[a shelter in a garden made of boughs of trees or vines]「木の枝や蔦で作られた小屋」「東屋」=[arbor]のことです。萱葺きの粗末な家のこととせう。四行目の訳は「身分の低い人たちの住む粗末な家にも」となります。

音声面から一行目を見てみませう。[s]音で始まり長母音を含む[sweetly] [sleeps]の重なりは胸に深く響き、[the moonlight]の語尾は[t]音であり、行尾の[soft]へと続き[t]音で余韻を残します。ゆっくり声に出しながら読んで感じ取りませう。

[How sweetly sleeps the moonlight soft]

二行目の行尾の[flowers]と[bowers]は韻を踏んでをります。しづに降り注ぐ月の光には何故[soft]を付けてゐないのかと疑問を持たれる方がをられるでせう。[no less]「…に劣らず」の中に[soft]も入つてゐるのであります。月の光が[soft]に「しづが垣根」に注がれてゐると言ふことは大御心が[soft]に「しづ」に注がれ包んでゐると読み取ることが出来るでせう。

昭憲皇太后の明治十四年の御歌に

一人有慶	天の下	をさむる君が	よろこびは	青人草の	さかえなるらむ
------	-----	--------	-------	------	---------

があります。明治天皇の御后として、天皇陛下の一番の理解者であられた皇太后は、<天皇陛下が「よろこび」給ふことは「青人草」即ち国民が身分の低い人たちに至るまで栄えることであるに違ひありません。>と詠んでをられます。そのよろこびを共にしてこられたのが皇太后であらせられたのです。会社と言ふ組織では課長は部長に相談できるでせう。部長は社長に相談できるでせう。ならば社長は誰に相談したらいいでせう。神に祈り会社の命運をかけての最終決断をせねばならない時があるでせう。

皇太后は天皇にご相談できたでせう。天皇は「青人草」が栄えるために「いかにすべきか」などと皇太后に相談は出来なかつたでせうし、責任がかかつて来ることでありますから、相談はされなかつたでせう。長たるものは上に頼り相談できる人がゐない孤独な存在であるものであることが御製の響きから伝はつて来ます。皇太后は「青人草のさかえなり」とは断定しては詠まれてをられません。天皇の御心を押し量られて「青人草のさかえなるらむ」と詠んでをられるところから、私たちにも、よく思はれるところです。

最後に御製を拝誦して終はります。

「わがこころいたらぬ」[Far may my mind range o'er the land,]

月前言志(明治四十二年)
わがこころ
いたらぬくまの
なくもがな
この夜をてらす
月のごとくに

Far may my mind range o'er the land,
Throughout its length and breadth,
E'en as the moon above me shines
On all the world beneath !

『明治天皇御集』には「月の光の隈なくゆきわたれる如くに、いかなる處にも大御心の到らぬかた無かれかしと詠ませ給へるなり。」(四百五十六頁)と解説してあります。参考にしませう。

一行目から入ります。[Far may my mind range o'er the land,]これは祈願文となつてゐます。文頭には強調のため副詞の[Far]=「遠くへ」が置いてあります。[my mind]は御製の「わがこころ」に当ります。[range]=[to roam over or through]「果てから果てまで方々を跋涉する」の意です。例へば、「彼の心は自由に過去をさまよつた。」は[His mind ranged freely in the past.]として使はれます。この名詞は[ranger]であり、米国では「山林監視人(レインジャー)」英国では「御料林監守」のことを表はします。ただ「さまよふ」の意ではなくて夜昼緊張を伴ふ「監守」のイメージの方が強いと思はれます。[o'er the land]は[over the land]のことで、「国中を」の意です。併せて、二行目に進みます。[Throughout its length and breadth,]は[o'er the land]で言ひ尽くせない思ひを表現を変へて重ねるやうに言つてゐるのです。散文では[throughout the length and breadth of the land]が「全国津々浦々まで」の意で使はれることがあります。一行目の末尾に[the land]が置いてありますから、二行目ではその[land]を受けて[its length and breadth]と[the]が[its]にきちんと文法の法則を踏んで変へられてゐるのです。[length]は南北の「長さ」を表はしてをります。「螢の光」の四番の歌詞が思ひ浮かびます。「千島のおくも、沖縄も、やしまのうちの、まもりなり。いたらんくんに、勲しく。つとめよわがせ、つつがなく。」一緒に歌ってみませんか。[breadth]は東西の幅を表はしてをり、同じく三番の「つくしの極み、みちの奥、うみやまとおく、へだつとも、そのまごころは、へだてなく、ひとつにつくせ、くのために。」と言ふ歌詞が口遊みたくなる所であり、ここも一緒に歌ってみませう。一、二行目の訳は「わたしのこころがはるか遠く 国中、津々浦々まで及びますやうにと祈る」となります。

三行目に進みます。[E'en as the moon above me shines] [E'en]は古語であります。=[precisely]であり「丁度」の意です。[e'en as]は「丁度…のやうに」の意味を持ち、副詞節の様態の文を作ります。主部は[the moon above me]であり「頭上の月」の意です。受ける動詞は[shines]であり「照らす」の意です。三行目の訳は「まさしく、頭上の月が照らすやうに」となります。

四行目に進みます。[On all the world beneath!] 月がどこを照らすかがここに述べてあります。[On all the world]だけでは「世界中を」の意となります。では何故その後ろに[beneath]を付けねばならないと訳者は考へたのでせうか？一つは音声面から二行目の行尾の[breadth]と韻を踏んでゐることが考へられます。[on (弱)all(強)the(弱)world(強)be(弱)neath(強)!]との響きの差は雲泥の差——詩に魂が入るか入らぬか——程の違いが生まれて来ます。

今一つは、御製は「この世をてらす」ではなくて「この夜をてらす」となつてゐることでもあります。今夜の月は地球の裏側まで照らしては、勿論ゐないのでから[On all the world]「全世界を」であるならば誇張した表現になりますし不正確な英訳と言はねばなりません。ならば[beneath]とはどのやうな意味があるのでせうか。『SAITO'S LECTURES ON PREPOSITIONS and VERBS』『前置詞及び動詞の講義』(萬里閣書房)(昭和五年発行)の五百三十六ページに「接触せる下は[beneath]。例 1. The earth beneath our feet (地は足の下) 2. The

plank beneath me(my feet) is creaking.(乗ってある足場の板がギーギー鳴る)」と説明がしてあります。月の出てある[above me]「私の上の方」と、照らされてある[beneath](=「下の方」の意)が対照をなしてをり、見事に詩的に表現されてあるところです。[above me]と対照してある[beneath]でありますから、[beneath]の後ろには[me]は当然隠されてあると考へて良いでせう。拗って、[all the world]=「全世界」は[beneath]で限定されてありますから、「日本全国」の意味に解釈すべきだと私は考へます。

四行目の訳は「私の治める日本全土を！」となります。あなたのご意見を聞かせて下さい。

「国会開設に対する日露の相違に付いて」

『最後のロシア大公女マーリヤ革命下のロマノフ王家』(中央公論社)の第一部は 専制君主制に付いてであります。その七十五頁には国会の開設に対する国王の態度について述べられてあります。長くなりますが引用しませう。

「国会(デューマ)を設けることで、皇帝は自らの権力に制約を付したかのように見えたが、事実上はその特権の大部分を完全な形で留保していた。それにもかかわらず、皇帝とその顧問官達はこうして固守した特権をうまく行使する力に欠けていた。権力こそ手中に収めていたが、その活用法に無知だったのである。皇帝は、進歩主義的な傾向のある未熟な国会の成立に、気のない仏頂面を向けた。国会の成立そのものが、自分から強奪された諸権利の象徴的な存在として脳裏に焼きついて離れないらしく、国会の存在を認めることを明らかに拒否した。」専制君主とは国民の声を聞かずに独断で思ひのままに事を決する君主のことを指すと言はれますが、「国会の成立に仏頂面を向けた。」だけでなく「国会の存在を認めることを明らかに拒否した。」と大公女マーリヤは述べてをります。更に次のやうに言及してあります。

「皇帝にそれなりの包容力があれば、国民の代表たちの血気をなだめたうえで政治的責任に喚起をうながし、伝統への尊敬を生起することも可能だったろうが、その嫌悪感丸出しの態度は、国会や国民の気分をむしゃくしゃさせる結果を招くだけだった。」ロシア革命で崩壊しましたロマノフ王家のニコライ二世の従妹マーリヤは上記の如く冷静に皇帝を批判してをります。亡命先のニューヨークで彼女はこの自伝を書きました。[It is no use crying over spilt milk.]=「覆水盆に帰らず。」でありまして、「皇帝にそれなりの包容力があれば」といくら嘆いてもロマノフ王家の再建は、革命後であり、不可能なことなのでありますから同情を誘ふところでもあります。

国会開設に不満の意を示したニコライ二世に対するに、我が日本では、明治天皇は五箇条の御誓文で既に明治元年に「一 広く会議を興し、萬機公論に決すべし。」と国会の開設を天地神明にお誓ひになられてゐたのです。前回の「月不扨処」は明治十三年の御作品でありましたが、まだ光が当たってゐない「しづ」たちにも平等大悲の施策を願ってをられることが伺はれるところです。明治十三年二月二十七日に「各地方長官に下し給へる勅語」を読みますと西南戦争後の民情の的確な分析と各地方長官への具体的施策を生み出すべく方針が大きく三点に渡って書いてあります。

- ①土の恒産を得ざる者、爾等之を勸導し、以って其業に就かしめよ。
- ②農商の未だ教学に沾(うるほ)はざる者、爾等之を薰陶し、以って其知識を長ぜしめよ。
- ③人民の政論に熱心し、大局を解せずして、或ひは躁進過激に渉る者、爾等之を訓告戒飭(ちよく)し、方向を誤らしむること勿れ。

侍たちは学問はあるが定職がないので産業の振興を、資産はあるけれども農業商業に携はるものは教養知識に乏しいからと、学問を奨励されてあります。急に高い地位に上がらうとあせったり大局を解しないで過激に走る者達には、誠めを与へ、飭(ただ)しく進ませる指導を各地方長官たちに求めてをられます。このやうにして明治時代には国民各層に光が当てられてゐたとその一端が窺はれるのではないでせうか。ニコライ二世ならば「過激」な連中達に対してはマーリヤ大公女が言ったやうに「それなりの包容力がない」から「厳罰に処す」と言ふこととなって、国民の反感は増幅されアジテーターたちの思ふ壺となつてしまひ、ロシア革命となつたのが世界史的事実であります。比較するに日本の幸福を身に沁みて感ずる次第であります。

最後に日英の御製を拝誦して終はりにしませう。

《参考図書》

◎『明治神宮叢書』第七巻 御集編 (1)

『SAITO'S LECTURES ON PREPOSITIONS and VERBS』『前置詞及び動詞の講義』(萬里閣書房)(昭和五年発行)

『最後のロシア大公女マーリヤ——革命下のロマノフ王家——』(中央公論社)(昭和五十九年発行)

『螢の光』明治14年文部省唱歌(作者未詳ですが、御製の「月不扨処」明治13年の翌年に出来てゐることは注目しに値します。)平成十七年七月十六日(土)日章工業宮田工場に於て、発表。

「わがこころおよばぬ国の」[The utmost confines]

神祇（明治三十六年）

わがこころ
およばぬ国の
はてまでも
よるひる神は
まもりますらむ

The utmost confines of my realm
That scape my vigilance
The gods watch over night and day
To guard against mischance.

『明治天皇御集 巻上』を先づ読んで見ます。「貴き御信念のほど伺はれて、まことに意味ふかく拝せらるる御製」（一五五頁）と簡明に解説がしてあります。上の御製を味識する方向性は「貴き御信念のほどを伺ふ」と言ふことであり、それが「まことに意味ふかく拝せられる」やうに読み進むことが肝要でせう。

一行目から入ります。

[The utmost confines of my realm] [utmost]=situated at the farther point : extreme「最も遠い地点に位置してゐる《いちばん端の》」の意です。[confines]これは複数形で=[borders]「国境」の意です。[realm]は何度も出て来ました通り=[kingdom]「王国」の意です。一行目の訳を取りますと「わが国の最果ての国境を」となります。

二行目に進みます。

[That scape my vigilance] [That]は関係代名詞であり、先行詞は一行目の[The utmost confines]であります。[scape]=《古・詩》[escape]「遁れる」の意です。[vigilance]=[watchfulness]「警戒」の意です。二行目の訳は「私の警戒の及ばぬ」となります。ここは形容詞節として一行目の「わが国の最果ての国境」を修飾してをります。

三行目に進みます [The gods watch over night and day] [watch over]=[superintend]「～を監督する」の意です。例えば、「彼らは歩行者の安全を監督する」を英語に直すと、[They watch over the safety of walkers.]となります。[night and day]は「夜も昼も」[continually]「絶えず」の意であります。三行目の訳は「神は夜も昼も絶えず見守り給ふ」となります。

この文章の主語は[The gods]「神」であり、それを受ける動詞が[watch over]となつてゐます。ならば動詞の目的語はどこにあるのでせうか？隠された目的語としては[me]でせう。文の構成上では異例ですが、[main]としては、一行目と二行目の全部と言ふことになってをります。神の目はどこまで行き届いてゐるか？それは「わがこころおよばぬ国のはてまでも」と御製に言はれてをります。「国のはてまでも」「わがこころがおよびますやうにと一心にお祈りをなされてをられます。お祈りを為されても心の及ばぬ最果ての国境（さかひ）がどうしてもあるのでせう。私たちは無私にしてひたむきな祈りの御声が御製から聞こえて来るまで、じっと耳を澄ませて待つ必要があるやうです。さうすれば、私達の目には神々の前に、深く頭（かうべ）を垂れてをられる明治天皇のお姿が見えても来るのではないでせうか。

山上憶良の長歌に「瓜食（は）めば子ども思ほゆ栗食めばまして偲（しぬ）ばゆ何処（いづく）より来たりしものそ眼交（まなか）ひにもとなかかりて安寝（やすい）しなさぬ」（万葉集 5・802）に添へられた短歌に「銀（しろがね）も金（くがね）も玉も何せむに優（まさ）れる宝子（たからこ）にしかめやも」（万葉集・5・803）があります。山上憶良は奈良前期の人で、遣唐使や東宮侍講などを経て、筑前の守になったと伝えられてゐます。嘉穂郡稲築町の公園には彼の短歌の歌碑が神さびて立ってゐます。「瓜食めば子ども思ほゆ」熱い夏の頃のことでせう、よく冷やされた瓜を単身赴任であつたので一人で食べてゐるとこんなにおいしい食べ物は一で食べるには勿体無い、子どもにも食べさせてあげたい。また秋のことでせうか。栗を食べてゐるとしきりに子どものことが思ひだ

されて「安眠し寝さぬ」心がほっと休まり眠りに就くことができない、と家族愛を詠んでゐます。ならば家族に手紙を書くやうに上の一連の長歌と反歌を創作したのでせうか？私は、最初聞いたときは単身赴任の寂しさを紛らすために詠んだに違ひない、と思つてゐました。しかし御製を詠み重ねるうちにそれだけではない奥深さを感じるやうになりました。

猪城博之著『比較哲学』（華琳社）に次の個所があります。「晩年のカール・バルトは好んで『ワレ思ふ、故ニワレアリ(cogito ergo sum)ではなく、ワレ信ズ、故ニワレアリ(crego erugo sum)でなければならない』と語つたと伝えられているが、(邦訳「創造論」/1、四一八頁)この場合の「ワレ信ズ」は単なる一様態ではなくて、信仰の対象が生きて働き給う、その働きの中に言わば巻き込まれていくことを意味する。」(iii)「信仰の対象が生きて働き給う」に注目して戴きたいと思ひます。子供のことが思はれて眠れなかつた山上憶良の反歌「銀(しろがね)も金(くがね)も玉も何せむに優れる宝子にしかめやも」を詠むときに「信仰の対象が生きて働き給う」が故に——つまり、神に対するに、己を空しくした自己との関係の中から——この反歌が創作されたと思はれて来るのです。カール・バルトはキリスト教徒であるから異教の神で在り引用として不向きであると言はれるかもしれませんが。しかし、興味深いことに、猪城博之氏は「その学びの跡を、国学と儒学、キリスト教と西洋近代哲学という四つの分野に分けてまとめてみると、私においては国学とキリスト教とが重なり、儒学と西洋近代哲学とが響き合うような形で、その学びがなされて来たと言つてよい。」(i)と言はれます。さらに別の所で「それなら、儒学とギリシャ的有神論が、我々の知と行とが「直しい理」(オルトス・ロゴス)に当たるかどうかをどこまでも問うていく

「主知主義」と言つてよいなら、国学とキリスト教とは、神と人、人と人との間に通う「有難い」「忝い」「なつかしい」「嬉しい」等々の情緒を尊ぶ「主情主義」と言つてよいのではなからうか。」(iii)と言はれてゐます。キリスト教徒である猪城氏は、国学とキリスト教に共通する点を「主情主義」と言つてゐます。主義(イズム)として概括できるかどうか問題が残りますが、私には参考にすべき道しるべであります。「信仰の対象」はキリスト者にとってはGodでありませう。日本人にとっては神々godsであります。短歌を創作するときに自己の内面に「生きて働き給う」のは神々godsであることには間違ひはないと思はれます。皆様は如何思はれますか？

四行目に進みます。

[To guard against mischance.] [To guard]は不定詞の目的用法で「・・・から守るために」の意です。ここでは[guard]は自動詞ですから[guard against]=「(用心して)避ける」に取りませう。[mischance]=bad luck「不運」の意です。四行目の訳は「用心して不運を避けるために」となります。私が大学の時の法学の教授は「明治天皇は物心が付いてから死ぬまで、自分を神だと思つてゐた。昭和天皇は昭和二十年まで自分を神と思つてゐたが、戦後は『人間宣言』をして人間となった。」と講義の中でよく言つてゐました。マルキスト学者としては当然の発言かもしれませんが、御製を一首でも読んで、明治天皇の内面を見つめるならば、とんでもない誤解だと分かるでせう。[The gods watch over night and day to guard against mischance.] 明治天皇ご自身が神ならば、「神様は、国に不運なことが起こりませんやうに、昼だけでなく私たちが眠つてゐる夜も、守つて下さつてゐる。」と言ふやうな神への祈りのこめられた敬虔なる詩歌は決して生まれては来ないでせう。

「皇居の再建と頤和園再興の対比」

出雲井晶著『春の皇后』——小説・明治天皇と昭憲様——(サンケイ出版)には皇居が炎上して仮御殿にお住まいになられてゐたときの件が次の様に書いてあります。

「明治六年五月の皇城焼失このかた、一日も早(はよ)と新御殿ご造営ねごて、国民はぞくぞくと献金申し出ましたが、聖上はどこまでも国のこと民の幸せが先でおわしました。徳大寺宮内卿は、太政大臣に何度も、「朝な夕なお仕え申し目(ま)のあたり拜しまするに、どうぞしますと臣下よりはるかお粗末な所(とこ)で万国と対峙、万民に君臨し給(たま)てあらせられます。世界の貴族らの参内も頻度加えますに、その饗宴の席すまなまならませいで国は対面にも適(そく)いませぬ。」と建言してございました。開化の風潮は建築にも及び、ヨーロッパ各国の技師入り乱れ、日本の土地に、ルネッサンス式、ビザンチン式、コロニアルスタイルとやら妍(けん)競(きそ)て、どこの国に入りこんだやらと戸惑うよな建物が、官第(かんだい)私第(しだい)に日ごと出現してゐるでございするもの。」焼失してすぐには、宮殿の再建をおゆるしにならなかつたのです。仮御所で執務や外国の要人の接見等をなさつてをられました。

「聖上は焼失十年の後に新御殿の見積もりお許しあそばしました。政府が和洋折衷の豪華な設計書出しましたは聴しあそばさず、費用は申し出た三分の一、宮内省のみ煉瓦造りで、他は日本建築とし、万事、質素に心がけ造営するよにと仰せられましてございする。」(二八八頁)明治天皇は議会で決まつたことには「妄りに干渉することはなさらなかつた」のでありますが、こと新宮殿の造営に関しては「申し出た三分の一に」縮められ「万事、

質素に心がけ造営する」やうにと仰せられたと言はれてをります。このことは当時の中国・清の歴史との比較して見ると、日本が別の角度から見えて来るでせう。『図説中国の歴史 8 清帝国の盛衰』(講談社)には「頤和園と西太后」の項があります。「北京の西北郊の頤和園は今日観光地としてとくに名高い。ここはもと清廷の離宮で初め清瀆園といわれたが、隣接する円明園とともに一八六〇年イギリス・フランス連合軍に焼き払われた。西太后は一八八八年から、海軍建設の予算を削って造営費にあてるなど巨費を投じて離宮を再興し、新たに頤和園と名付け、好んでここに住んだ。」(一四〇頁)西太后は「海軍の予算を削って造営費にあてるなど巨費を投じた」とありますが、『春の皇后』には「同じ頃、隣の清朝では西太后の六十歳の盛んな祝典を挙げますために頤和園建設にかかり、不足の三千万元余りを海軍軍艦購入から調達し、軍艦が買えませなんだやら。お蔭で日本は清国が購入する筈でございました軍艦を買う事が出来、日清戦争の勝因の一つになりましたとやら、お人の話に聞いたこともございます。」(二百八十八～二百八十九頁)清朝では西太后の私事の為に、公的な目的である軍艦の購入が不可能になってしまった、と言ふのです。一方、日本ではどのやうな対処がなされたのか見てみませう。海軍軍艦の購入に対して、三一二頁に「第四議会で軍艦製造費をめぐり政府、野党が激突し、議会は政府糾弾上奏案可決しましたは、清との雲行きが日ましに急を告げます折も折にございます。」その上奏案を受けられた「聖上は、“和衷協同の勅諭”を下し賜(たも)て、更に今後六年にわたり宮廷費を毎年三十万円ずつ約(つづ)め、製艦費の補いにと仰せられたんでございます。」と書いてあります。当時の清はアジアの最大の大国でありました。しかし、西太后は私の祝賀のために頤和園建設に取りかかり、不足の三千万元余りを海軍軍艦購入から調達し、軍艦が買へなくなったと言ひます。一方、明治維新から開国して三十年も経たない弱小国である日本は上は天皇から庶民に至るまで、質素倹約を励行してゐました。迫ってくる国難(mischance)を最小限にして避けるために、上下相和し、心を一つにしてゐたことがここに伺ふことができるのであります。

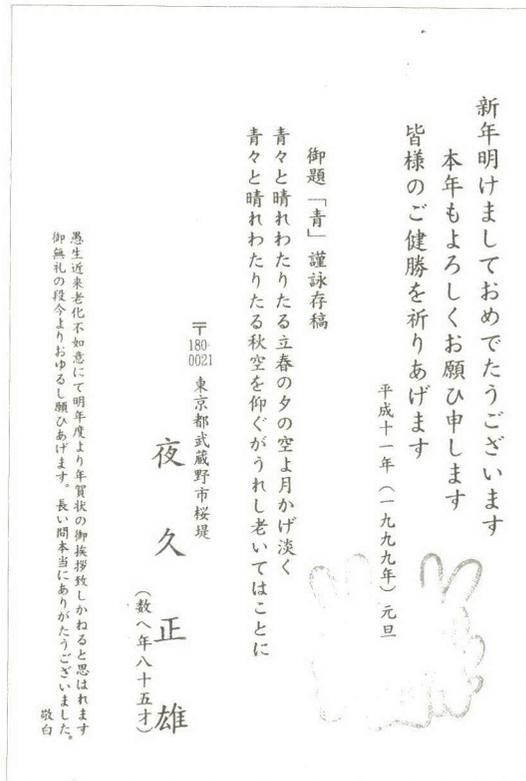
最後に御製と英訳詩を一緒に詠んで終はりにしませう。

〈参考文献〉

『図説中国の歴史 8 清帝国の盛衰』(講談社)

出雲井晶著『春の皇后』——小説・明治天皇と昭憲様——(サンケイ出版)

猪城博之著『比較哲学』(華琳社)



●学恩深き師からの賀状

「山のおく島のはてまで」[Among the mountains I will seek]

述懐（明治三十七年）
山のおく
島のはてまで
尋ねみむ
世にしられざる
人もありやと

Among the mountains I will seek,
And in remotest isles,
For men of worth unknown to fame,
On whom no fortune smiles.

『明治天皇御集』巻中を先づ引用します。「賢良をあまねく山野の間に求めむとの御心にて、これやがて明治新政の大精神なり。」(二百十六ページ)「これやがて」とは「これすなはち」の意です。これは、明治三十七年の御製であります。この御製に込められた「御心」は即ち「明治新政の大精神なり」と解説をされてゐます。

慶応三年十二月九日に「王政復古の大号令」が出されました。その中には次のやうに言はれた箇所があります。「王政復古、国威挽回の御基(おんもとゐ)、立させられ候間、自今摂関・幕府等廃絶、即今先づ仮に総裁・議定・参与の三職を置かれ、萬機を行はせらるべく、諸事神武創業の始(はじめ)に原(もとづ)き、縉紳・武弁・堂上・地下の別無く、至當の公議を竭(つく)し、天下と休戚を同く遊ばさるべき觀念に付、各(おのおの)勉勵、旧来驕惰の汚習を洗ひ、尽忠報国の誠を以て、奉公致すべく候事。」摂政関白や幕府の旧来の身分制度を廃絶して、国全体から、広く適材適所に人材を求め、登用する。その上に「王政復古、国威挽回の御基」を立てる。「明治新政の大精神」とはここに言はれてゐるのでせう。明治天皇の御製の解説者にとってはすぐに上のこの件が頭に浮かんで来てゐたのではないでせうか。時代の隔絶はあつてはならないことなのですが、私達は時代精神といふべきものは原典に当たって味はひ、感動して心に受けとめることを抜きに論じてはならないと思ふものです。

秋の味覚に柿があります。ちょっと齧つて渋いと捨ててしまへば勿体無い事で、皮をむいて干して冬まで待てば美味しい干柿になります。栗について言ふならば、ぐるりに刺があるからといって、見向きもしないならば、猿や狸に劣ることになります。刺を外し中味を取り出す苦勞を厭ふと、秋の味覚を味はふことはできません。また、いくら説明されても、口に入れ味はつてみないと好き嫌いを言ふ資格が生まれません。同じやうに面倒でも時間をかけて、原典を味はつてみるのが祖先に対する[manners]「礼儀作法」であり、学問をする上で発言する際に、守るべき[etiquette]「礼儀」であると私は思ひます。「明治維新は不完全な革命であつた。」などと訳知り顔で発言する人は、学者として[manner up]してもものを言つてほしいと私は思ひます。皆様は「明治新政の大精神」に対して如何なる見解をお持ちですか？

明治元年の三月十四日には「明治維新の宸翰」が出されました。全体を是非読んで戴きたいと思ふ文章です。ここに全文を引用できませんので、一部のみ引用します。「今般朝政一新の時に膺(あた)り、天下億兆、一人も其(その)處(ところ)を得ざる時は、皆朕が罪なれば、今日の事、朕、自(みずから)身骨を勞し、心志を苦しめ、艱難の先に立(たち)、古(いにしへ)列祖の尽くさせ給ひし蹤(あと)を履み、治績を勤めてこそ、始て天職を奉じて億兆の君たる所に背かざるべし」と言つてをられるところに私の心は留まります。「億兆」とは「天下萬民」のことです。何故明治天皇は「身骨を勞し」給ふのでせうか？ どうして「心志を苦しめ」ねばならなかつたのでせうか？ 明治天皇ご自身で国家が抱へる「艱難の先に立ち」給ふのは何故であつたのでありませうか？ 「朝政一新の時に膺り」ご自身に厳しい条件を課してをられたことがここから伺はれます。「天下億兆、一人も其(その)處(ところ)を得ざる時は、皆朕が罪なれば」とあります。尋常ならざるご覚悟であるとは思はれませんか？ 日本国の国民の中にただ一人でも落ちて生活をする處を得ることが出来ないのは天皇である私自身の罪である。「この世に一人でも救はれないものがある限り私自身が救はれない。」と言つた観世音菩薩に比すべき決定(けちぜう)ではありませんか。簡単に徳川幕府が倒されて明治維新となつたと体制面からのみ見て歴史書では説明されてゐます。それで分かつた気分であるのが一般でせう。この文章を読んで、私は明治維新の本質を知つてゐなかつたなあと、恥づかしい気持ちになります。

一行目から入ります。[Among the mountains I will seek,]

[Among the mountains] 「山々の間に」、[I will seek]=[I will try to find]=[私は見つけようとする]の意です。一行目の訳は「山々の間に、私は見つけようとする」となります。

二行目に進みます。[And in remotest isles,] [remotest]=located out of the way:secluded「道路から離れたところにある:辺鄙な」の意。例へば(a remote valley)〈人里離れた谷〉と使われます。[remotest]は[remote]の最上級で「最も離れた、最果ての」の意です。[isles]=[islands]であり、『The Oxford English Dictionary』には「Now more usually applied to an island of smaller size」[現代では一層小さな島にあてはまるのがより一般的である]と解説がしてあります。二行目の訳は「加へて、最果ての島々に」となります。

三行目に進みます。[For men of worth unknown to fame,] [For]は[I will seek]に続く前置詞で「…を探し求めて」の意です。[of worth]=[worthy]「価値ある」の意で、[men]を修飾してゐます。[unknown to fame]も形容詞句として[men]を修飾してゐます。平易に書き換へますと[men who are not famous]であり、「名声を得てゐない人々」の意です。三行目の訳を取れば「価値あれど、世に埋もれてゐる人々を探し求め」となります。四行目に進みます。[On whom no fortune smiles.] [whom]は関係代名詞で先行詞は[men]であります。[fortune]=good luck, success, prosperity「幸運、成功、繁栄」の意です。散文的になりますが、この行を書き換へて見ませう。[Good luck doesn't smile on them.]訳を取れば「幸運は彼らに微笑みかけてゐない。」となります。「明治維新の宸翰」と重ね合はせて考へて見ますならば、「幸運の女神」が微笑みかけてゐないで「世にしられざる人」がもしも、一人でもゐるとするならば「皆朕が罪なり」と心の底から思はれてゐる。これは理解しがたいほどの国家と国民への責任感が顕現されてゐるのではありませんか。天子の自筆の文書を「宸翰」と言ひます。明治元年に出されました「明治維新の宸翰」に込められた精神が明治三十七年のこの御製に到るも脈々と息づいてゐます。私は尊敬心を抱くと云ふより、畏敬の念を抱かざるを得ません。

音声面から言へば、二行目の末語[isles]「アイルズ」と四行目の末語[smiles]「スマイルズ」は韻を踏んでをります。四行目は弱強三シラブル[iambic trimeter]の韻律であります。

「仁についての考察」

アメリカの文化人類学者ルース・ベネディクトは千九百四十四年(昭和十九年)六月、軍当局より、日本研究の仕事の委嘱を受け日本国民の性情、その思想・感情の習慣を的確に捉へた『菊と刀』を上梓しました。その第六章「万分の一の恩返し」のところを読んで見ませう。「この二種類の『義務』はともに無条件的である。(註。両親に対する恩返し孝と、天皇に対する恩返し、すなわち、忠と、ある)かやうに日本は、これらの徳を絶対的なものとすることによって、中国の、国家に対する義務と、孝行との概念から離れてしまった。七世紀以来くり返し、日本に中国の倫理説がとり入れられてきた。ところが、中国人はこれらの徳を無条件的なものとはしなかった。中国は、忠孝の条件であり、忠孝の上に立つ一つの徳を要請する。この徳(ジェヌ<仁>)は通常 'benevolence'(慈善、博愛)と訳される。)(4 1 5 頁・・・4 1 6 頁)中国四千年の歴史などとよく言はれますが、王朝が新たに興り、やがて新たな新興勢力によって争鬪の末、滅ぼされる。そのくり返しは中国の歴史の特性であります。その理由をベネディクトは「親は仁をもたねばならない。支配者が仁をもたなければ、人民はその支配者に対して謀反を起こしてさしつかえない。」と言ってをります。日本に対しては「この中国人の倫理上の要請は、ついぞ日本では受け入れられなかった。」と喝破してをります。「忠と孝との二種類の義務を無条件的にした」と言ふ「七世紀以来」の日本民族の叡智を日本の占領政策の中で木っ端微塵に叩き潰すのが占領意志であったことを思へば、それは半(なか)ば達成されたと言っても過言ではないでせう。現代は、価値観の多様化した時代であるとよく耳にしますが、神武天皇に始まる日本民族の一筋縦糸の価値を見失つては祖先に対して申し訳のないことであると私は思ひます。鎌倉幕府の時代も、室町幕府の時代も、江戸幕府が征夷大將軍として、武力で国内を君臨してゐた時代も歴代の天皇方は、変はることなく国を統治してこられたのです。明治、大正、昭和と続きまして平成の御代、今上陛下が、憲法の第一条に明記してある通り日本国の統合の象徴として万古不易、統べ治めてをられます。皆さんは神武天皇から数へて今上陛下は何代目になられるかご存知ですか？昭和天皇が壱百貳拾四代ですから、今上陛下は壱百貳拾五代目に当たられます。明治生まれの父も大正生まれの母も、神武天皇から今上陛下まで、今もすらすらと誦(そら)んじて見せることが出来ます。万世一系の皇統に対する思ひ入れは私達、戦後生まれとは数段の違いがあります。

私達は毎週、『孟子』(岩波文庫)と『講孟筭記』(講談社学術文庫)を読んでゐますが、「孟子」下巻の十三に「仁政」について書いてあるところがあります。「二老は天下の大老なり、而して之に帰す。是れ天下の父之に帰するなり。天下の父之に帰せば、其の子いづくにか往かん。諸侯にして文王の政を行ふ者あらば、七年の内、必ず政を天下に為さん。」(訳)「天下の父が周に附いた以上、その子供とも言ふべき天下の人民は文王を措いていったい他

のどこへ行かうぞ。それ故今の諸侯にも、もし仁政を行ふ者があつたら、七年もたため間に、王者となつて必ず政を天下に行ふことが出来るであらう。」(三五頁)「文王」のところを例へば、平清盛に置き換へたり、織田信長に置き換へたりしてみると「孟子」の説をそのまま日本に当てはめるならば「もし仁政を行ふ者」であるなら、平清盛がまた、織田信長が「七年も経たぬ間に」「天皇」になつても構はないと言ふことになつてゐたのではないでせうか。「日本ではそれは許されないことである」と七世紀以来今日に到るまで、ずっと守られてきたのが、一系の天皇の下での、天下統一でありました。

再度『菊と刀』を引用します。「偉大な日本人学者 朝河貫一は、中世におけるこの両国の相違に論及して、つぎのように言っている。『日本ではこれらの思想は明らかに天皇制と相容れぬものであつた。したがつて、学説としてさえも、そっくりそのまま受け入れられたことは一度もなかつた』事実日本では「ジェヌ」は、倫理体系の外に追放された徳となり、中国の倫理体系のなかで有していた高い地位から貶(おと)されてしまった。」(416頁)私にはこれはよく理解できます。自分の親を他の親と比べて「仁」がないからと言って換へることが出来ないのと同様に、天皇を換へるなんて、日本では誰でもとんでもないことだと口には出さないが思つてゐるでせう。ところが、時の為政者を換へる事は、天皇と言ふ安定装置があるが故に、「仁」を基準尺度にして他国より、比較的容易にできるのが日本の国柄であると私は確信してをります。皆様は如何思はれますか？

最後に日英の御製の拝誦を致しませう。

〈参考文献〉

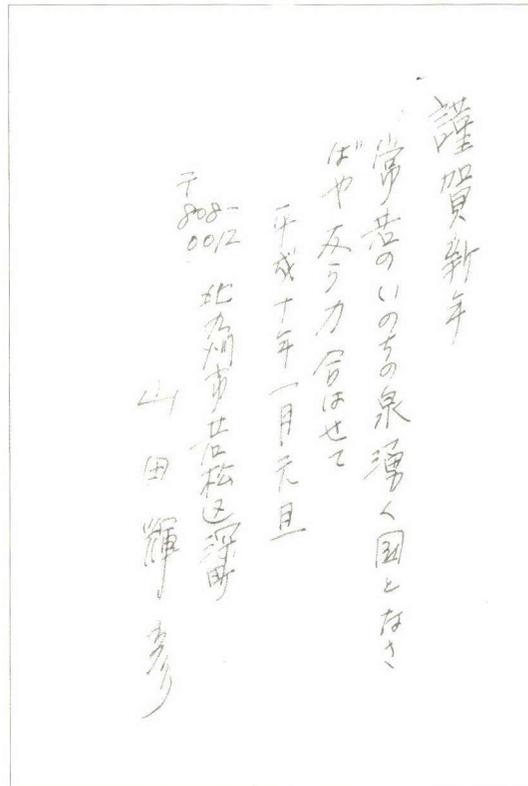
『明治天皇御集』巻中

「王政復古の大号令」 「明治維新の宸翰」

『菊と刀』

『孟子』(岩波文庫) 『講孟筭記』(講談社学術文庫)

『The Oxford English Dictionary』



●学恩深き師からの賀状

「いぶせしと思ふなかにも」[If 'mong the rank and wilding]

草 (明治三十七年)

いぶせしと
思ふなかにも
えらびなば
くすりとならむ
草もあるべし

If 'mong the rank and wilding growth
I choose with heedful mind,
Who knows but I may chance upon
Some salve to bless mankind ?

『明治天皇御集』巻中 を先づ引用して理解して行きたいと思ひます。「いぶせしは、むさくるしく煩らはしといふほどの義。野草のいぶせく生ひ茂れる中にも、よく撰び出さば、薬草もあるべしの意。物ごとなほざりに看過すべからざることを諭させ給へるなり。」(二百一頁)御製の「いぶせしと思ふなかにも」は「野草のいぶせく生ひ茂る中にも」と解釈されてゐます。それは丁度一行目の副詞句で場所を表はす['mong the rank and wilding growth]にあたります。['mong]=[among]「(幾多)有る中に」、[rank]=[strong and vigorous and usually coarse in growth]「力強く盛んに、通常粗雑に成長する」例へば「庭に雑草が蔓延(はびこ)つてゐる」は[Weeds are rank in the yard.]と表現されます。[Weeds]=「雑草」は「引き抜いて捨てる。」邪魔者だから、今ならば、除草の農薬を散布して枯らしてしまへ。と言った発想が一般的でせう。「いぶせし」と思ふ刹那的感情は、誰にでも起る感情です。そこに囚はれてしまへば、「薬草学」は発展しなかつたでせう。

皇后陛下と薬草

皆さんはゼラニウムと云ふ花をご存知でせう。それではゼラニウムの和名をご存知ですか？加へて、薬草として、何に効能があるかご存知ですか？皇后陛下は戦時中、疎開先で、夏休みの宿題として[wild geranium]を干して薬草にするために4キログラム集めたと書いてをられるところがあります。[BUILDING BRIDGES]の六頁を読んで見ませう。

[However, I, who had been rather delicate up till then, grew strong and healthy from living in the country.] (度重なる移居と転校は子供には負担であり、異なる風土、習慣、方言の中での生活には戸惑ひを覚えることも少なくありませんでした)「しかしながら、田舎での生活は、時に病気がちだった私をすっかり健康にした。」と疎開と言ふ逆境に前向きに適応され、結果として[grew strong and healthy]「たくましく健康になった」と回顧され、次に具体的にどんなことを成されたかが紹介されてゐます。

[I did such things as raising silkworms and cutting grass for fertilizer, and incidentally I even rose to the challenge of fulfilling the school assignment, which involved bringing in four kilograms each of leaves of wild geranium and meadow rue, gathered and well dried for herbal use.]「私は蚕を飼ったり、肥料用に草刈をしたり、時にはゲンノショウコとカラマツ草を、それぞれ干して四キロずつ供出するといふ、宿題のノルマにも挑戦しました。[wild geranium]は「験の証拠」のことで茎葉は下痢止め、健胃に有効な薬草であります。[meadow-rue]は「カラマツ草」のことでありまして、夏に白い花が咲き、高さは一メートル程になり(？ご存知の方は教へて下さい)の薬効があるさうです。[To carry eight kilograms of dried plants by hand was too much for me.]「干草八キログラムを手で運ぶには小学生の私には多すぎました。」如何して学校まで運ばれたと思はれますか？[Mother tied the bundles on my back and then I carried them all the way to school.]皇后様の母上がその束を背に負はせて下さり、[all the way to school]「はるばる学校まで」現在ならば乗り物で行く距離だと想像されます、それらを背負はれ学校まで歩いて運んで行かれた。まだ背の小さな小学生が八キログラムの干草を背負ってゐる姿を後ろから見れば、子供の姿は見えないほど、それこそ[too much]であつたらうと拝され私の胸はあつくなります。

[wilding]=[not cultivated]「耕されてゐない」、[growth]は[grow]「作物が成長する」の名詞形で一本の「草木」から多量の「茂み」などの意となります。例へば、「森林中の下生へ」を[undergrowth]と言ひます。

一行目の訳は「繁茂する野草の茂みの中に、もしも」となります。

二行目に進みます。一、二行目は、[If]で始まる条件節になってをります。

[If I choose with heedful mind,]

[heedful]=[careful]「注意深い」、[with heedful mind]は「注意深く心を働かせて」。二行目の訳をとれば「注意深く心を働かせて選ぶならば」となります。

ここで「撰ぶ」と言ふ表現について、少し考へて見たいと思ひます。「撰ぶ」には[choose]だけでなく[select],[pick],[elect],[prefer]などがあります。『New SHOGAKUKAN RANDOM HOUSE ENGLISH JAPANESE DICTIONARY』を調べてみますと、次の説明がしてあります。[choose]と[select]の区別だけは解釈の上で大切ですから引用します。

[choose]「たくさんの可能性の中から、ある一つものを選び、意志決定に重点を置く。」

[select]「あるものが目的にかなってゐるためにそれを選ぶ、決定に至るまでの慎重な考慮に重点を置く。」ここを読むならば翻訳者の斎藤氏は[select]でもよい[choose]でもよいではなくて、「たくさんの可能性の中から、ある一つものを選び、意志決定に重点を置いた」[choose]でなければならないと考へた上で、翻訳がなされたと言はれます。

三行目に進みます。

[Who knows but I may chance upon] [Who knows...?]は修辞疑問文でありまして、「誰が知ってゐるだらうか、いや誰も知らない。」=[No one knows]「誰も知らない」とは=[God knows]であり、「神のみぞ知る」の意であります。[may]=「可能性、推量」、[chance upon]=[find, discover]「見つける、発見する」の意です。三行目の訳は「結果は神のみぞ知る、だが、私は見つけるかも知れぬ」となります。

伝統に根ざす人生観

私達が対象にどのやうに向き合ふか、そこから何かを生み出すときには、心が豊かに対象に向き合つてゐるでせう。逆に貧しくなつたときには、空しさのみが残る体験を凡夫である私達はよくしてしまふものです。[If I choose with heedful mind]「もし注意深い心を働かせて選ぶならば」の[heedful mind]には何が根底で、働いてゐるのだらうかと言ふ疑問が湧いてきます。小林秀雄先生の『私の人生観』に次のやうな箇所があります。「仏教によって養はれた自然や人生に対する観照的態度、審美的態度は、意外に深く私達の心に浸透してゐるのであつて、丁度雑踏する群集の中でふと孤独を感じる様に、現代の環境のあはただしさの中で、ふと我に環るといつた様な時に、私はよく、成る程と合点するのです。まるで遠い過去から通信を受けた様に感じます。決して私の趣味などではない。私はさうは思はぬ。正直に生きてゐる日本人には、みんな経験があるはずだと思つてゐます。人間は伝統から離れて決して生きる事は出来ぬものだからであります。」(昭和五十三年七月三日、第二十三回合宿教室の講師としてお見えになる小林先生の講義を受ける心の用意にと小田村寅二郎先生が贈つて下さつた本、『人生について』中公文庫三十頁より)[express]は「(思想を)言表はす、表白する」の意であります。これでは口先だけの表現であっても[express]であります。語源を辿れば「(果物の汁などを)搾る」の意で、小林先生の文章を読めば一言一句が伝統の中から圧搾し、搾り出された[expression]「表白」であるのだと私は感じます。「仏教によつて養はれた自然や人生に対する観照的態度、審美的態度は、意外に深く私達の心に浸透してゐる」このやうな文章に出会つたときに私達は「おや！」と思ふでせう。そして、私達自身の心の内を集中して見ないで、世間一般の他人の心を詮索して見る場合があります、すると、文意に迫ることは出来なくなります。飽く迄も自分の内面に目を向けるべきでせう。

私は高校生を相手に三十余年教育に携はつて来ました。「いぶせし」と思ふ生徒がゐます。その中でも、問題行動を起こし特に「いぶせき」生徒に対しては、怒り心頭に発し、切り捨てて退学にさせるべきだ。と思ふことも度々ありました。そんな時に大学生の頃から輪読して来ました『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の一節「篤く三宝を敬へ。…人尤(はなはだ)悪(あ)しきもの鮮(すくな)し。能く教ふれば之に従ふ。其れ三宝に帰せずんば、何を以てか枉(まが)れるを直(ただ)さむ。」が思ひ出され、その生徒に対する気持ちを取り直し、教育を続けて行くことが出来て、卒業させた生徒が何人かゐります。あのとき見捨てなくて良かったと思ふそんな体験が何度かあります。何も自慢話をしてゐるのではないのです。小林先生の文章に「まるで遠い過去から通信を受けた様に感じる」とありますが、千四百年といふ時空を超えて聖徳太子の憲法第三条が私の心に迫つてきたことが不思議であり、何故そのとき心に甦つて来たのかを、ここでは問題にしたいのであります。一時は切つて捨てるべしと思つた目の前の生徒に「人尤(はなはだ)悪(あ)しきもの鮮(すくな)し。能く教ふれば之に従ふ。」を当て嵌めて自分を見つめなほせといふ声が聞こえて来たのです。「能く教ふれば之に従ふ。」といふ聖徳太子の御信念

に如何に遠い気持ちになって教育をしてゐたかが思はれる。と同時に太子への「畏敬」の念を強く懐かざるを得なくなったのです。

「畏敬の念」について小林先生は次の様に言つてをられます。

「正常に考へれば、実行家といふものは、みな懷疑派である。精神は、いつも未知な事物に衝突してゐて、既知の言葉を警戒してゐるからだ。先づ信ずるから疑ふことが出来るのである。与へられた事物には、常に精神の法則を越える何ものかがある。実行といふ行為には、常に理論より豊富な何ものかが含まれてゐる。さやうな現実性に関する畏敬の念が先づ在るのです。だから強く疑ふことが出来るのです。(四十一頁…四十二頁)

単純に私達は「信ずる」ことは良い心の働かせ方で、「疑ふ」ことは悪い心の働かせ方だと教条的に考へてはゐないだらうか？「未知な事物に衝突して」[find]したり、[discover]するには「警戒して」そこから一步も出ないならば、何も望めないでせう。「先づ信ずるから疑ふことができるのである。」このことは、遠心力と求心力の関係に似てゐるやうです。「Who knows?」「誰が知つてゐるだらうか？」と未知の事柄に遠心力が働く、「疑問」を抱くその力の強さは「先づ信ずる」求心力に比例してゐるに違ひないのではないでせうか？皆さんは如何思はれますか？

[Who knows?] は誰に聞いても答へはまだ分からない。[No one knows.]であります。

[Every cloud has a silver lining.]「日を遮る黒雲も、へりだけは銀色に輝いてゐる。」どこにその輝きがあるのですか？どこか遠い空の果てでもあるし、求心力が働けばPopeの詩

『Essay on Man』の一節にありますやうに [Hope springs eternal in the human breast]

「人間の胸の中に希望の光は永遠に湧き出る。」希望を失つてゐない人間の心の中は輝き続けるのであります。「Who knows?」=[God knows.]「神のみぞ知る」。至誠を尽くして努力してゐる、誰もそれを認めてくれなくとも、[God knows.]であり、これこそは、それ以上他に何も求めないでいい豊かな心であります。

四行目に進みます。[Some salve to bless mankind?] [salve] [sa:v]=[a healing or soothing ointment]=「(主に詩で)軟膏、癒すもの」「薬」の意、[bless]=[to confer happiness or good fortune on]=「…に幸福または幸運をもたらす」、[mankind]=[human beings]「人類」の意です。四行目の訳は「人々に幸福をもたらす薬を」となります。

韻律法(prosody)から考察してみませう。

(1) If / 'mong / the / rank / and / wild / ing / growth

弱 / 強 弱 / 強 弱 / 強 弱 / 強

(2) I / choose with / heed / ful mind,

弱 / 強 弱 / 強 弱 / 強

(3) Who knows but I may chance up on

弱 / 強 弱 / 強 弱 / 強 弱 / 強

(4) Some salve to bless man kind?

弱 / 強 弱 / 強 弱 / 強

(1) と(3)は弱強 4 詩脚(iambic Tetrameter)の行となつてゐます。この詩行の特徴は「平易明快で高雅、叙事詩に用ひても余情味が多い。」と言はれてゐます。

(2) と(4)は弱強 3 詩脚(iambic Trimeter)の行となり、それぞれの行[mind][kind]

と同じ[and]の音で終つてゐまして、脚韻(rhyme)を踏んでゐます。『英詩韻律法概説』[English Prosody](篠崎書林)には脚韻について「概して大きさ広さを連想させる長母音、複雑・奥行きを連想させる二重母音が圧倒的に多いために、広大な奥行きのある情景を暗示し、ことに行末は二重母音・長母音の母音止めになり、最も長く響き、その効果を高めてゐる。」(二頁)と言はれてゐます。[mind]に対して[human beings]ではなくて[mankind]と同じ[ai-nd]といふ二重母音を持つ語を置いた事で「広大な奥行きのある情景を暗示」してゐることが感じられます。声に出して何度も読めば自然に感じる事が出来るものであります。

最後に日英の御製を声に出して読んで終りませう。

(参考文献) 『明治天皇御集』巻中 『私の人生観』

『New SHOGAKUKAN RANDOM HOUSE ENGLISH JAPANESE DICTIONARY』

『英詩韻律法概説』[English Prosody](篠崎書林)

『Building BRIDGE S』Her Majesty Empress Michiko Of Japan

「むらぎもの心のかぎり」 [I'll do the utmost in my power]

をりにふれたる
(明治四十四年)

むらぎもの
心のかぎり

つくしてむ

わが思ふこと

なりもならずも

I'll do the utmost in my power,
And work with might and main,
E'en if the unforeseen event
Prove all my efforts vain.

『明治天皇御集』巻下 を引用して御製の意味を先づ理解して行きたいと思ひます。「事は成るも成らざるも、我が心の限、力の限を尽くさむと、堅き御志をのべ給へり。」と解説がしてあります。心に掛る枕詞「むらぎも」が最初にありますから、心に語勢がつき「我が心の限り」だけでなく「力の限りを」も加へて「尽くさむ」と解説されてゐるのでせう。英訳も一行目で[power]「力」が入ってゐます。事の成否ばかりが気になり、躊躇逡巡ばかりしてゐるときには、上の日英の御製を唱へあげれば、一步前に進める、そんな律美(Rhythm)のある詩ではないでせうか。

一行目から入ります。

[I'll do the utmost in my power,] [the utmost]は名詞で「最大限度」の意。例へば、「それが私のなし得る精一杯です。」は[That is the utmost that I can do.]と英語に訳されます。また「私は成功しようと全力を尽くす。」[I'll do the utmost to succeed.]と英語で表現されます。[in my power]= [everything that I can]「私の身に及ぶすべて」の意です。

一行目の訳を取れば「身に及ぶすべてをかけて私は精一杯を尽くし」となります。

二行目に進みます。[And work with might and main,] この行の主語も一行目と同じく[I'll]であります。

[work]=[to perform or act]=「実行する、行ふ」の意。[with might and main]は英訳御製解説その2で「千よろづの民よ心をあはせつつ」に出て来てゐました通り「全力をふりしぼって」の意です。二行目の訳を取れば「全力をふりしぼって行ふ」となります。

明治天皇が「心の限りを尽くしてむ」と思はれたことには、どんなことがあつたと皆さんは思はれますか？そのことを気にかけて明治天皇について書かれた本をいくつか紐解いてみました。『明治大帝』(大日本雄弁会講談社)昭和二年発行を読んでゐました時、「明治天皇がいろいろの分野を『御奨励』されたこと」が各界の所縁の人たちによって書いてあります。それらを読み、感じましたことは、皆で明治天皇の回想談をしてゐるのですが、私には、明治天皇ご自身におかれましては、「如何云ふことであつたらうか？」と言ふ疑問が湧いてきました。第三者にとっては過去のことであらうとも、ご本人にとっては、「御奨励」とは、決して過去の事象ではない。成否を先立てて考へれば、躊躇せざるを得ない事柄であるかもしれないが、或時点で、決断をなされ、未来に向かつてご決断成されたことである、と思はれます。例へば、臨時帝室編集官長の三上参次は「文教の御奨励」について書いてゐます。「御在世中、東京帝国大学には、卒業式の日には勿論、其の他の折にもしばしば臨幸あらせられ、特に教育の御奨励に努めさせられた。明治三十七年七月十一日の行幸の時の如きは、特に文部大臣を大学の便殿に召させられて、『軍国多事の際と謂へども、教育のことは忽にすべからず、其の局に当る者克く励精せよ』との、有り難き勅語を下されたのである。」(315頁)「便殿」とは御休息のために設けられた御殿のことです。そこで、日露戦争の最中であるが、「教育のことは忽せに」してはならぬ「克く励精せよ」と教育に携はる者に勅語を下された。それは有り難い思し召しであつたと言ふ回想です。文教の御奨励は植民地の台湾にも同じやうになされたのです。小田村寅二郎編にかかる『新輯 日本思想の系譜——文献資料集(下)——』(時事通信社)の一〇四に伊沢修二(1851—1917)と日本領有初期の台湾の章があります。「伊沢修二は、西洋における初等・中等教育の諸方式をわが国に移し植ふるに多大な功績のあつた人である。中でも、音楽教育を児童に教

へるための、わが国文教政策の大様を整へたひとでもあった。」(372頁)と人物紹介がしてあります。この書では九頁に渡って伊沢修二の広範な教育活動について述べてあります。教育を志してゐる方だけでなく多くの方に是非お読み戴きたい所です。日露戦争直後、日本の領有となった台湾に対して、特にその教育活動開始当初の様を伊沢の文献資料を取り上げて、ご紹介してをられます。

一つは「台湾の教育についての講演」であります。小田村先生はこの講演に対し(伊沢修二は、日清戦争直後、未だ戦火をさまらぬ彼地に明治二十八年——1895——六月に赴き、その年十一月月上旬、十一月三十日、東京において「国家教育者」同人に対して講演を行った。この講演の一ヶ月後に、台湾の芝山巖(しざんがん)で、伊沢の部下六名が匪賊の襲撃にたふれた)と註を付けてをられます。台湾の人民の気象に対し「ある場合には、死を見ること帰するが如しと云ふ位である。南進軍に向かって随分抵抗した、其の抵抗した彼等の実況を見ても、死を決した有様は、遼東あたりの人民とは違つて、日本人の気風に似てゐると云ふ事を軍人社会では認めて居る。」戦後の日本人は占領政策で魂を抜かれてしまひましたが、ここで云はれてをります「死を見ること帰するが如し」と云ふ気風が「日本人の気風に似てゐる」と共感を示す度量が、戦後生まれの私達には、果して、存在してゐるのでせうか? 「南進軍」の北白川宮師団長はかの地台南の陣中で明治二十八年(1885)に戦病死遊ばされてゐます。伊沢は教育者の心構へとして「私共の望む所は台湾に向かつて尽くす人は、全く献身的の考へを以てやつて貰ひたい、或ひは利益と云ふやうなものを目的として働く」と云ふ事は、或る方面には許すべき事かは知らぬが、教育者はさう云ふものではない、教育者が台湾に行つて仕事をするは、全く献身的の考へを以て、やつて行かねばならぬと思ひます。」(384頁)台湾における教育活動が順調に展開されて行く過程において、「献身的に教育を行ふ」とは文字通り自分の命をささげてまでも、尽くした先人の方々がをられたことを抜きに論ずることは出来ないのであります。

許文龍著『台湾の歴史』によれば、「当時の台湾人は非常に哀れな境遇に居た。平均寿命は三十歳未滿でマラリヤ、赤痢、チフス等の伝染病が常に流行してゐた。日本台湾派遣軍の病死者は戦死者の三倍と言ふ状況にあつた。後藤新平は徹底的に台湾の衛生環境と医療の改善をした。」(十二ページ)とあります。私達が「台湾派遣学生研修団」として平成十五年十一月に訪問した際に、蔡焜燦氏(李登輝前総統の片腕と言はれ台湾トップの実業家として名高い)が台北市内の麒麟大飯店に招待して下さいました。蔡氏が言はれた二点をここに紹介します。「①日本の台湾統治は、これまで台湾を統治したオランダや清国、中国(中国国民党)と比較して最高であつた。現在の台湾のハード面もソフト面も日本統治のお蔭であること。

②特に「教育勅語」に基づく国民教育によって識字率が九十パーセント台まで上がり、民度の飛躍的向上と保健衛生の完備に伴つて平均寿命も三十歳代から二倍近くまで上がったこと。」

勇氣ある台湾の人から聞くまでは、このやうな歴史的事実は私達は知らされなかつたのであります。無知な多くの人々は、侵略したと詫び続けてゐます。このやうな事実が世界史から消されたままでは「台湾の為に献身的に勤め」いのちをささげた私達の祖先に申し訳ない。斯様な気持ちを抱くのは私だけなのでせうか。

三行目に進みます。[Even if the unforeseen event] [Even if] は、詩では[over]を[o'er]と縮約するやうに、=[Even if] のことであり「たとへ…であっても」の意です。[unforeseen]=[not foreseen] 「予知されない」。[event]=[something that happens, occurrence] 「起ること、出来事」の意です。「予知されない出来事に」何故ただ一つを示す定冠詞[the] が付けられてゐるのでせうか? 諺で「人事を尽くして天命を待つ。」は英語では[Do your best, and abide by the event.]と云ひます。この諺にあります[the event] は「天命」の意です。[the] で限定された「予知されない出来事」こそが「天命」である、と私は考へます。三行目の訳は「たとへ、予知しがたい天命が」となります。

四行目に進みます。[Prove all my efforts vain.] [prove] 「…を確信させる」、[all my efforts] 「私の全ての努力」、[vain]=[fruitless] 「徒勞の」の意です。四行目の訳は「私の全ての努力、徒勞なるを確信させるとも」となります。不可能だと分かつてゐても、百万分の一の可能性に向かつて人間は一步踏み出さねばならない。そのやうな時が人生に於いては必ずあるのだと云ふ御製であると解されます。

〈愛と犠牲について〉

「明治維新」は英語で[The Meiji Restoration]と言はれます。鎖国されてゐた状態から開国され、日清日露の両大戦を国民一体となつて戦ひ、勝利を得ることができました。その結果として台湾の統治に当時の国民は日本を愛するのと同じ愛を込めて、国民教育に身を奉げた。そのことは文献を読むにつけ、愛し、その果てに台湾において、命を捧げられた先人の方々に対して、尊敬と共感を覚えるものであります。

戦後日本では「平和」とは憲法に明記してをれば存在すると言ふ風に考へる向きがあります。しかし[The Ox-

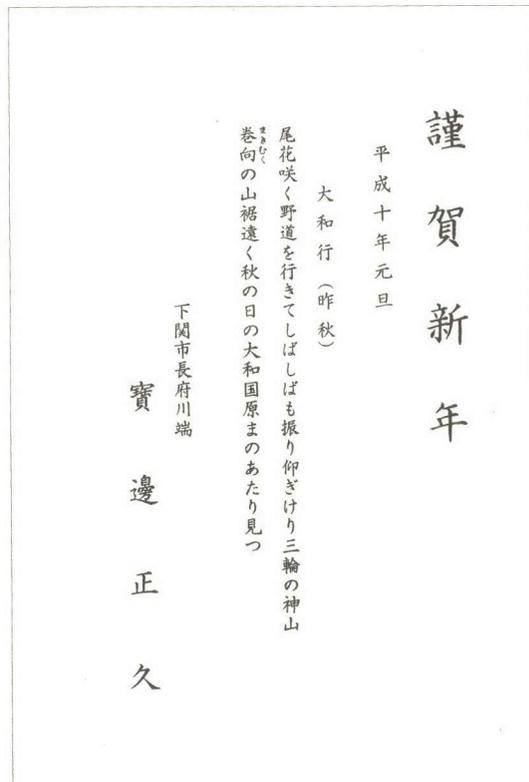
ford English Dictionary]の定義に拠れば「平和」とは、次の如くであります。[Freedom from , or cessation of, war or hostilities; that condition of a nation or community in which it is not at war with another.]憲法に明記しておけば平和が保障されるなどとは書いてはありません。「戦争または、戦争行為がない、あるいは戦闘停止の状態」と最初に書いてあります。[hostility]は「敵意」ですが、[hostilities]《正式》で「交戦状態」[battles]の意となり、人間が存在するにはお互ひに「敵意」を抱くのが当然であり、常に「交戦状態」に世界はあると言ふ捉へ方がなされてゐるのです。次に「お互ひに交戦中でない国家または社会の状態」と説明してあります。アングロサクソン民族は平和とは戦闘行為が一時的に条約等で停止されてゐる短い期間であり何時戦闘状態に突入するか分らないと、覚悟を定めて生きてゐるのです。ならば憲法第九条は日本民族を一時的に[intoxicate]「酩酊させる」手段であつたと受け止めるべきでせう。もしさうでなくなつたのならば[The Oxford English Dictionary]の[peace]の定義は書き換えられてゐるはずではないでせうか？昭和四十七年に購入しました[The Oxford English Dictionary]の定義はいささかも変更されてゐません。

戦争と戦争の間の平和も束の間、第二次世界大戦が勃発しました。日本が己む無く立ち上り戦つた戦争は[The Pacific War]ではなくて[The greater East Asian War]日本語に直しますと「大東亜戦争」でありました。三、四行目に有ります[E'en if the unforeseen event Prove all my efforts vain.]「仮令、私の努力の全てが徒労に終ることが天命であらうとも」神様はその努力をしてゐる姿をみそなはし、ご嘉納してをられるに違ひありません。それを皆さんは信じる事が出来ますか？それがもし信じられないとするならば松蔭先生の言はれた「学問の初一念」に誤りがあると言ふことになります。

終りに日英の御製を拝誦しませう。

《参考文献》

- ◎ 『明治天皇御集』巻下
- ◎ 『明治大帝』(大日本雄弁会講談社)
- ◎ 小田村寅二郎編『新輯 日本思想の系譜——文献資料集(下)——』(時事通信社)
- ◎ 許文龍著『台湾の歴史』



●学恩深き師からの賀状

「末つひにならざらめやは」 [What, in the fullness due of time]

述 懐 (明治三十八年)
末 っ ひ に
な ら ざ ら め や は
国 の た め
民 の た め に と
わ が 思 ふ こ と

What, in the fulness due of time —
What is not to be done
All for the sake of land and folk
Whereon my thoughts e'er run?

この御製の理解を深めるヒントとして『明治神宮叢書 第七巻 御集編(1)』の解説を読んでみませう。「この年九月、日露講和条約御批准後の御製と洩れ承る。国の為に民の為にと思し召すことは、よし一時成らずとも、将来その目的は成らざらんや、必ず成るべしとの深き大御心を示させ給へり。」(二百九十一頁)上の句と下の句が倒置されてゐます。国の為に、民の為にと思し召すことは、儘に、一時ならなくても、将来その目的は成らないのであろうか、否、必ず成るに違ひないとの大御心をお示しになつたと解説が為されてゐます。

一行目から入ります。

[What, in the fulness due of time —] [What]は疑問詞で「如何に成るのか?」の意。[in the fulness of time]=「月満ちて」、[due]=[something owed as a debt]「負債として支払はれるべきもの、当然の報ひ」、併せて [sometime in the future]「将来のいつか」の意で御製の「末つひに」が英訳されたと考えられます。一行目の訳は「如何になるのか、行く末は」として見ます。

二行目に進みます。[What is not to be done] 一行目の[what]と同じ[what]が繰返へされたのだと考えられます。難しい表現の連続ですが現代風に言い直しますと[What will not happen to be done by us]となります。能動的に言ふならば[What are we not going to do]でせう。[be + to 不定詞]はいろいろな意味があるのは高校で習はれたところですが、ここでは「可能性」でもあり「運命」であるとも取られます。二行目の訳は「成さざらんことは何か」としませう。二行目を読む限りでは「必ず成るべしとの深き大御心」は何とも分かりません。「現時点では自分に出来る最大限のことはした。しかし成し得てゐない何かがあるのではないかと云ふ疑問が湧く。」とまでしかここでは解釈できません。

信ずることと知ること

『様々なる意匠』の始に小林秀雄先生はアンドレ・ジード [Andre Gide (1869(明治二年)・・・1951(昭和二十六年)) (ノーベル文学賞・昭和二十二年に受賞)の「懐疑は、おそらくは叡智の始めかもしれない、しかし、叡智の始まるところに芸術は終るのだ。」を本文が始まる前に引用して、書き置いてをられます。何度も『様々なる意匠』を読んで参りましたが、この文章にはあまり目もくれずに本文ばかり読んで冒頭の文章を深く考へてみたことはありませんでした。これは『ドストエフスキーとニーチェ』の中にありました。翻訳された上の文章の原文に当たらないと微妙なニュアンスがどうも分かりません。それでフランス語の原文に向かひ、夜を徹して読みました。この箇所を見つけたときは、大きな喜びでした。フランス語では「Douter, c'est a l'origine de la sagesse.」とあります。訳して見ますと「疑問をもつこと、これこそは智恵のオリジン(始源)である。」となります。疑問を持つことで人間は知性を磨き科学を發展させて来たと云へるでせう。次ぎの文をジードは「Mais loil a la sagesse, l'art n'existe plus.」(『Dostoevsky et Nietzsche』)と書いてゐます。「しかし、智恵の存在するところに、芸術は存在しない。」とフランス語からは訳されます。二十世紀は知性が生み出した「科学の時代」とよく言はれました。その恩恵に私たちは浴して生きてゐることを誰も否定できないでせう。[Douter]「疑問をもつこと」が [sagesse]「智恵」の [l'origine]「源、始まり」であり、知性が科学を發展させたのでせう。さて、科学偏重の時代に在って「疑ひ、そして知性を働かせることから、何か重大なものが失はれないか?」と言ふ問ひ

を發して、国民文化研究会の合宿教室において、小林秀雄先生は「信ずることと知ること」の演題で講義をされました。その内容は『日本への回帰』に掲載されてあります。(この本は品切れ、新潮社カセット・ブックは今でも求められます)

ニーチェは「神は死せり」と言ひました。ここでは「神」を「芸術」に置き換へるならば「芸術は終る」と同義でせう。神は疑ふものではない、仰ぎ讀へ心の目を開き信じないと、決して見える存在ではない。疑へばニーチェの言ふ通り、「芸術」と同じやうに、「神は死んで」しまふに違ひありません。あながち、疑問を懐くことを否定してはゐないと思はれます。なぜなら、それは人間の本性に発することでありますから。しかし現代人には、遠い昔の人たちに比べて何が失はれてゐると云ふのでせう。

澆刺たる尺度を

ある日の夜のことで、久しぶりに福岡から小倉行きのバスに乗って帰ってゐますと美しい月が見えてゐました。自分の車を運転してゐますと景色を楽しむことができませんが、バスに乗ったあの夕べは、ゆっくりと眺めてをりました、後ろの方の席には三歳ぐらいの女の子と母親が乗ってゐました。娘が突然、「お母さん外を見て！お月さんが美しいよ！」と元気な声で言ひました。居眠りしてゐる人たちを起こしてしまふ位の大きな声でした。若い母親は恥づかしさが先立ってしまひ、「そんなに大きい声を出しては駄目。」と娘を叱って、親子で月をみて楽しむことは叶はなくなりました。「人に迷惑をかけては駄目だと云ふ知性は育つたでせう。しかしこの娘の感性はどうなるのだらうか？」と私は黙って考へてゐました。小林先生は次ぎのやうに言はれてゐます。「『自分の嗜好に従つて人を評するのは容易なことだ』と人は言ふ。しかし、尺度に従つて人を評する事もひとしく苦もない業である。つねに生き生きとした嗜好を有し、つねに澆刺たる尺度を持つといふことだけが容易ではないのである。」人中では、はしゃいではいけない。と言つた尺度に従つてあの母親は、子供に共感を示す前に、頭ごなしに叱つたのであると思はれます。「つねに生き生きとした嗜好を有する」ことは、本当に容易なことではない。「つねに澆刺たる尺度を持つ」と云ふことは、我が身を振り返れば、時には「澆刺たる尺度」を有して短歌を創作してみようと云ふ気分になります。ところが、「つねに澆刺たる尺度を持つといふことだけ」は不可能に近いと云ふのが、私の痛感であります。皆さんは内省されてみていかが感想をお持ちになりますか？

三行目に進みます。[All for the sake of land and folk] [All]は一、二行目を受けた「すべて」であります。理解するために散文的になりますが、言ひ換へますならば[Everything is done for the sake of land and folk]となります。[for the sake of …]=「…の為に」、[land and folk]=「国と民」の意です。三行目の訳を取れば「全てのことが国と民のためになされた」となります。[Everything is done]でなく[Everything has been done]と過去から現在に至るまで「なされた」と考へることもできますが、ここでは、飽く迄も「未つひに」向かつて、今現在成し得る全てに焦点が定められてゐると私は受け止めます。掘つて[Everything is done]と言ひ換へました。異論があればお聞かせ下さい。

四行目に進みます。[Whereon my thought e'er run?] [Whereon]=[on which]のことで「その上で」の意、先行詞は三行目の[land and folk]であります。[my thoughts]複数形の場合は=[intention, judgement]のことで「意図、判断力」の意です。ここは御製の「わがおもふこと」が英訳されたものでせう。[e'er]は語中音省略(Syncope)であり、=[ever]です。ここでは現代語では=[always]と置かれるところでせう。[run]=[operate]「働く」の意です。理解を助けるために[my thoughts]を[I]=「私」を主語にして書き換へるならば、[I always think of land and folk]となります。これはお分かりの通り「私は国と民のことを常に考へる」と訳されます。四行目の訳を取れば「その上に私の思ひは常に働く」となります。[e'er]「常に」を知的に解釈するだけでは、詩の命は伝はつて参りません。心でよく味はつてみて下さい。尋常ならざる「常に」であると思はれて来ませんか。

生き生きとした嗜好を

三、四行目を再度読み直しますと「全てのことは、国と民のためになされたその上に(国と民との上に)私の思ひはつねに働く」であります。明治天皇がご内省された上で「つねに働いてゐる」「私の思ひ」はご自身のことよりも「国と民との上」にである。とお詠みになられてをられるのです。上の句と下の句が倒置されてゐる意味をここで振り返つてみませう。強調されてゐるのです。一、二行目を再び、味はひ直してみるものが示唆されてゐたのでせう。「未つひに ならざらめやは」疑問としての解釈も成り立つのではないかと上の句を読むだけでは疑問が湧きました。しかし、下の句から返つて、強調の意味を考へるならば、反語として解釈すべきである。と解されます。回り道をしてゐるやうですが、ここで冒頭の解説にありました「国の為に民の為にと思し召すことは、よし一時成らずとも、将来その目的は成らざらんや、必ず成るべしとの深き大御心」が私には漸くにして、拝さ

れるのであります。小林先生が言はれました「つねに生き生きとした嗜好を有し、つねに澁刺たる尺度を持つ」こととは明治天皇にをかせられましては、政(まつりごと)をなされるときに「つねに」なされて来られたことであるのです。このことは、国民に率先して実行されてこられたのである。十萬首に及ばんとする御製をお残しに成られたのは「つねに生き生きとした嗜好を有し」てをられた厳然たる証でもあります。

[All for the sake of land and folk

Whereon my thought e'er run?]

「国と民のために、私に出来る全てをかけて行った

私の思ひはつねに働いてゐる 国と民の上に」

と英語の詩に遷し終へたとき、翻訳者・斎藤秀三郎氏は、じーんと胸が熱くなつたに違ひありません。そのやうな氏の姿が私には浮かんで参ります。明治天皇の下に生きた斎藤氏は、御製を英語に直し、世界中の人々に伝えたいと云ふ強い思ひがあつたからこそ試みたのでせう。明治の国民の感動と誇りが、生き生きと調べを奏でてゐるのがきつと外国の人々に理解されたに違ひありません。そのやうな英訳の詩となつてゐるとあなたはお感じになりませんか？

最後にまう一度声に出して、日英の御製をゆっくりと読み味はひませう。

〈参考文献〉

『明治神宮叢書 第七巻 御集編(1)』

『様々なる意匠』 小林秀雄

『Dostoevsky et Nietzsche』

『日本への回帰』

謹賀新年

新春を迎へ御尊家御一同様の御健康と御多幸をお祈り申し上げます
拓殖大学に奉職致しましてから二年半を経過し学内事情にも漸く慣れて参りました 問題は山積してゐますが二年後に迫つた創立百周年に向けて教育研究の充実に微力を傾けて参る所存です
翻つて祖国の現状を見ると果して独立主権国家なりやと憂憤を禁じ得ません この閉塞状態を打開する道はただ一つ一億国民が靖国の英霊に崇敬感謝の誠を捧げることのほかになしと存じます
すめろぎの御蔭威かがやく初春の光仰がむ時ぞ待たるる

平成十年元旦

東京都港区白

小田村 四郎

(勤務先 拓殖大学)

●学恩深き師からの賀状

「おもふこと思ふがままになれり」 [Because good fortune]

をりにふれて
おもふこと
(明治四十年)
思ふがままに
なれりとも
身をつつしまむ
ことな忘れそ

Because good fortune favour'd thee

To gain thy great intent,

Forget not in triumphant pride

To practise self-restraint.

理解を深めるために、『明治天皇御集 巻下』を引用します。「事な忘れそは、事を忘るる勿れなり、驕りの心をいましめ給へるなり」(四一八頁)「ことな忘れそ」のところは、斎藤氏は分かりやすいやうに言ひ換へたのでせうか「ことをわするな」と、記してをられます。或いは「ことをわするな」の方も当時は世に出てゐたのかもしれない。

一行目から入ります。

[Because good fortune favour'd thee] [Because]は否定文中で用ひられた場合は「・・・だからといって」の意となります。例へば、「人が貧乏だからと言って、軽蔑するな。」は[You should not despise a man, because he is poor.]となります。[good fortune]=[good luck]=「運命の良い巡り合はせ、幸運」。[favour'd]は、語中音省略(Syncope)であり、音節を縮訳することで「詩行内に規定以外の余剰音節がある場合、格調を引き締めるために、それを省く」(『英詩韻律法概説』六十九ページ)とあります。=[favoured]=[oblige, aid]=「・・・に恩恵を施す、援助する」の意です。一行目の訳は「幸運が汝に恩恵を施すとは云へ」となります。

二行目に進みます。[thee]と[To gain]は主語と述語の関係をなす[nexus]ネクサスとなつてゐます。[gain]=[win]「勝ち得る」、[great intent]=「大きな意図、大願」の意。二行目の訳は「汝の大願を成就するために」となります。

三行目に進みます。[Forget not in triumphant pride] [Forget not]は散文では、[Don't forget]と使はれ「忘れるな」の意。[in triumphant pride]は挿入された副詞句で、心の状態を表はしてゐます。[triumphant]=[victorious]であり「大勝利を得たる」、または=[exultant]であり「勝ちに誇れる、意気揚々たる」の意です。日清・日露の大戦の勝利がイメージされる[triumphant]であります。[in pride] [in +抽象名詞]は副詞の働きをしますから=[proudly]であります。ここは、二つの意味が考へられます。①splendidly(堂々として)、②arrogantly(尊大に、いばって)。①、②のどちらが適切な解釈となるか、前後関係(context)から考へて見ませう。下の句では「身をつつしまむことな忘れそ」自分の身を慎むことを決して忘れてはいけない、と厳しく己(おのれ)を誡めようとなされてをられます。明治天皇には他にも之に類する御製が多くあります。次の二首の御製を引用します。

述懐(明治四十二年)
たたかひの
かちにほこりて
むらぎもの
ころゆるぶな
わが軍人

仁(明治三十七年)
国のため
あたなす仇は
くたくとも
いつくしむべき
ことな忘れそ

戦勝に酔つてしまひ、「仇をいつくしむ」心である「仁」を決して忘れてならぬ。2首目では、「戦ひの勝ちに誇

りて」心が弛緩して仕舞ふと如何なることが国民の心に起るか心配されてをられることが伺へます。従ひまして②のarrogantly(尊大に)の意で解釈すべきでせう。三行目の訳は「決して忘れるな、大勝利に酔ひ尊大になり」として、大御心に近づきたいと思ひます。

四行目には何を忘れてはならないかが書いてあります。

[To practise self-restraint.] [practise]は、次に来る目的語で意味が変はり、(music, painting, wrestling, jujutsu, etc)の場合は「習ふ、練習する」などの意となりますが、ここでは「(節儉などを)常に実行する、」の意で使はれてゐると考へられます。[self-restraint]は「自制、克己」の意です。四行目の訳は「自制を常に実行することを」となります。

勝者が驕り尊大になる、一方、敗者が卑屈になり自虐的思考に陥るのは、洋の東西を問はず避けがたいことなのでせう。『老子』に「戦勝テバ喪礼ヲ以テコレニ処ル」といふ一節があります。『喜怒哀楽の人間学』(PHP)によれば、昭和三十七年十月、アメリカに表敬訪問に行った佐藤栄作が老子の上の言葉を引いてケネディ大統領の胸襟を開いた逸話が書かれてゐます。アジアの一小国の政治家に対して剣もほろろの態度であったケネディに「シュバイツェルがこういうことをいっていますよ『戦に勝ちし国は敗れし国に対して喪に服するの礼をもって処さねばならない』と、総理になる前の佐藤は言ったさうです。これに敏感に反応したケネディもそれなりの教養があり、心が生きてゐたのでせう。「全く儀礼的でとりつくしまもなかったケネディは急に態度を改め、胸襟を開いて会談は延々三時間にも及んだ。」(百五ページ)とあります。佐藤はどんな目でケネディに話し掛けたでせうか。いい言葉を言へばそれで相手の心を打つと云ふものではない。敗者の卑屈な目で語りかけては、ケネディは相手にしなかつたでせう。これまでの日本の首相とはどこか違ふ気迫に満ちたケネディにとって語るにたる目をしてゐたに違ひありません。

孟子の巻第七の十五には「胸中正しからざれば則ち眸子(ひとみ)眊(くら)し。其の言を聴きて其の眸子(ひとみ)を觀れば、人焉(いづく)んぞ度(かく)さんや。」(『孟子』岩波文庫 四十頁)とあります。人物の善し悪しを見分けるには、瞳にまさるものはない。「胸の中が正しくないないと、瞳は暗く曇つてゐるものだ。だから相手の言葉をよく聞きながら、その瞳をよく観察すれば、誰がいったいその心の中をかくしきれようか。とうていかくしきれるものではない。」(『孟子 下』四十頁～四十一頁)ケネディは相手の佐藤栄作の言葉をよく聞きながら、その瞳をよく観察したに違ひありません。お互ひの瞳を見つめあふ其の刹那に日米の信頼の掛け橋が架かったのです。歴史に残る佐藤栄作の仕事としては、後に昭和四十六年(1971)六月、アメリカに占領されてゐた沖縄の返還を成し遂げたことがあります。沖縄返還の記念式典がテレビで中継されたのを私は、英語の授業を取りやめて生徒と一緒に観たことを、昨日の事のやうに覚えてゐます。(ビデオを見たのかも知れませんが)式典の締めくくりの時がきました。「万歳三唱」の音頭を時の総理大臣・佐藤栄作が執りました。ただ「万歳」と言ふだけでは気持がおさまらなかつたのでせうか。佐藤総理は昭和天皇がお座りの方に向かひ、深々と一礼をして、「天皇陛下万歳」を唱へました。参列者全員が高らかに、唱和しました。ブラウン管に映し出された皆の表情は、かくも嬉しかったのかと云ふ、満面に笑顔を湛へてゐました。

戦争で取られた国土は、武力で取り返すのが世界史の常道であります。ところが、日米の信頼関係の上に立ち、要路の人たちの外交努力で返還されたのでした。明治生まれの佐藤元総理にとって、国土とは、地図上の外的存在ではなかつたのでせう。国民と国土とを、天皇陛下の意を体し、自分の体そのものだと受け止めてゐたと思はざるを得ないのです。沖縄を足の親指とすれば、切れ落ちてゐた自分自身の指が元に戻った位、喜ばしい事であつたに違ひません。喜びも一入(ひとしお)だったのでせう。私には「万歳」でなくて、「天皇陛下万歳」と言はざるを得ない気持になつた佐藤総理の気持を靜かに拝察したものでした。

伊藤氏に拠れば「訪米するにあたって、師の安岡正篤を訪問した事がわかつた。」とあります。新聞記者あがりの氏は佐藤栄作の教養の程度を軽視して、「どう考えても、佐藤栄作にこれほどの教養があつたとは夢にも思えない。誰がこの知恵をつけたのだろう」と論を進めてゐますが、私は、逆の受け止め方をしてをります。佐藤総理は、位人臣を極めて謙虚に学ぶ姿勢を失はない優れた人物であつた。万全の準備をして渡米した彼を、正しく評価すべきである。私は、有難いことだと思ひます。皆さんはどう受け取られますか。明治天皇のこの御製「おもふこと思ふがままになれり」とは、総理大臣になる事が出来た佐藤栄作にも云へる地位でありませう。総理の地位に昇り詰めたのです。[in triumphant pride]に陥る恐れ充分にある地位ではありませんか。勝利に酔ひ傲慢になれば頭を下げて安岡を師として教へを請はなかつたに違ひありません。一方を強調するが為一方を軽視するのは物事の本質を見誤ることになります。我々は、この点には十分注意して対処すべきでせう。

[To practise self-restraint.]「己に克つことを常に実行すること」は、明治の御代に於いては、「大勝利に酔ひ尊大になつて」しまひ、克己を忘れてしまふ恐れがありました。昭和の御代に於いては、大東亜戦争の敗北から、アメリカに外面的に負けただけであつたのにもかかはらず、己(おのれ)に負けてしまひ、自虐から抜け出せ

ぬ病弊が未だに消えない。そこが問題の深刻なところでせう。

松陰先生は上の孟子の言を解釈して次のやうに言ってをられます。「人の精神は目にあり。故に人を観るは目に於てす。胸中の正・不正は眸子の瞭眊にあり。而して善く眸子を観る者は、人の智愚動静に至る迄、皆昭々たり。然れば正邪のみを云ふに非ず。声音笑貌を以て恭儉をなすと云へども、人亦其の眸子を観んとす。果して何の益あらんや。空言偽行、素より人を服し信を取るに足らず。何ぞ至誠の人を動かすに如かんや。」(『講孟筭記』上三二〇頁 講談社学術文庫)

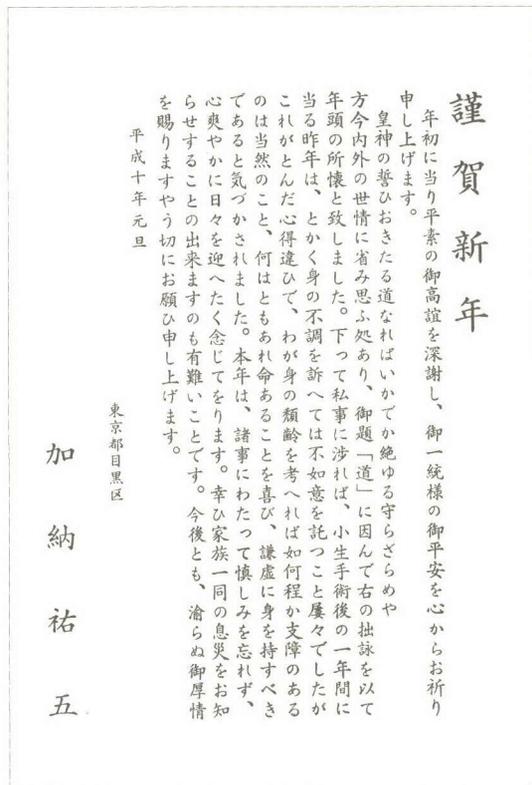
かう読んで行けば益々私達の毎週の輪読の価値と重要性の高まりを感じます。「瞭眊」の「瞭」とは、目の輝きの中で、古典に真っ向から学んで行く。そこから自然に養はれて来るところでせう。「眊」とは、輝きの無い暗い目、声に出して皆と古典を輪読してゐる内に、いつのまにか消えて行ってしまう泡沫のやうなものだと思はれませんか。沸々と、自信が湧いて来るやうに今日の輪読に真向ひたいものです。

最後に日英の御製を心を合はせ、大きな声に出して読みませう。

参考文献

- 『講孟筭記』上 三二〇頁 講談社学術文庫
- 『孟子 下』四十頁～四十一頁
- 『喜怒哀楽の人間学』(PHP)
- 『英詩韻律法概説』六十九ページ
- 『明治天皇御集 巻下』

平成十七年九月二十五日(日) 17:00～国文研 書庫倉に於て輪読会



●学恩深き師からの賀状

あとがき

平成十六年八月、阿蘇での第四十九回合宿教室は、参加し研鑽しました大学生各自が、新たな決意を胸に秘めて、盛会裏に終わりました。八月末に国文研の書庫蔵(福岡県宮田の小野家の古い屋敷跡に、平成十三年に建てられました書庫のことです)に藤新成信学兄(日章工業社長)と九州工業大学を中心とする九州大学、西南学院大学、福岡大学の信和会の学生が集合しました。翌年の第五十回合宿教室に向かって、新たに何を各自が研究するのか、決意表明を行いました。

私は「英訳明治天皇御製」の謹解を月に一度、A4の用紙に3～4枚にまとめて発表する旨を決意表明しました。九月に第一回の発表を早速、行ひました。そのときの学生の反応が予想以上に良く、今までにないほどの心が充実する体験をしました。

私の発表は、大学生の諸君にとりまして二つの点から共感を呼んだやうです。

① 温故知新の面からの共感

明治の文豪の夏目漱石や森鷗外が、彼らにとっては現代文として簡単に読めない古典になってゐるのです。しかしながら、明治と云ふ時代には何かしら惹きつけるものが、学校では教へられないが、在るのです。生命体としての明治時代の中核(core)と云ふか深部には明治天皇がをられたと言ふことは、漠然とは直感してゐるが、世間の書物は、大半が制度面の視点から解説がされたものであり、知識はそれなりに増えるが、それだけに過ぎない。

一首の御製を此れくらい丁寧に解説してゐる本は他にないでせう。だが現代の学生には、乾いた田に水を引くやうに必要なことなのです。吉田松陰先生の言葉に「人を養ふも此れの四つ(筆者註・涵育薫陶)の者の如くにて、不中不才の人を縄にて縛り、杖にて策うち、一朝一夕に中ならしめんとには非ず。仁義道德の中に沐浴させて、覚えぬ知らず善に移り悪に遠ざかり、旧染の汗自ら化するを待つことなり。」(『講孟筭記卷の三上』第7章・三百六十二頁)と在りまます通り、「一朝一夕に中ならしめんと」早急に「養ふ」ことは出来ないのです。「仁義道德の中に沐浴させて、覚えぬ知らず善に移り悪に遠ざかり、旧染の汗自ら化するを待つことなり。」こそが教育において肝要なることでせう。私の目指すところもまさしくそこにあります。学生諸君が見事に理解と共感を示してくれました。現代の学生も畏るべしであります。

② 英詩を味はふことに共感

道草のやうですが、英語で御製を味はふことに新鮮な魅力を感じてくれ、目を輝かせてくれました。

当初は月に一回の予定でしたが、学生諸君の反応の良さに触発されまして、決意発表第二段を行ひました。「英訳された御製が百三十四首あり、そのあとに乃木將軍の遺歌一首加へて、百三十五首。月に一首づつでは私の余命中に、奈何せん、完成できさうにありません。大学生諸君との古典輪読は、藤新先生の日章工業の宮田工場とここの書庫蔵とで、毎週一度、行はれてをります。そこで、私は毎週一回「御製謹解」の発表をやりたいと思ひます。」と新たな誓ひをししまひました。男子に二言があつてはなりません。

一年後の昨年(平成十七年)の九月初めの、古典輪読会に於きまして、第四十回の発表を行ふことができました。その間、小柳陽太郎先生を初め、多くの学友に助言や感想をいただき、途切れることなく続ける事が出来ました。感謝を衷心より先づ申し上げます。懦夫をして立たしめた先生方や学友のお蔭を胸底に大切に仕舞って前進してゐるところです。

さて、『第二巻 英訳明治天皇御製 謹解』の出版の予定は、今年、平成十八年の十二月にしてをります。今後とも変はらないご指導とご鞭撻のほどを祈念しまして「あとがき」に代へさせて戴きます。

尚、仮名遣ひが正仮名であることに違和感をお持ちになられるかもしれませんが、説明をすれば一冊の本を要します。簡単に、比喻で申しますならば、日本人は、洋服だけでなく和服も着ます。正仮名は、日本の歴史と文化に直結する紋付・羽織・袴の正装であるのご理解して下さい。多少読みづらくとも、辛抱して慣れて下さい。編集に際しまして、仮名遣ひの点だけでなく古典英語もありますので校正では、出版社の株式会社 第一紙行 福岡支店の方には大変ご苦勞をお掛けしました。ご協力に対しまして深く感謝します。

平成十八年四月二十九日



小野吉宣(をの よしのぶ)

〒823-0011宮若市宮田4086-1
TEL 0949-32-3660

福岡県立直方高等学校 教諭
社団法人 国民文化研究会 理事

昭和22年 福岡県宮若市生まれ、
西南学院大学文学部卒。久留米大学付
設高校講師、嘉穂高校教諭、新宮高校
教諭等を経て直方高校教諭(英語)福
岡地区の高校、大学生に古典読書・短
歌創作を指導。分担執筆著書に「戦後
世代からの発言」(正・続)「日本への回
帰」(国分研叢書)「平成の大みうたを
仰ぐ」(展転社)『台湾派遣学生研修団
一報告集』など。

英訳明治天皇御製謹解

平成18年(2006年)5月5日 初版発行

発行者 小野 吉宣

印刷製本 株式会社 第一紙行

